彦根市埋蔵文化財調査報告書第 81 集

道ノ下遺跡

第２次発掘調査報告書

― 宅地造成工事に伴う発掘調査 ―

令和２年３月

彦根市

彦根市埋蔵文化財調査報告書第 81 集

道ノ下遺跡

第２次発掘調査報告書

― 宅地造成工事に伴う発掘調査 ―

令和２年３月

彦根市

例　言

1．本書は彦根市東沼波町に所在する道ノ下遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2．調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等については以下のとおりである。

現地調査　　所在地：彦根市東沼波町字八反切 1036 番　外 26 筆
調査原因：宅地造成工事
期間：平成 29 年 6 月 15 日～平成 30 年 3 月 29 日
整理調査　　期間：令和元年 7 月 18 日～令和 2 年 3 月 29 日

3．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課（平成31年4月1日～彦根市市長直轄組織文化財課）が実施した。各年度の調査の体制は下記のとおりである。

【平成 29 年度】（現地調査）

彦根市教育委員会文化財部文化財課

教育長：善住喜太郎
文化財部長：馬場孝雄
文化財部次長：広瀬清隆
文化財課長：稲野善行
課長補佐兼管理係長：北坂崇
史跡整備係長：北川恭子
文化財係長：三尾次郎
主査：深谷覚
主査：林昭男
主査：戸塚洋輔
副主査：田中良輔
副主査：小林圭一
副主査：渡邊輝
主任：斎藤一真
主任：下高大輔
主事：秋篠功二（平成 29 年 4 月 1 日～文化庁派遣）
主任：船山友祐
臨時職員：沖田陽一
臨時職員：堀田佳典
臨時職員：小山佳祐

【令和元年度】（整理調査・報告書刊行）

彦根市市長直轄組織文化財課

市長：大久保　貴
参事：山本茂春
副参事：広瀬清隆
文化財課長：松宮智之
主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫
課長補佐兼管理係長：牧田歩
主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘
文化財係長：三尾次郎
主査：深谷覚
主査：林昭男
主査：戸塚洋輔
主査：田中良輔
主査：多賀公一
主任：斎藤一真
主事：西坊仁志
主任：下高大輔（平成 30 年 4 月 1 日～熊本市経済観光局派遣）
技師：船山友祐
主事：秋篠功二（平成 29 年 4 月 1 日～文化庁派遣）
技師：内藤京
臨時職員：沖田陽一
臨時職員：樋口杏奈
臨時職員：飯島由紀子

4．現地調査と整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：伊東幸一　小野直子　川窪弘美　小森敏夫　小山元一　後藤憲男　寺村芳和　外海正司
中村義浩　西関邦夫　西村豊和　林竹夫　久木正弘　松井義之　吉田輝一（以上、調査作業員）
久保亮二　樋口杏奈（以上、調査補助員）
整理調査：久保亮二　小野直子（以上、整理補助員）

5．整理調査において京都市立芸術大学教授畑中英二氏、滋賀県教育委員会文化財保護課北村圭弘氏、米原市教育委員会高橋順之氏、日野町教育委員会振角卓哉氏のご教授を得た。

6．本書で使用した遺構実測図は、林　昭男、堀田佳典、樋口杏奈、久保亮二、小野直子、川窪弘美が作成し、遺物実測図は、林、樋口杏奈、久保亮二が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、林が行った。

7．本書の執筆及び編集は、林が行った。

8．本書で使用した方位は真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

9．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。

10．本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器　　須恵器

目　次

例言

第１章　序　論
第１節　調査に至る経緯と経過 ―― 1
(1) 調査に至る経緯 ―― 1
(2) 発掘調査の経過と方法 ―― 2
(3) 整理調査の経過と方法 ―― 2
第２節　地理的・歴史的環境 ―― 3
(1) 地理的環境 ―― 3
(2) 歴史的環境 ―― 7
(3) 道ノ下遺跡の概要と既往調査 ―― 9

第２章　発掘調査の成果
第１節　基本土層 ―― 13
第２節　検出遺構と遺物 ―― 13
(1) 概　要 ―― 13
(2) 包含層・遺構面精査時出土遺物 ―― 13
(3) 自然流路 ―― 14
(4) 竪穴建物 ―― 23
(5) 掘立柱建物 ―― 29
(6) 柵 ―― 38
(7) 溝 ―― 38
(8) 土　坑 ―― 40
(9) 小　穴 ―― 54
(10) その他 ―― 55
(11) 小　結 ―― 56

第３章　総括
第１節　調査の成果と課題について ―― 58
(1) 道ノ下遺跡と芹川の関わり ―― 58
(2) 道ノ下遺跡の古代集落の様相と今後の課題 ―― 58

図版
報告書抄録

第１章　序　論

第１節　調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯（図４～６）

本書は、民間開発により実施した道ノ下遺跡第２次（彦根市東沼波町字八反切 1036 番外 26 筆）発掘調査の成果をまとめたものである。

道ノ下遺跡は、彦根市東沼波町に所在する古墳時代から中世にかけての遺跡である。芹川が形成する扇状地の扇端部の標高約 100.5 mに位置する。当該遺跡の東方約 500 mの位置に東山道が南北に縦貫している。調査地周辺一帯は長年水田や畑などの耕作地としての土地利用が広がっていたが、近年では宅地造成や集合住宅などの開発が進んでいる地域である。今回の調査地点も開発計画以前は耕作地としての土地利用が行われていた。

今回の記録保存を目的とする発掘調査は、民間開発事業者が計画した宅地造成工事に先立ち提出された文化財保護法第 93 条の届出（平成 28 年 11 月 9 日付け）及び調査依頼（平成 28 年 11 月 9 日付け）に基づくものである。届出の提出に伴い、開発予定地における遺構・遺物の有無を確認するため、平成 29 年 1 月 31 日、2 月 8 日、4 月 21 日、4 月 27 日に試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定面積 9,602.54㎡を対象として試掘トレンチを 24 箇所（2 m ×2 m）設定してバックホーにて掘削、細部は人力による掘削・検出作業を行い、遺構・遺物の確認を行った。

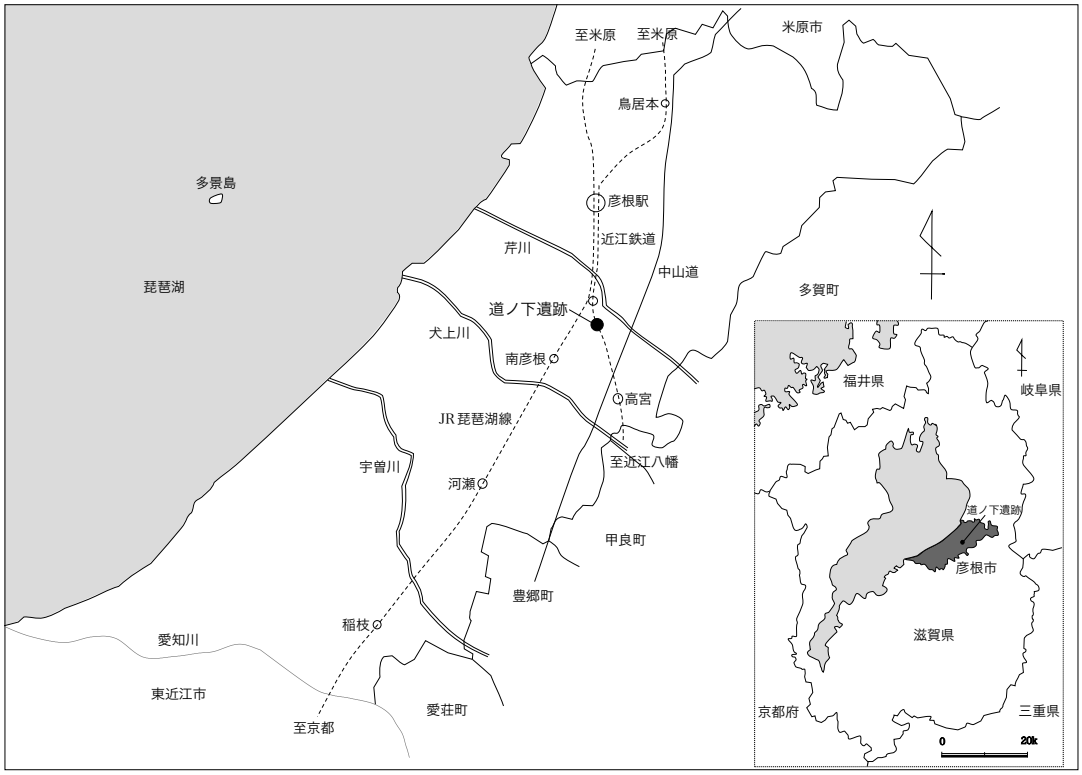


図１　道ノ下遺跡位置図

試掘調査の結果、基本層序として１層：黄灰色粘質土、２層：黄褐色粘質土、３層：黒褐色粘質土､4 層:にぶい黄褐色粘質土の４層を確認した。1･2 層は近現代の耕作土とその床土、3 層は遺物包含層、そして４層上面で遺構を確認することができた。その範囲だが、開発予定地北東部の一部（T12 ～ T15）を除く全域の試掘トレンチで遺構･遺物が確認されたため、開発業者と対応に関する協議を行った。協議の結果、宅地部分に関しては全域で遺構面に対する保護層が確保されることが確認されたため記録保存調査の対象範囲から除外し、開発予定地の道路部分と調整池部分合計 2,015.00㎡について今回の調査対象範囲とした。現地の発掘調査は平成 29 年 6 月 15 日に着手し、平成 30 年 3 月 29 日まで実施した。整理調査に関しては、令和元年 7 月 18 日～令和 2 年 3 月 31 日まで行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者・近隣住民を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

(2) 発掘調査の経過と方法

現地の発掘調査実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（平成 29 年 6 月 15 日付け）を取り交わし、契約締結後に現地調査を開始した。

調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構面直上まで重機による掘削を行い、その後の調査は人力により行った。調査区は１～３区に分けた。調査予定地に一部既存の建物（2・3 区）があるため、1 区の調査を先行して実施し、建物解体後 2・3 区の調査を実施した。グリッド設定だが、今回の調査範囲は、宅地造成工事の道路部分と調整池部分であり著しく狭長であるため、図化作業の効率を勘案して道路形状に沿う方位で４ｍ ×4 ｍ毎のグリッド設定を行い、グリッドの基準となる複数点に平面直角座標値を落とした。グリッド番号は南東端から北西側に向かってアルファベットを付け、南西端から北東側に向かって数字を付けた。遺物は基本的に遺構・土層ごとに取り上げたが、遺構を伴わない遺物の取り上げはグリッドごとに行い、南隅にあるグリッド杭の番号に代表させた。遺構図はグリッドを基準に、1/100 の遺構分布図と 1/20 の遺構平面図を基本とし、状況に応じて 1/10 の遺物出土状況図等を作成したほか､1/20 の調査区および遺構の土層断面図を手実測により作成した。遺構番号は、各種の遺構を通じて一連の番号を与えた。ただし、掘立柱建物と柵は複数の柱穴で構成される遺構であるため、建物と柵ごとに 1 から通し番号を付与した。現地の発掘調査は平成 29 年 6 月 15 日に着手し、平成 30 年 3 月 29 日まで実施した。

(3) 整理調査の経過と方法

整理調査の実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（令和元年 7 月 18 日付け）を取り交わし、契約締結後に整理調査を開始した。

遺構図は、原図作成ののちトレースを行い、図版の作成を行った。遺物は、洗浄・注記・接合・選別・実測、そして原図作成ののちトレースを行い図版の作成を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。同時に調査成果の検討・文章作成・全体の編集作業を行い報告書の刊行となった。

整理調査に関しては、令和元年７月 18 日着手、令和２年３月 31 日まで実施した。これら一連の発掘調査・整理調査によって得られた資料および成果物については彦根市で保管している。

第２節　地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境（図１・2）

道ノ下遺跡は、彦根市東沼波町に位置する。東沼波町は、彦根市のほぼ中央、南東から北西に流れる芹川の左右両岸に広がり、道ノ下遺跡はその左岸に位置する。鈴鹿山脈に源を発する芹川は、河岸段丘を形成しながら犬上郡多賀町の久徳周辺を扇頂として西北方向に扇状地を形成している。このため川水の浸透が著しく、小河川は伏流し、水無川となっている。扇端部となる標高 100 m～ 95 m付近は湧水帯となっており、それまで伏流していた川水が地表面に表出し、以下の氾濫原を形成する。このため、この湧水を利用した水田への用水が発達している地域でもある。道ノ下遺跡は、標高約 100 mの湧水帯に位置し、周辺には用水が多数確認できる。

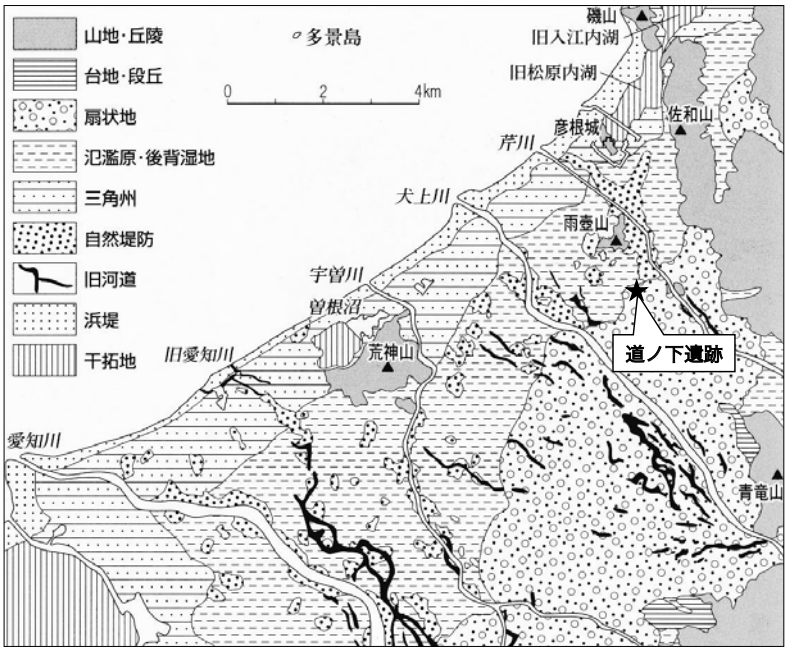


図２　彦根の自然地形（『新修彦根市史』第１巻より）

調査地周辺では宅地化が進んでいるものの、今回の調査地は、調査前まで耕作地または休耕田としての土地利用がなされていた。その地割は、N-50-W の方向軸を持つもので、東に 31°～ 34° 程度振る犬上郡条里とは異なる方向軸を持つ地域である。今回の調査地を含め、芹川左岸に位置する道ノ下遺跡周辺一帯の地割の方向は様々であり、かなり不規則な形状となっている。この状況は芹川の洪水との関わりによるものと推測される。また、道ノ下遺跡周辺には東沼波井などの複数の用水路が走っているが、これは東部で接する大堀で芹川から取水されたものであり、東沼波の東端付近に入ったところで放射状に分岐している。この分岐部分一帯は畑が多いことを考え合わせると、この用水路沿い一帯に、かつて芹川の洪水が押し寄せたことがあったと推定される。今回の調査地に関しても、北東沿いに用水が認めら

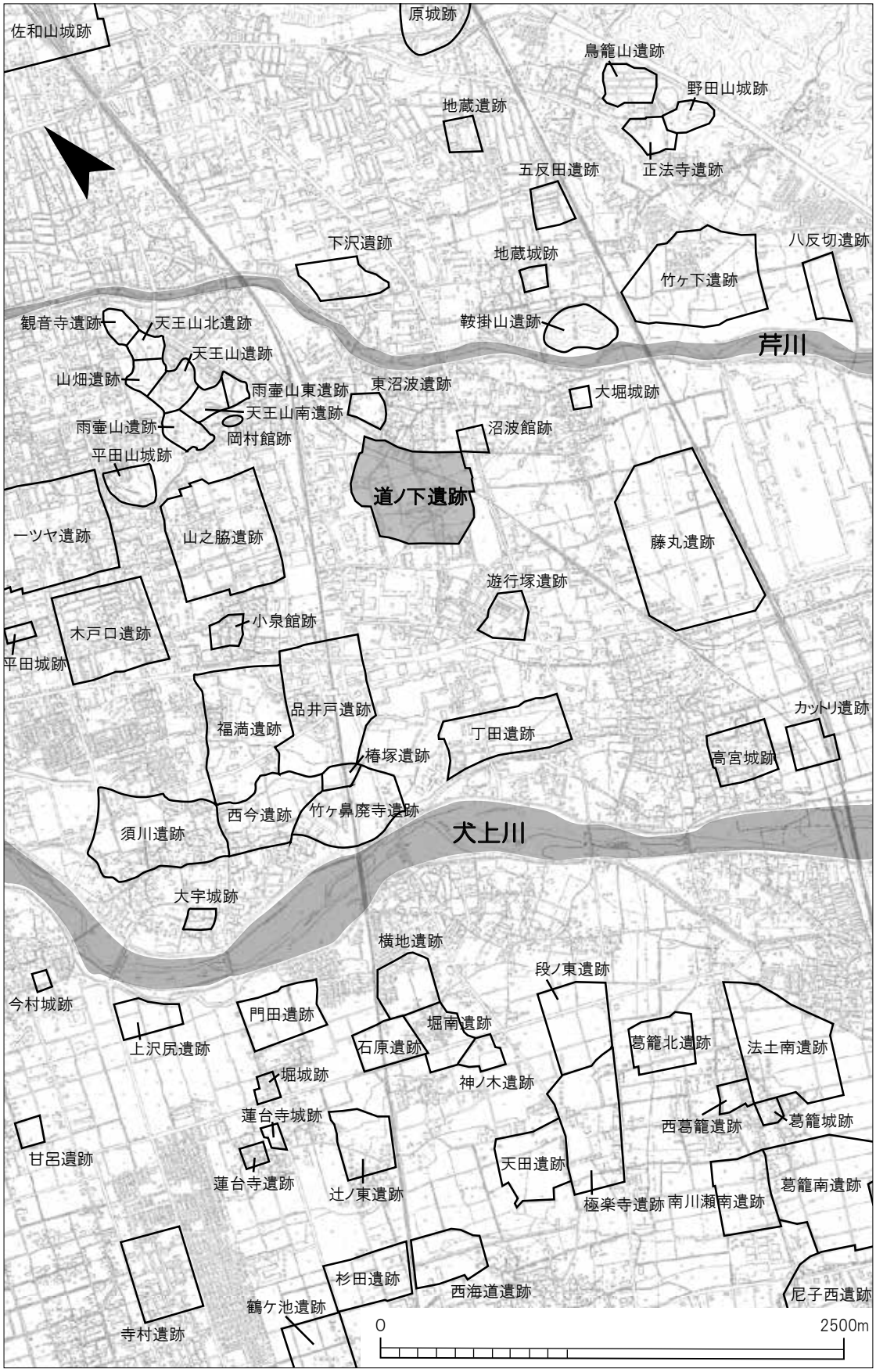


図３　道ノ下遺跡と周辺の遺跡分布図

写真１　道ノ下遺跡周辺の航空写真（平成 21 年 12 月１・２日撮影）

表１　道ノ下遺跡周辺の主要遺跡一覧

市番号	県番号 202-	遺跡の名称	所在地		種類	時代	立地	現状	備考
11	090	佐和山城跡	彦根市	佐和山町	城館跡	中世	山頂・山麓・平地	山林・水田	石垣・曲輪・土塁
31	031	観音寺遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山頂	山林	
32	032	天王山北遺跡	彦根市	芹川町	散布地	古墳～平安	山頂	山林	
33	010	山畑遺跡	彦根市	和田町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
34	033	天王山遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山腹	山林	
35	034	天王山南遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山麓	山林	古墳?
36	038	雨壺山遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
37	039	雨壺山東遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	中世	山麓	山林	古墳?
42	007	一ツヤ遺跡	彦根市	平田町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
43	006	木戸口遺跡	彦根市	平田町	散布地	縄文～中世	平地	水田・宅地	
44	037	山之脇遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
45	044	下沢遺跡	彦根市	西沼波町	散布地	古墳	平地	水田・宅地	
46	046	地蔵遺跡	彦根市	地蔵町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	円墳
47	047	五反田遺跡	彦根市	正法寺町	散布地	古墳	平地	水田	
48	048	鳥籠山遺跡	彦根市	正法寺町	窯跡	奈良	山麓	山林・水田・宅地	瓦窯跡
49	049	正法寺遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	平地	水田	
51	018	須川遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
52	015	福満遺跡	彦根市	西今町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	竪穴建物・土坑・溝・古墳
53	016	西今遺跡	彦根市	西今町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	旧西今東遺跡
54	012	品井戸遺跡	彦根市	小泉町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	掘立柱建物・石帯
55	013	椿塚遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	古墳か?
56	014	竹ヶ鼻廃寺遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	寺院・集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
57	043	道ノ下遺跡	彦根市	東沼波町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地・工場地	
58	139	丁田遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	埋設土器・翡翠大珠
59	042	東沼波遺跡	彦根市	東沼波町	古墳	古墳	平地	畑地	
60	138	遊行塚遺跡	彦根市	高宮町	散布地	奈良	平地	宅地	高宮廃寺跡?
61	052	竹ヶ下遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
62	041	藤丸遺跡	彦根市	大堀町・高宮町	集落跡	古墳～中世	平地	水田・宅地	
63	053	八反切遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
64	140	高宮遺跡	彦根市	高宮町	城館跡	中世	平地	宅地・学校用地	
65	141	カットリ遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～平安	平地	水田	（多賀町）
69	055	甘呂遺跡	彦根市	甘呂町	寺院跡	古墳～中世	平地	水田	甘露寺跡伝承
70	019	上沢尻遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
71	129	門田遺跡	彦根市	堀町	散布地	古墳～奈良	平地	水田	
72	127	蓮台寺遺跡	彦根市	蓮台寺町	城館跡	中世	平地	畑地・宅地	
73	063	寺村遺跡	彦根市	日夏町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
76	130	横地遺跡	彦根市	堀町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	円墳
77	124	石原遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
78	125	辻ノ東遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～奈良	平地	水田・畑地・校地	
79	123	神ノ木遺跡	彦根市	金剛寺町	集落跡	縄文～奈良	平地	水田・社地	円墳
81	117	鶴ヶ池遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・道路	
82	118	杉田遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・工場用地	
83	119	西海道遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地	
84	120	天田遺跡	彦根市	極楽寺町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・宅地	
85	121	極楽寺遺跡	彦根市	極楽寺町	集落跡	古墳～奈良	平地	水田・宅地	
86	122	段ノ東遺跡	彦根市	森堂町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	
87	110	葛籠北遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳群・集落跡	古墳～中世	平地	水田・畑地・校地	円墳
88	111	西葛籠遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳	古墳	平地	宅地	円墳
140	131	堀南遺跡	彦根市	堀町	集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
141	109	法士南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
142	115	南川瀬南遺跡	彦根市	川瀬馬場町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	
143	108	葛籠南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
146	197	尼子西遺跡	彦根市	出町	集落跡	奈良・平安	平地	宅地	
153	008	平田城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地	
154	009	平田山城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地・社地	
155	011	小泉館跡	彦根市	小泉町	城館跡	中世	平地	宅地	
156	021	大宇城跡	彦根市	宇尾町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
159	035	沼波館跡	彦根市	東沼波町	城館跡	中世	平地	水田	
160	036	岡村館跡	彦根市	岡町	城館跡	中世	平地	山林・宅地	
161	040	大堀城跡	彦根市	大堀町	城館跡	中世	平地	水田	
162	045	地蔵城跡	彦根市	地蔵町	城館跡	中世	平地	水田	
163	051	野田山城跡	彦根市	野田山町	城館跡	中世	平地	山林	瓦窯跡
165	056	今村城跡	彦根市	開出今町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
174	094	原城跡	彦根市	原町	城館跡	中世	山頂	その他	
180	107	葛籠城跡	彦根市	葛籠町	城館跡	中世	平地	宅地	
182	126	蓮台寺城跡	彦根市	蓮台寺町	城館跡	中世	平地	宅地	
183	128	堀城跡	彦根市	堀町	城館跡	中世	平地	水田	
203	200	鞍掛山遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	山頂	山林	埴輪片表採の報告あり

れることより、過去の洪水の影響が考慮される。

(2) 歴史的環境（図３・表１）

縄文時代　屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代　前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺遺跡や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曽川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曽川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。また、愛知川流域の稲部遺跡・稲部西遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする拠点集落が確認されている。

古墳時代　古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曽遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。川瀬馬場遺跡周辺地域では、愛知川と宇曽川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稲部遺跡や長野遺跡(愛荘町)でも同時期の集落が形成される。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なまず遺跡（愛荘町）で６世紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。

白鳳～奈良時代　７世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が６箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていな

いが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡・丁田遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ケ鼻廃寺遺跡の南東 2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定東山道が通過しており、交通・流通面において重要な地域であったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物や、硯・石帯・銅匙などの官衙的

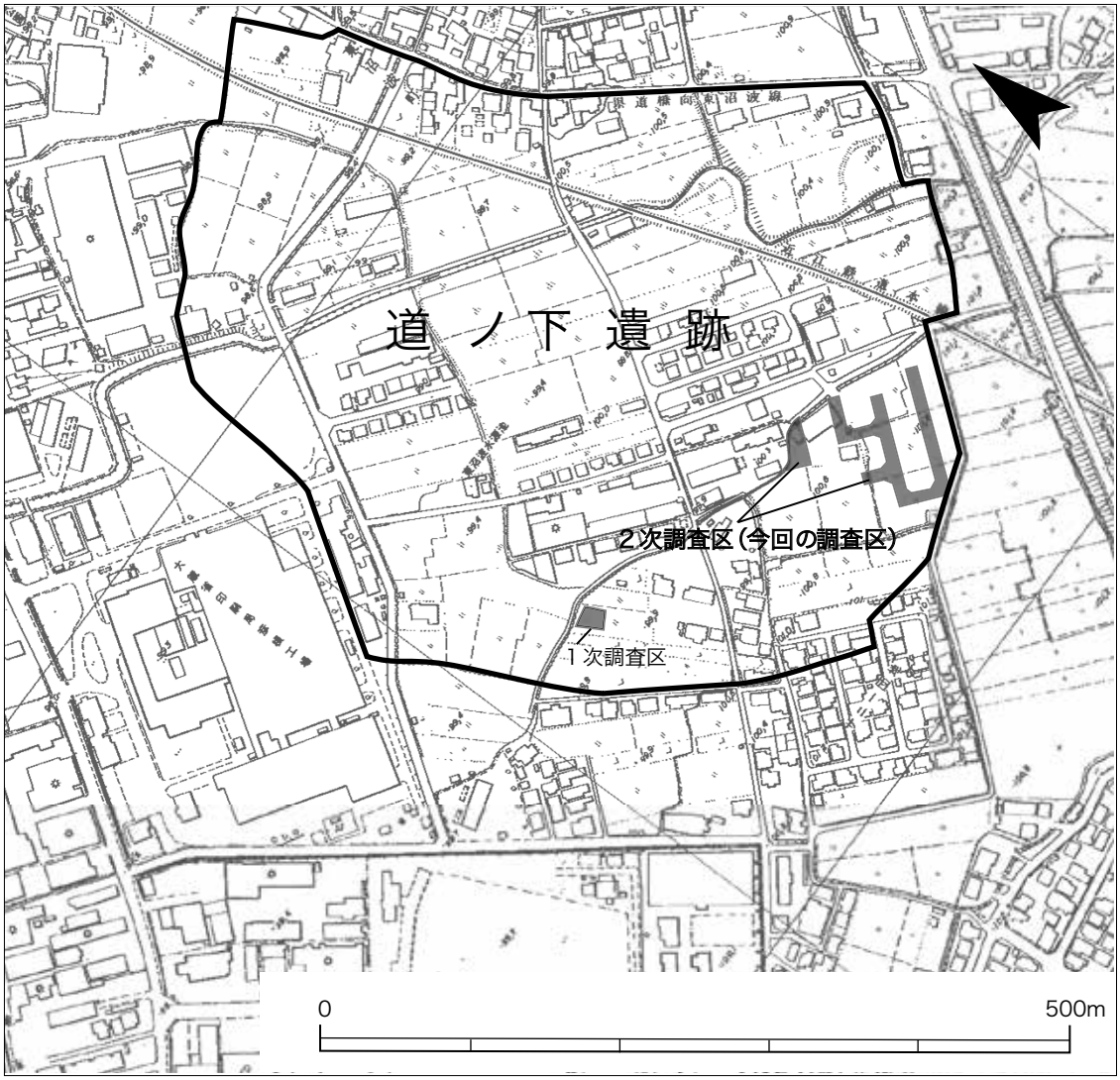


図４　調査区の位置図

表２　道ノ下遺跡発掘調査一覧

調査次数	調査地/調査面積（㎡）/調査原因	調査期間	調査主体	主な時代	主な検出遺構・遺物	文献
1	東沼波町 170 個人住宅建設工事	2012/8/20 ～ 2012/9/5	彦根市教育委員会	平安時代	掘立柱建物、溝、土坑 須恵器	1
2	東沼波町字八反切1036ほか 2,015 宅地造成工事	2017/6/15 ～ 2018/3/29	彦根市教育委員会	奈良時代 平安時代前期	竪穴建物、掘立柱建物、柵、井戸、土坑、小穴、 土師器、須恵器	本書

文献

1. 彦根市教育委員会　2014『平成24年度　彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市教育委員会文化財調査報告書第58集

遺構・遺物が確認されており、これらより現在の JR 南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

宇曽川以南では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領覇流荘の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る墾田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる 70 町が東大寺に施入され、覇流荘が成立した。また、延久２（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡２条７里･8 里･3 条 16 里に弘福寺領平流荘が存在したことが記されており、さらに和銅２（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田壱拾壱町壱段参拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流荘は 8 世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曽川流域では、少し上流側の長野遺跡・なまず遺跡・沓掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産緑釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

中世　中世では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中にあって、宇曽川流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15 世紀末から 16 世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曽川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曽川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では、道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも、日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では、北の京極･浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し、市域一帯は、ちょうど両勢力がぶつかり合う地理的関係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に営まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的重要性より、その後も織田勢力、豊臣勢力へと引き継がれていく。

(3) 道ノ下遺跡の概要と既往調査（図 4、表 2）

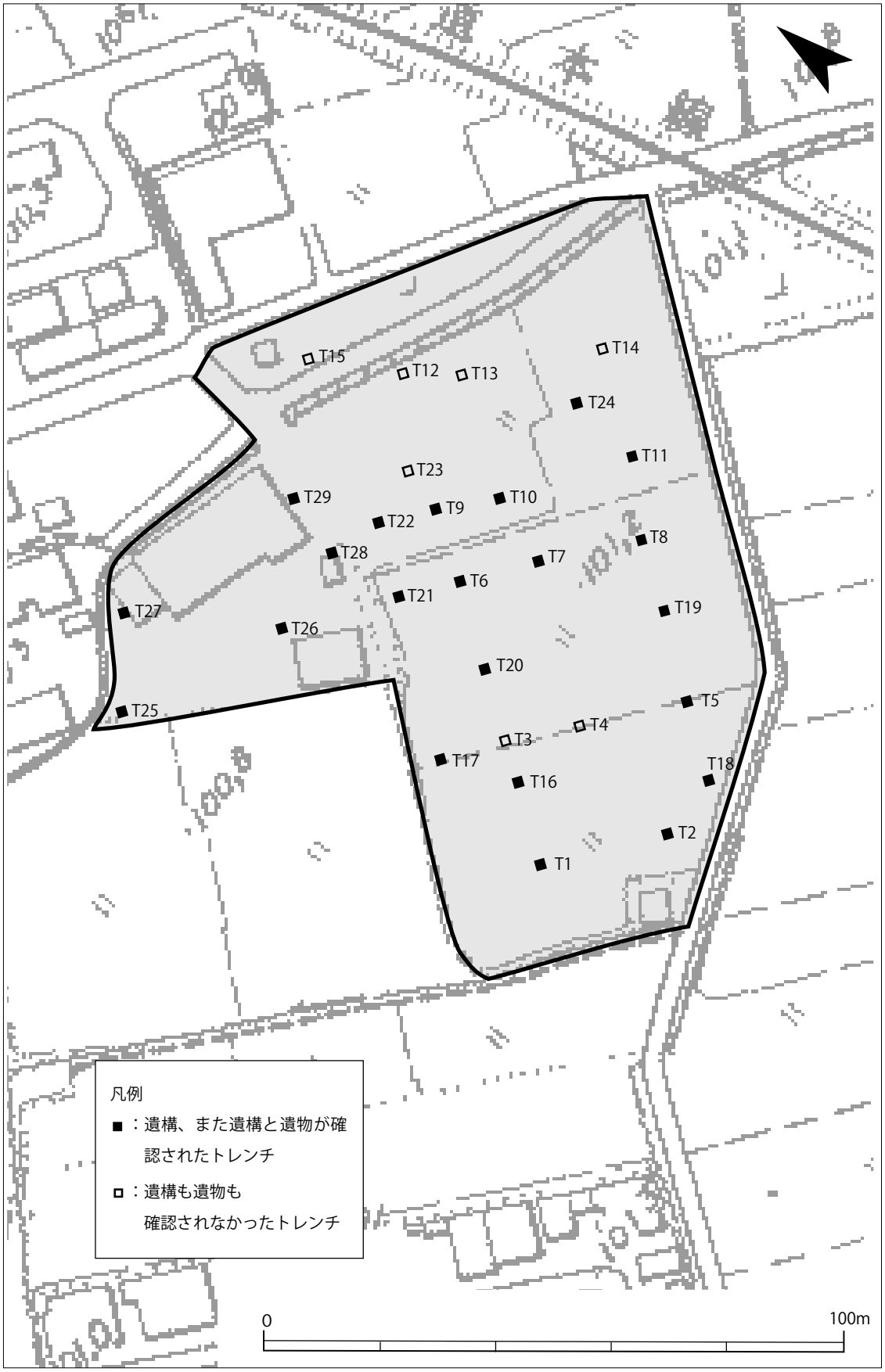
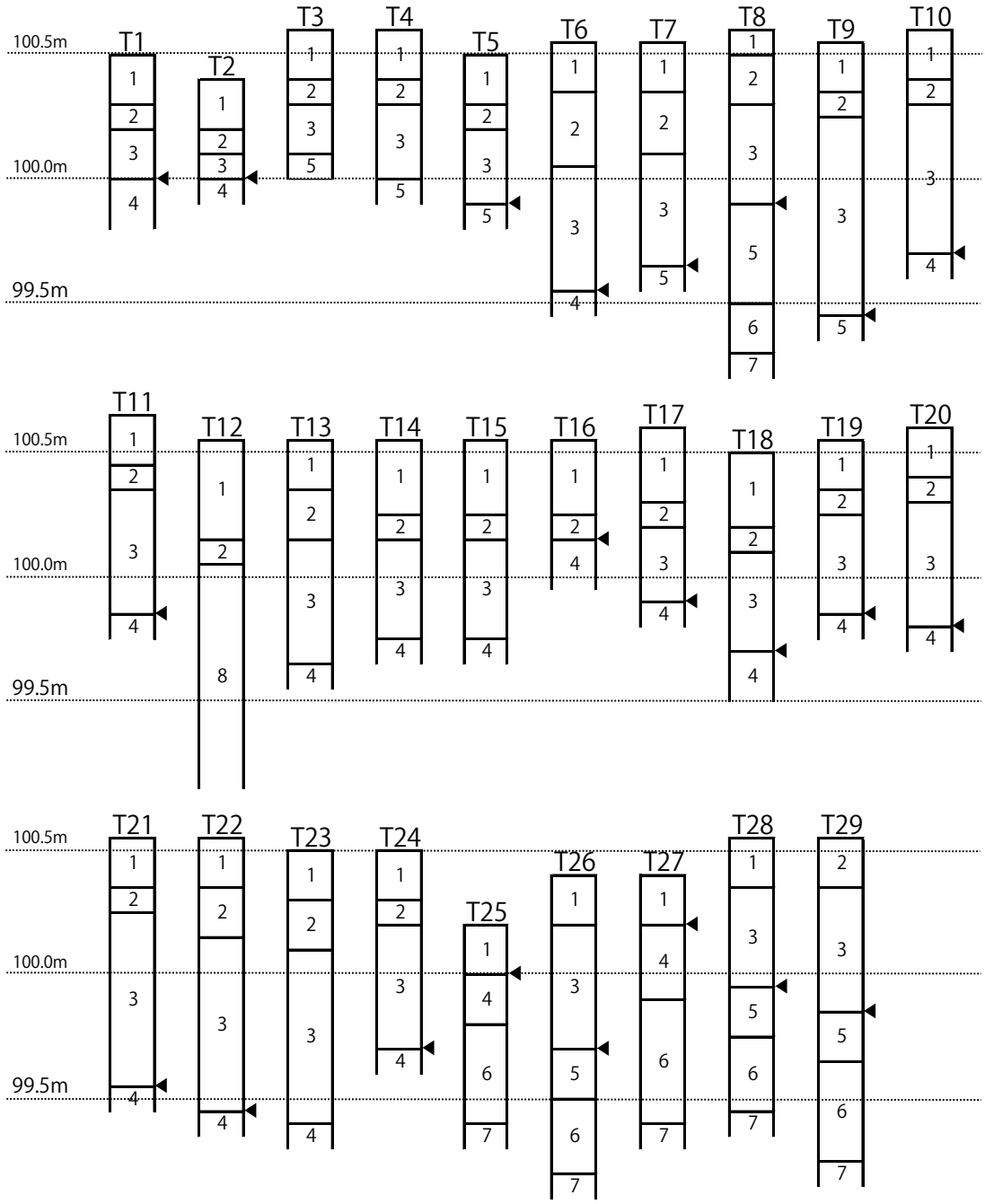


図５　試掘調査のトレンチ位置図



T１～T24

1．黄灰色粘質土（近現代耕作土）
2．黄褐色粘質土（耕作土床土）
3．黒褐色粘質土
4．にぶい黄褐色粘質土
5．黄褐色粘質土
6．褐色砂質土
7．黄褐色砂礫土
8．白灰色砂質土
◀：遺構検出面

T25～T29

1．灰色粘質土（表土）
2．灰色砕石層
3．黄褐色粘質土
4．褐色粘質土
5．灰色粘質土
6．黒褐色粘質土
7．黄褐色粘質土

図６　試堀調査土層断面柱状図

道ノ下遺跡は、彦根市東沼波町に所在する古墳時代から中世にかけての遺跡である。鈴鹿山系から流れる芹川左岸の標高 100 mの扇状地の扇端部に立地している。遺跡周辺は、耕作地が広がっていたが、近年、宅地化や集合住宅建設などの開発が進んでいるが、開発に伴い過去に 1 度調査が実施されている。

≪1 次調査≫

道ノ下遺跡における初めての発掘調査である。平成 24 年度に個人住宅建設工事に伴い彦根市教育委員会によって実施された。調査地は遺跡の西部に位置する。平安時代の遺構が確認されている。検出された遺構は掘立柱建物 1 棟、複数の土坑や小穴などである。出土遺物は、須恵器である。

参考文献

滋賀県立安土城考古博物館　2006『扇状地の考古学』

彦根市　1960『彦根市市』上冊

彦根市　2002『彦根　明治の古地図』二

彦根市　2007『新修彦根市史』第 1 巻通史編　古代・中世

彦根市教育委員会　2014『平成 24 年度　彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市教育委員会文化財調査報告書第 58 集

琵琶湖流域研究会　2003『琵琶湖流域を読む 上 ―多様な河川世界へのガイドブック―』

第２章　発掘調査の成果

第１節　基本土層（図７～12、写真２）

調査地は北西部の一部を除き、ほぼ全域が耕作地または休耕田としての土地利用がなされていた。基本層位としては、Ⅰ～Ⅴ層に分類できる。Ⅰ層は黄灰色粘質土で、近現代の耕作土である。Ⅱ層は黄褐色粘質土で、Ⅰ層に伴う床土である。Ⅲ層は黒褐色粘質土で７～８世紀代の遺物を含む包含層で、15～40㎝の厚さで堆積している。Ⅳ層はにぶい黄褐色粘質土、Ⅴ層は黄褐色粘質土でともに基盤層であり、Ⅳ層上面が遺構検出面となる。ただし、Ⅳ層は機能面と考えられ遺構判別が困難な地区もあったため、その際は適宜Ⅴ層まで掘り下げることにより遺構検出を行った。なお、遺構の埋土は黒褐色粘質土が多いが、Ⅲ層の包含層との判別は極めて難しい。

地理的環境でも記述したが調査地周辺は、芹川の洪水の影響が予想された。今回の調査地では、当初の予想通り微高地はⅣ層からなる安定した地山を形成しており、微高地と微高地の間の低平地には網状の流れ（旧流路）が刻まれ砂礫が堆積している状況が複数確認された。

今回の調査地で検出した遺構面の標高は、調査区東端で約 100.2 m、西端で約 99.2 mを測り、東から西にわずかに地形が下がっている状況が読み取れる。

写真２　調査区第１区南東壁 (A-A') 土層断面

第２節　検出遺構と遺物

(1) 概要（図７）

今回の調査では、奈良時代～平安時代前期の集落関連遺構を検出した。主な検出遺構は竪穴建物２軒、掘立柱建物７棟、柵２条、複数の不定形土坑や小穴などで、遺構の広がりの中心はX＝-83500～-83560、Y＝23520～23550の範囲であった。今回の調査は、宅地造成工事の道路と調整池部分のみの調査であり、複数の掘立柱建物等を確認したが、これらの建物群の分布の中心は掘立柱建物を検出した道路と道路に挟まれた宅地部分に広がると推定される。

(2) 包含層・遺構面精査時出土遺物（図 13・14）

基本層序でも触れたが、調査区全域で黒褐色粘質土（Ⅲ層）の遺物包含層の広がりを確認した。

包含層出土遺物は、土師器（1～5)、須恵器（6～15)、瓦（16･17）である。

1・2は土師器の坏の口縁部である。1は口径13.0㎝、残存器高3.0㎝を測る。まっすぐ立ち上がる口縁部を持つ。3は土師器の甕の口縁部で、口径24.0㎝を測る。やや受口状を呈する口縁部である。　4は土師器の甕で口径15.6㎝、残存器高7.5㎝、残存部の体部最大径は17.2㎝を測る。球形の体部を持つものとみられ、短く外反して開く口縁部が取り付く。口縁部は端部に向けて器壁が薄くなり、端部には外傾する狭い面を有す。体部外面には縦方向のハケメを、体部内面には縦方向のケズリを施す。　5は土師器の鍋の口縁部である。口径36.0㎝、口縁部径42.0㎝、残存器高3.9㎝を測る。体部から大きく屈曲して直線的に開く口縁部である。口縁端部は外側に面を有する。外面には煤が付着しており、内面にはハケメを施す。

6～8は須恵器の坏蓋である。6は口径12.1㎝、器高3.7㎝を測る。天井部が丸みを持つもので、ヘラ切り後ロクロナデが施される。7は口径17.4㎝、残存器高3.0㎝を測る。失われているが、天井部に宝珠つまみを持つと思われる。口縁部は内側に低いかえりを持つ。かえりの端部は口縁端部よりも上位に納まる。8は口径12.0㎝、残存器高1.0㎝を測る。失われているが、天井部に宝珠つまみを持つと思われる。口縁端部は下方に小さく折り曲げ、外側に垂直な面を持つ。9～13は須恵器の坏身である。9は口径12.2㎝、器高3.7㎝を測る。平らな底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面とも磨滅が激しい。11は底径6.8㎝、残存器高3.7㎝を測る。12は底径13.8㎝　器高4.5㎝を測る。13は底径14.7㎝、器高4.4㎝を測る。12・13とも直線的に開く体部及び口縁部を持つが、12は高台が低く外側に開くが、13は比較的高台が高い。14・15は鉢と推定される。16・17は平瓦である。いずれも磨滅が激しいが17はわずかに布目が確認される。

包含層出土遺物の時期幅はおおむね7世紀～8世紀と考えられる。

遺構面精査時出土遺物は、土師器（18～20）、須恵器（21･22）である。

18・19は土師器の甕の口縁部である。18は口径24.0㎝を測る。やや受口状を呈する口縁部である。19は口径24.1㎝、残存器高6.9㎝を測る。口縁部は内湾気味に開く受口状を呈し、口縁端部はやや内傾する面を持つ。体部内外面とも斜め方向のハケメを施す。20は土師器の鍋の口縁部である。大きく屈曲してほぼ水平に開く口縁部で、口縁端部には内傾する面を有す。21は須恵器の坏身の口縁部である。22は平瓦である。

遺構面精査時出土遺物に関しても､遺物量が少ないという点は考慮にいれる必要があるが、包含層出土遺物同様、概ね7世紀～8世紀の時期幅に納まると考える。

(3) 自然流路（NR74・NR79・NR80・NR314・NR356・NR362・NR563・NR565・NR586）

複数の自然流路を確認した。いずれも概ね東西方向を向いており、検出高は東端で約100.0m、西端で約99.2mを測り、傾斜に沿って東から西に向かって流れる。各自然流路から出土遺物がなかったため、埋没時期などは不明である。ただ、NR362は上面でSB7やSX336を検出しているため、SB7やSX336構築以前の堆積である。また、重機掘削の際、遺物包

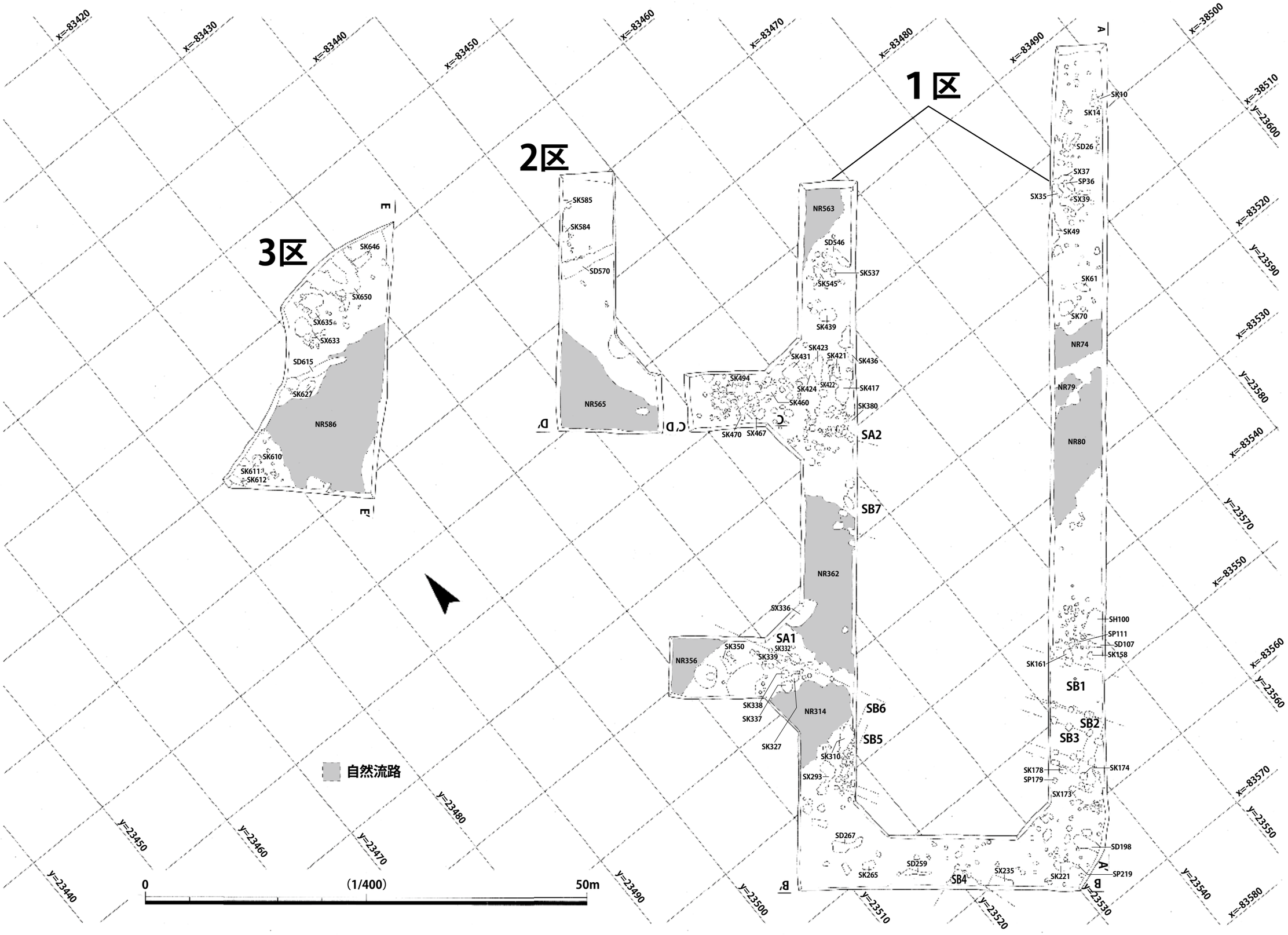

1区
2区
3区
SA1
SA2
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
SB7
NR563
NR565
NR586
NR362
NR356
NR314
NR74
NR79
NR80
SD546
SK537
SK545
SK439
SK423
SK431
SK421
SK436
SK494
SK424
SK422
SK417
SK460
SK380
SK470
SX467
SK585
SK584
SD570
SK646
SX650
SX635
SX633
SD615
SK627
SK610
SK611
SK612
SK10
SK14
SD26
SX37
SP36
SX35
SX39
SK49
SK61
SK70
SH100
SP111
SD107
SK158
SK161
SK178
SP179
SK174
SX173
SD198
SP219
SK221
SX235
SD259
SD267
SK265
SX293
SK310
SK327
SK338
SK337
SK350
SK332
SK339
SX336
自然流路
0
(1/400)
50m

図７　調査区遺構全図

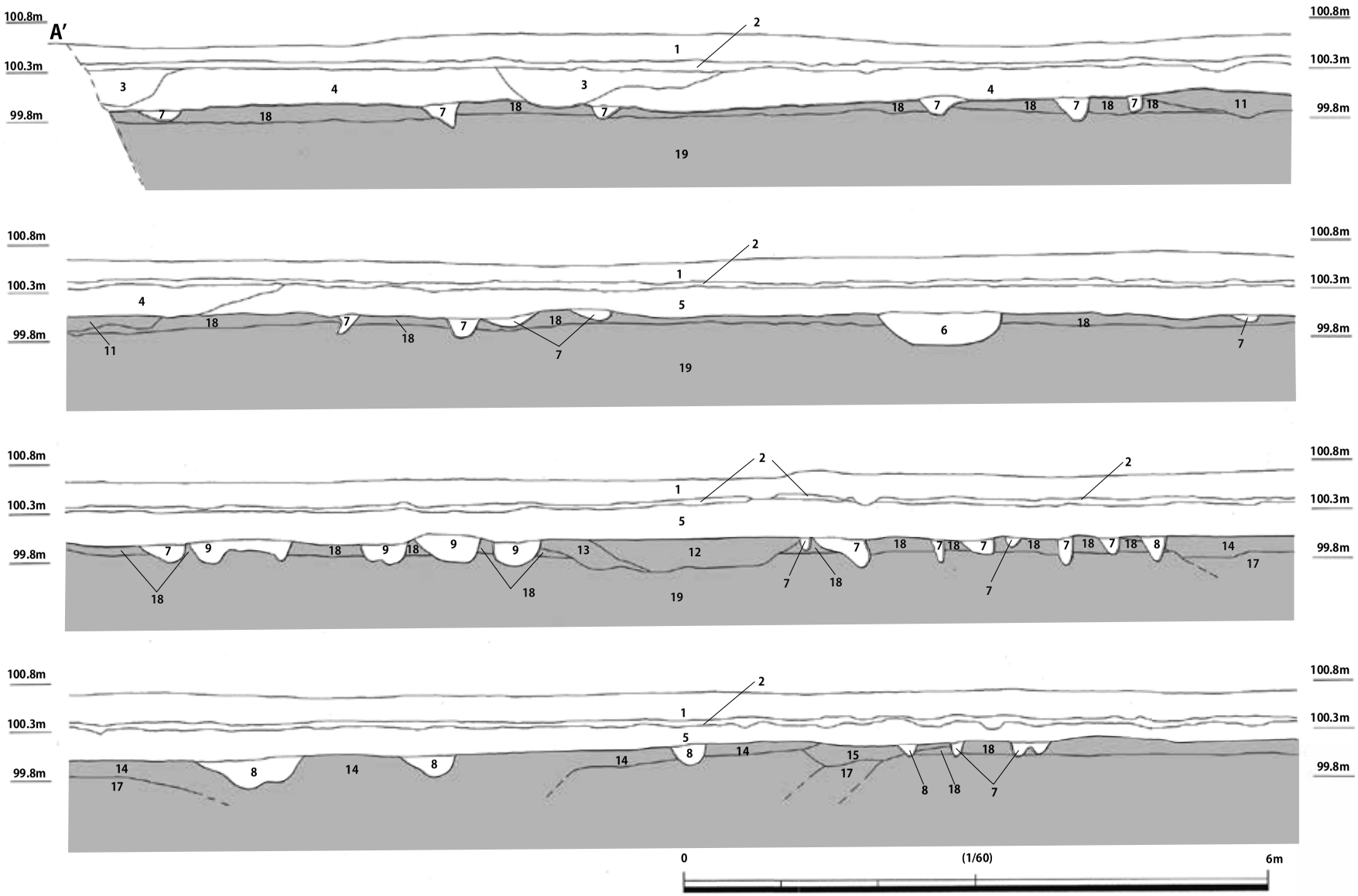


図８　調査区第１区南東壁（A-A'）土層断面図 (1)

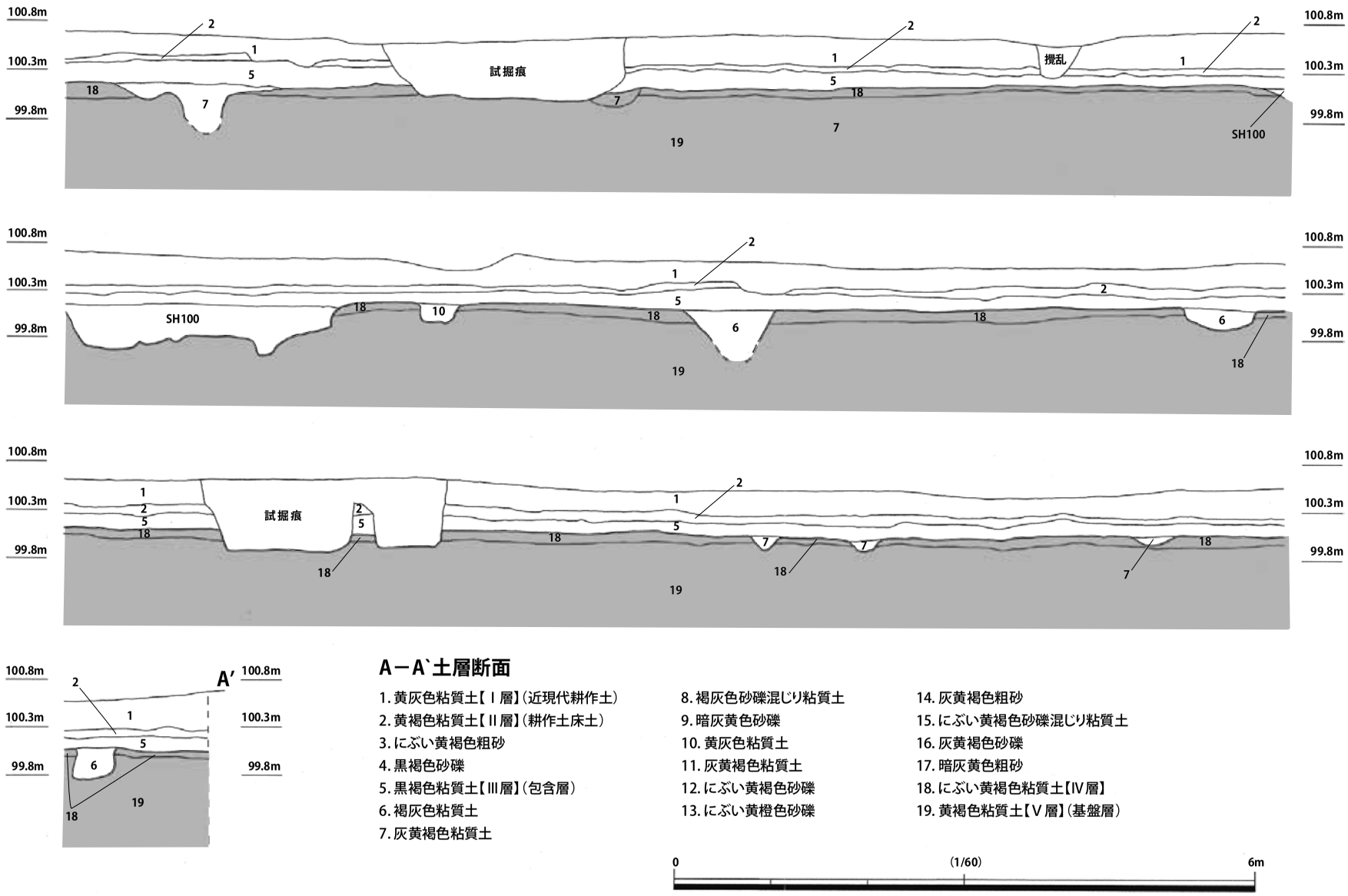


図９　調査区第１区南東壁（A-A'）土層断面図 (2)

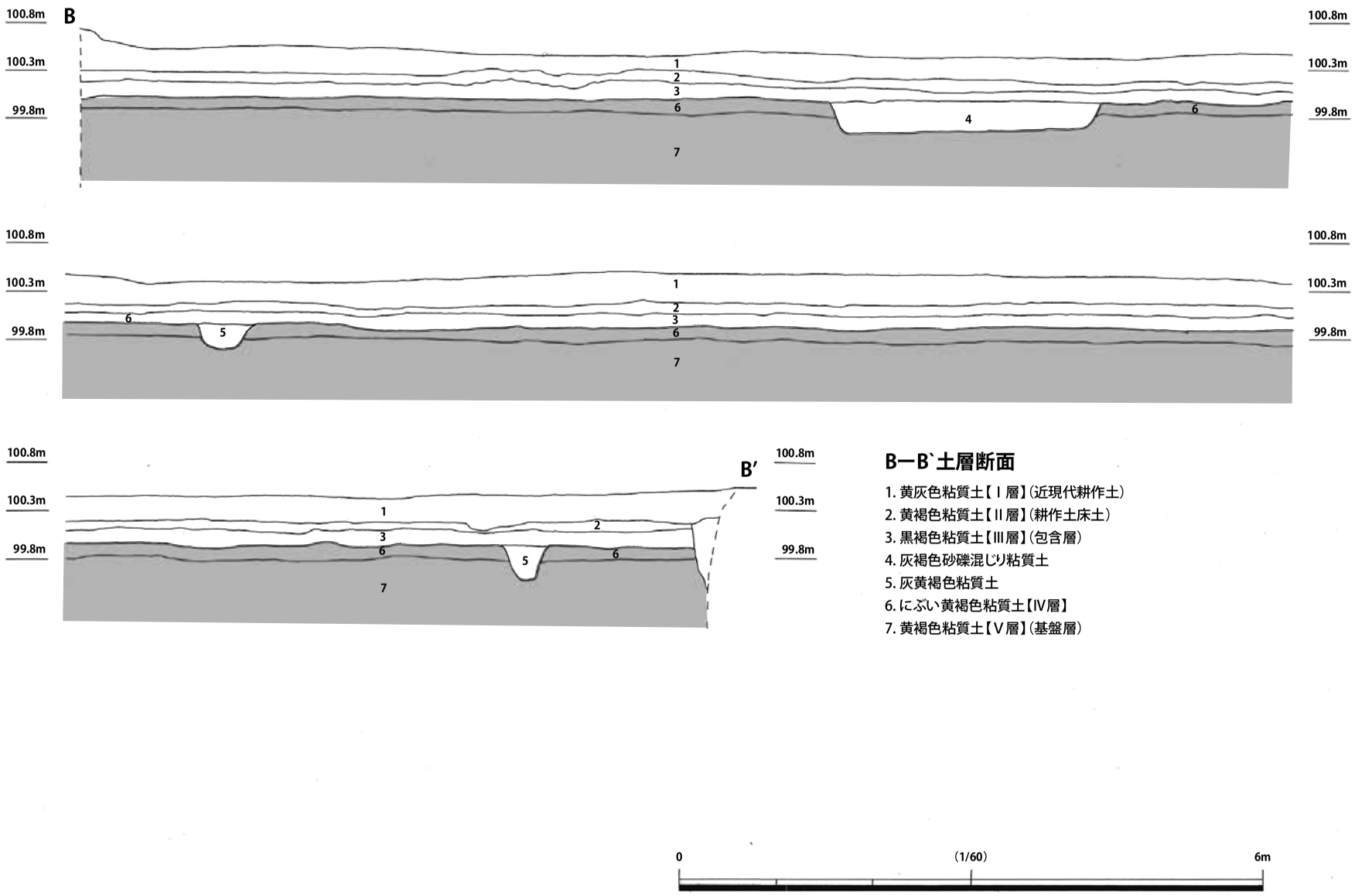
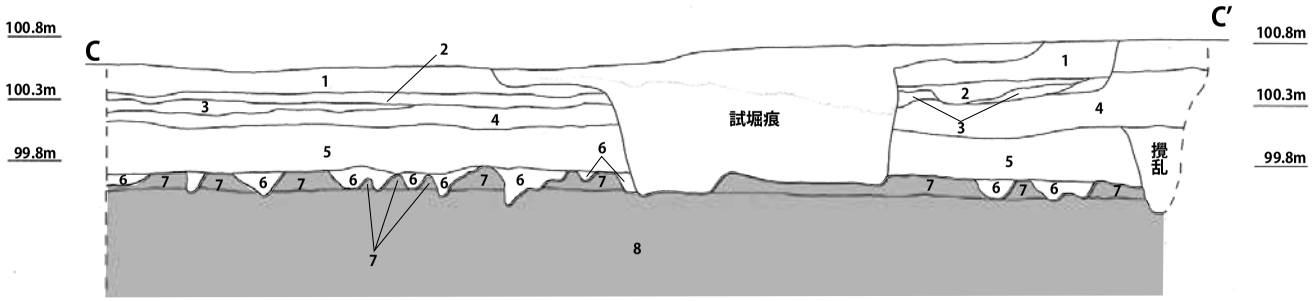
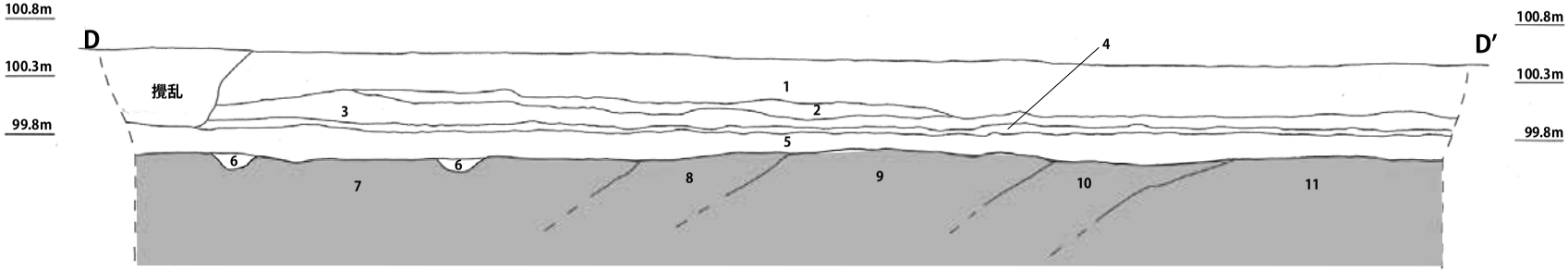


図 10　調査区第 1 区南西壁（B-B'）土層断面図



C―C`土層断面

1. 黄灰色粘質土【Ⅰ層】(近現代耕作土)
2. 黄褐色粘質土【Ⅱ層】(耕作土床土)
3. 褐灰色砂礫混じり粘質土
4. にぶい黄褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土【Ⅲ層】(包含層)
6. 灰黄褐色粘質土
7. にぶい黄褐色粘質土【Ⅳ層】
8. 黄褐色粘質土【Ⅴ層】(基盤層)



D―D`土層断面

1. 灰色砂礫混じり粘質土
2. にぶい褐色粗砂
3. 黄灰色粘質土【Ⅰ層】(近現代耕作土)
4. 黄褐色粘質土【Ⅱ層】(耕作土床土)
5. 黒褐色粘質土【Ⅲ層】(包含層)
6. 灰黄褐色粘質土
7. にぶい黄褐色粘質土【Ⅳ層】
8. 黄褐色粘質土【Ⅴ層】(基盤層)

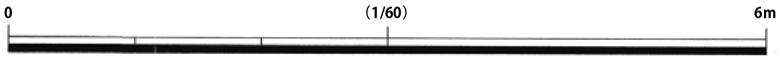


図 11　調査区第 1 区南西壁（C-C'）・第 2 区南西壁土層断面図

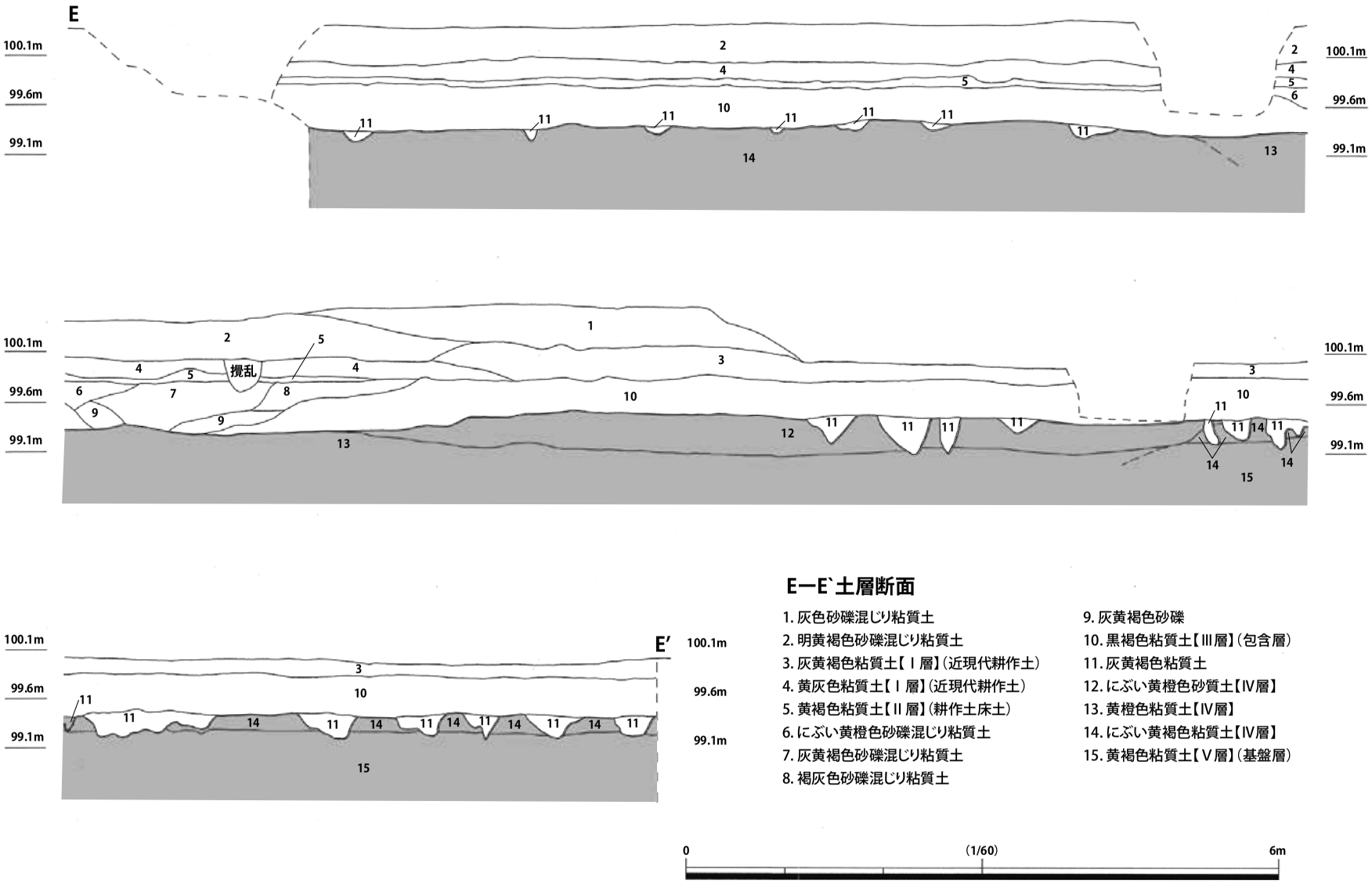


図 12　調査区第 3 区南東壁（E-E'）土層断面図

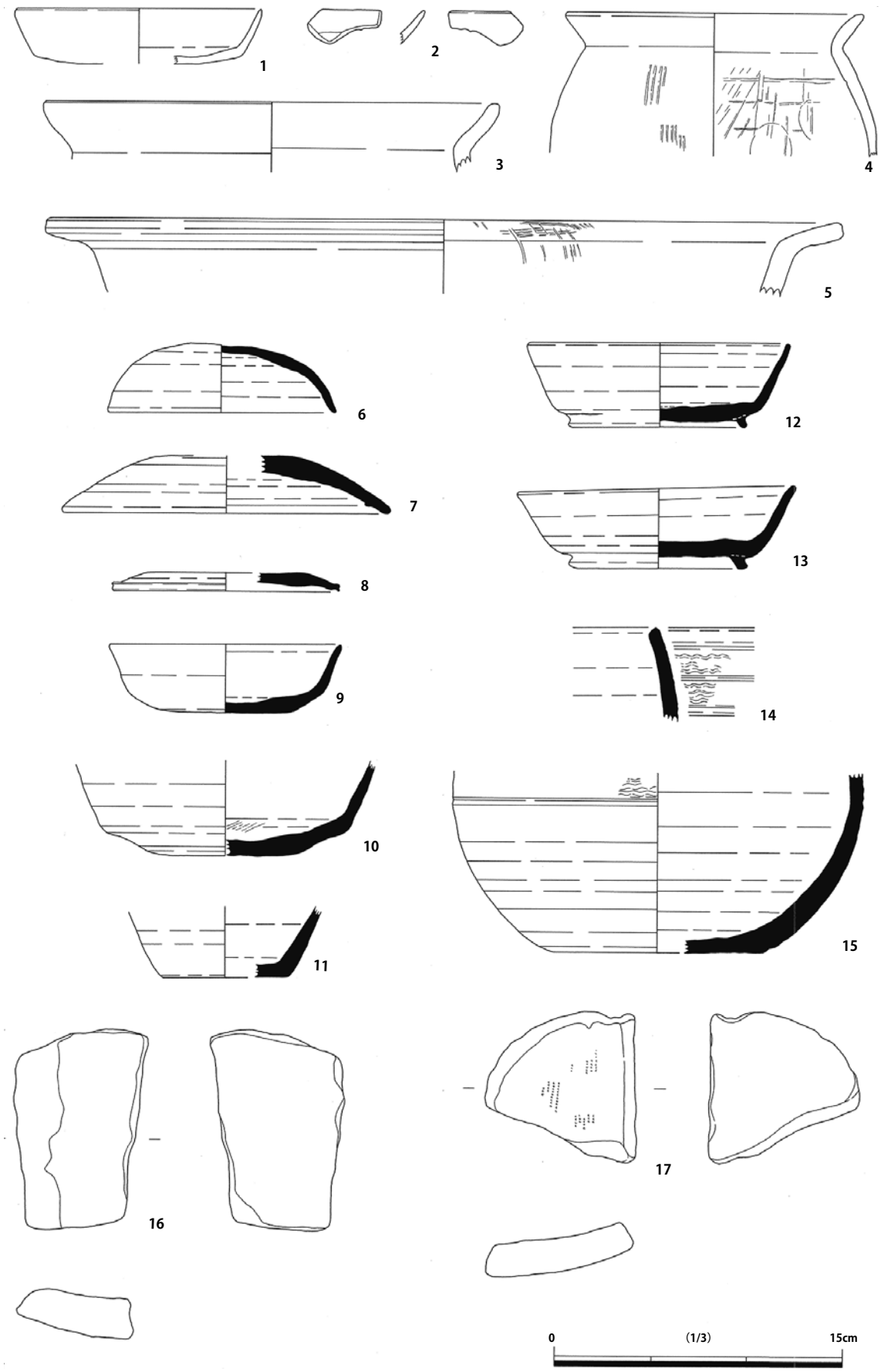


図 13　包含層出土遺物実測図

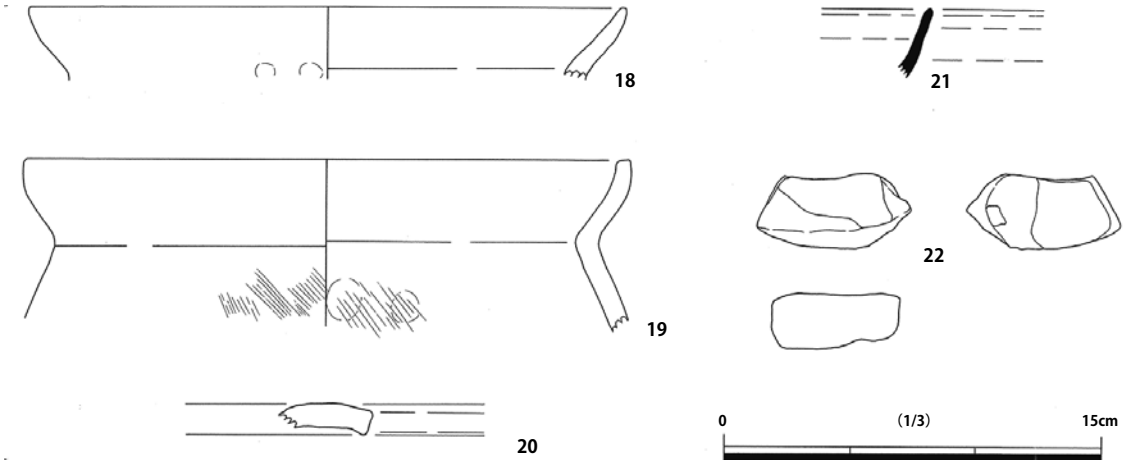


図 14　遺構面精査時出土遺物実測図

含層であるⅢ層上面でも同様の東西方向の自然流路を複数確認しており、調査区 A － A` 断面の 3･4 層がそれに対応する。このように、今回の調査区では、東西方向の自然流路が複数時期・複数本確認できた。これらは、芹川の洪水等の影響で形成されたものと推測され、調査地周辺が断続的に芹川の影響をうける地理的環境であったことを物語っている。

(4) 竪穴建物（SH100・SH235）

SH100（図 15 ～ 18、表 3）

調査区第 1 区の南側で検出された竪穴建物である。調査区端にかかっているため、概ね平面プラン半分ほどの検出となった。検出高は約 100.2 mで周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。平面形は隅丸方形で残存部の 1 辺は約 2.9 m、深さは約 0.43 mを測る。建物の主軸はおよそ N － 32° － W の方位をとる。竪穴外周辺には垂木など建物に関連する遺構は確認されなかった。竪穴内部については、2 箇所で主柱穴を確認している。その主柱穴の平面形は円形で直径約 0.26 ～ 0.35 m、深さは約 0.20 ～ 0.25 m、柱間は約 1.85 mを測る。床面東部には調査区端にかかる位置で扁平な石が据えられており、周囲の埋土の炭化物の含有比率が極めて高いため、調査区外にカマドないし炉跡が存在する可能性が推測される。石材の西側には、断面皿状の窪みが、南西側には溝が穿たれている。床面の貼土、壁際溝は確認されなかった。

竪穴内の埋土は、1 層（上層）：褐灰色砂礫混じり粘質土、2 層（下層）：黒褐色粘質土の 2 層に分けられる。遺物に関しては、1 層と 2 層にわけて取り上げを行った。

1 層の出土遺物は、土師器（23）と須恵器（24 ～ 26）である。

23 は土師器の甕の口縁部である。口縁部は内湾気味に開く受口状を呈し、口縁端部はやや内傾する面を持つ。24・25 は須恵器の坏蓋である。25 は S 字状の口縁端部を持つ。26 は須恵器の坏身である。口径 8.2㎝、残存器高 3.0㎝を測る。口縁部はまっすぐ立ち上がる。

下層（2 層）の出土遺物は、土師器（27 ～ 34）と鉄製品（35）、小片で図化はできなかったが須恵器も確認されている。

27・28 は土師器の坏である。27 は口径 12.0㎝、残存器高 2.5㎝を測る。内湾気味に開

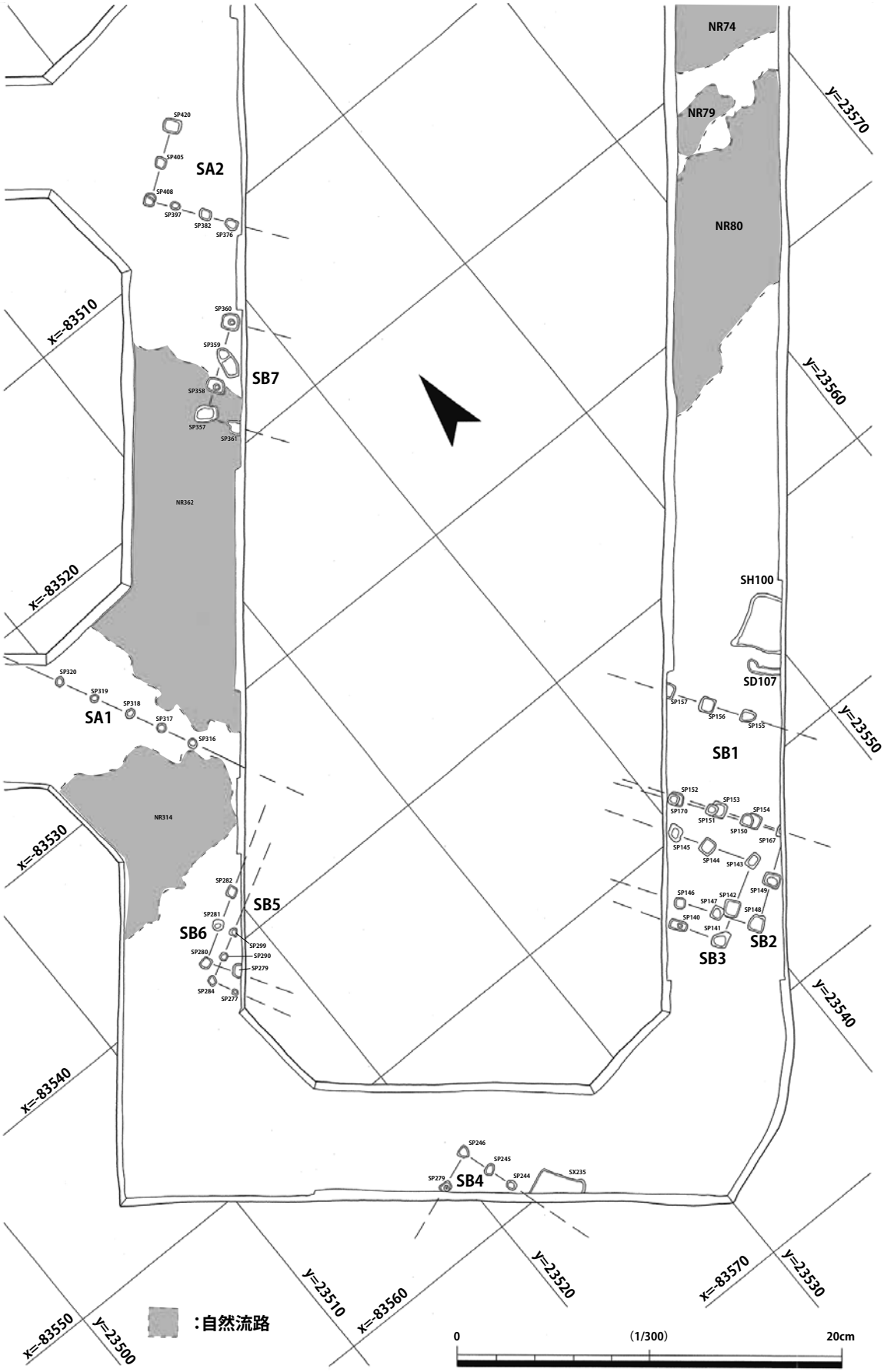


図 15　調査区第 1 区建物群平面図

写真３　調査区第１区建物群〔垂直写真〕

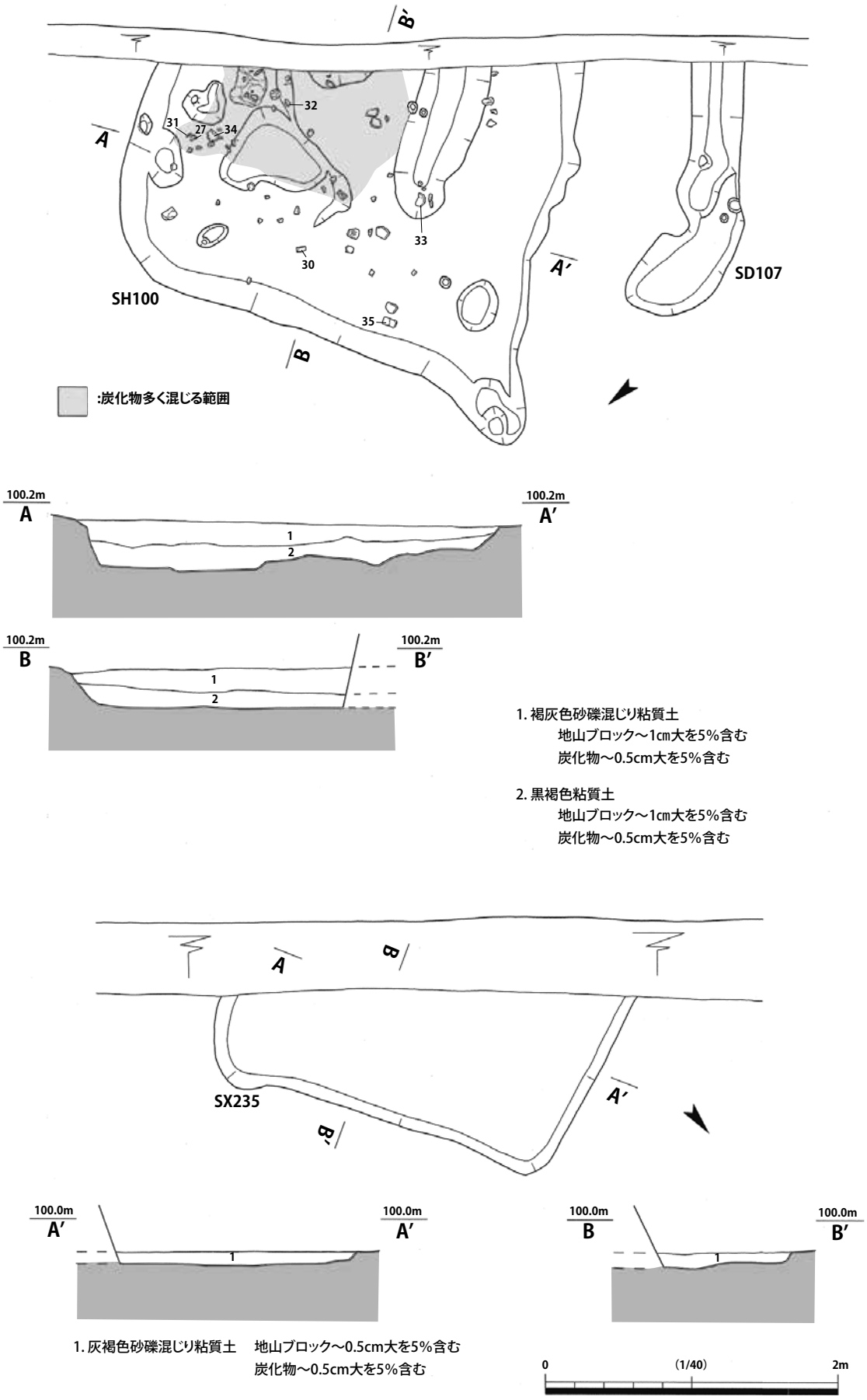


図 16　竪穴建物（SH100・SH235）平面図・断面図

く口縁部を持つ。29 ～ 34 は土師器の甕である。30 は、直線的に開く口縁部で、端部には内傾する面を持ち、沈線が 1 条巡る。31 は、直線的に開く口縁部で、端部には内傾する面を持つ。32 は受口状を呈する口縁部である。33 は口径 11.8㎝、残存器高 8.6㎝を測る。直線的に開く口縁部を持つ。34 は口径 12.8㎝、残存器高 7.2㎝を測る。球形の体部を持つものとみられ、短く外反して開く口縁部が取り付く。口縁部は端部に向けて器壁が薄くなり、端部には外傾する狭い面を有す。体部外面上半部には斜め方向のハケメを、体部内面には横方向と斜め方向のハケメを施す。35 は薄い板状の金属製品である。縦 6.0㎝、横 7.8㎝、厚さ 0.4㎝を測る。目視での観察であるが、表面は平滑な面を呈す。裏面は、4 隅に鋲状の突起が確認でき、その突起の断面形は方形を呈す。中央には、推定で縦 0.9㎝、横 1.7㎝ほど

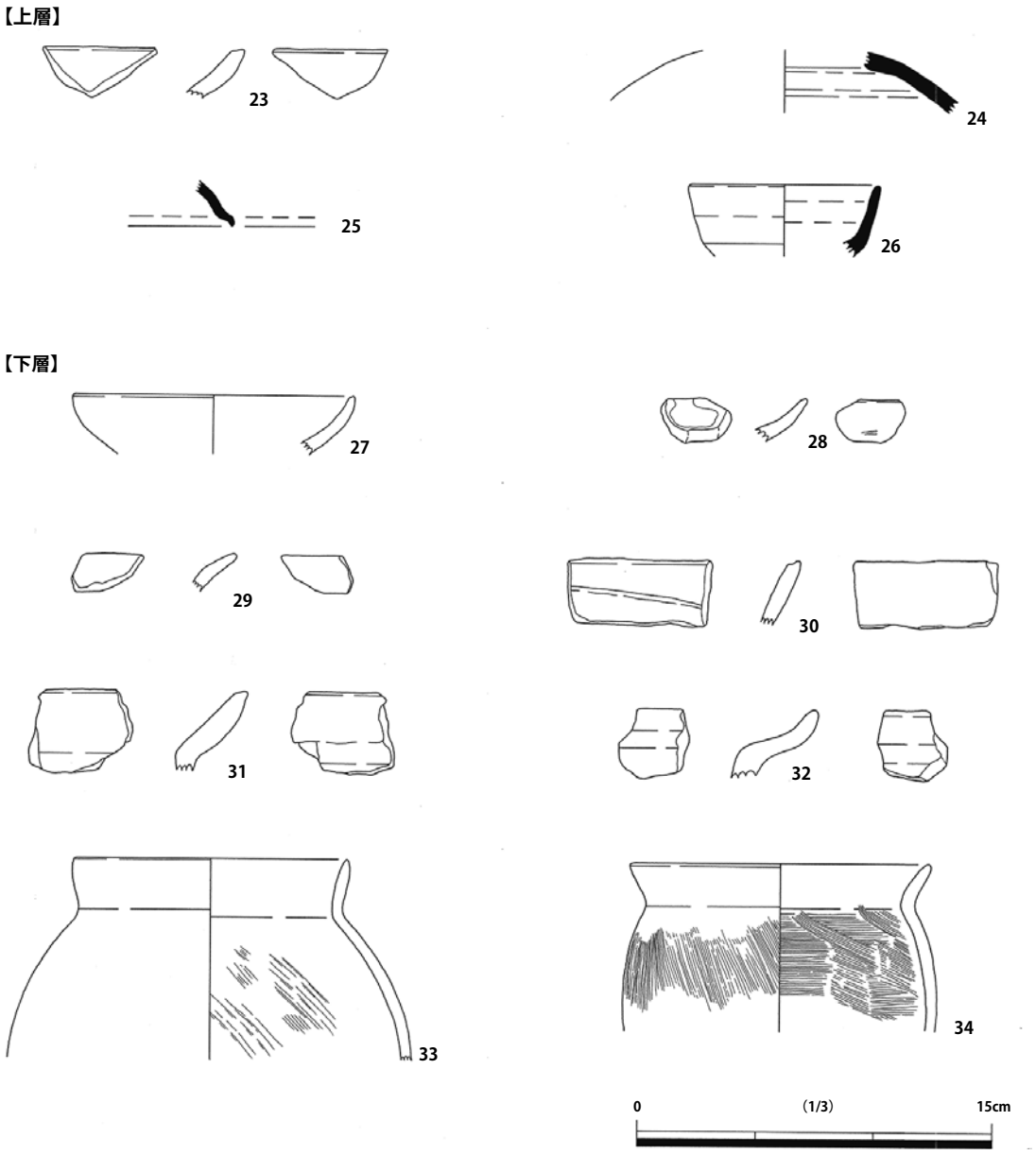


図 17　SH100 出土遺物実測図（1）

の平面楕円形の穿孔が穿たれており、その穿孔の左右にも各１箇所づつ鋲状の突起が確認できる。そして、裏面全体に木目の模様が確認できる。以上の観察状況より、この金属製品は、何らかの木製品（材）に取り付けられていた金具と推定される。金属製品裏面が木材との設置面（固定面）と考えられ、時間をかけて木材が腐っていく過程のなかで金属製品の錆も進行し、木目が転写される形で木目模様が残ったと推定される。また、鋲状の突起は、木材と金属製品を固定していた鋲と考えられ、木材が失われたことにより突起だけが残ったと推定される。

SH100 の時期は、出土遺物の大半が７世紀後半から８世紀前半を中心とすることより概ね当該期と考えられる。しかし、１層（上層）で１点だけ８世紀後半と思われる遺物が確認されている。資料が１点で小片であり、また１層（上層）からの出土ということより、混入の可能性も否定できないが、現段階では、当該遺構の時期は幅を持たせて７世紀後半～８世紀代と考えておきたい。

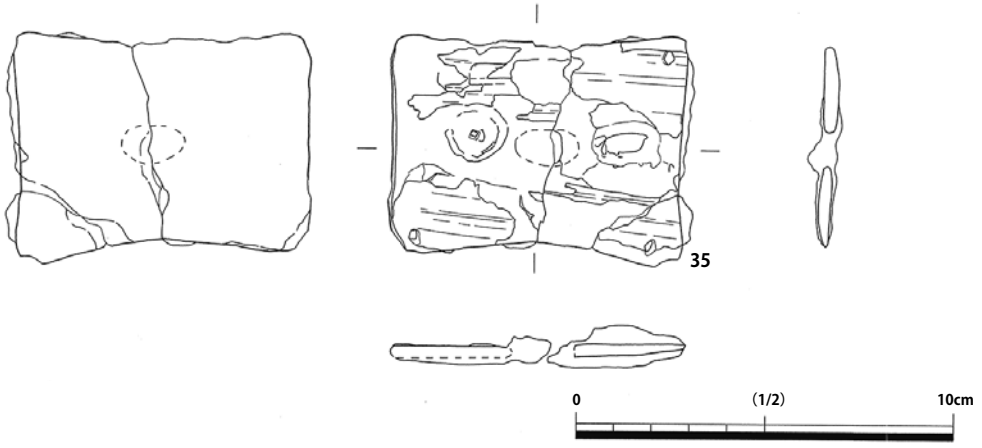


図 18　SH100 出土遺物実測図（2）

SH235（図 16）

調査区第１区の南西側で検出された平面隅丸方形の竪穴建物である。調査区端にかかっているため、概ね平面プラン半分ほどの検出となったが検出部の最大幅は約 2.56 mを測る。深さは約 0.11 mを測り非常に浅い。平面プランの主軸はおよそＮ－30°－Ｗの方位をとる。竪穴内部にも外部にも主柱穴が確認されない。埋土は灰褐色砂礫混じり粘質土の１層である。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SH100 と主軸方位が同じため、SH100 と同時期または極めて近い時期と推定される。

表３　竪穴建物一覧

建物	平面形状	長辺×短辺（m）	深さ（m）	床面積（㎡）	主軸方位	出土遺物	挿図	写真図版
SH100	隅丸長方形	2.90×2.35（以上）	0.43	6.82（以上）	Ｎ－32°－Ｗ	土師器（23・27～34）、須恵器（24～26）、金属製品（35）	16～18	3~5
SH235	隅丸長方形	2.56×1.45（以上）	0.12	3.71（以上）	Ｎ－30°－Ｗ		16	

(5) 掘立柱建物（SB1・SB2・SB3・SB4・SB5・SB6・SB7）

SB1（図 19・22、表 4･5）

調査区第 1 区の南側で検出された掘立柱建物である。検出高は約 100.1 mで周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。SB2 と重なりあう位置にあるが、柱穴の切り合い関係より SB1 廃絶後に SB2 が構築されている。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 2 間（約 5.20 m）× 桁行 3 間（約 6.20 m）以上で、建物面積は約 32.24㎡以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N － 33° － W の方位をとる。柱間は梁行で約 2.60 m、桁行で約 1.93 ～ 2.30 mを測る。柱穴は、SP152・SP153・SP154・SP155･SP156･SP157 で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形で 1 辺は約 0.62 ～ 0.83 m、深さは約 0.25 ～ 0.55 mを測る。柱痕は、平面円形で直径は約 0.26 ～ 0.28 mを測る。

遺物は、SP152 から小片のため図化していないが土師器と須恵器が、SP154 から土師器（36・37）が出土した。

36・37 は土師器の坏である。36 は口径 15.6㎝、残存器高 3.6㎝を測る。体部は、やや内湾気味に開く。器表の内外面に赤褐色の顔料を塗布している。37 にも赤褐色の顔料は塗布されている。

SB1 の時期は、出土遺物より 7 世紀後半～ 8 世紀前半と考えられる。

SB2（図 20・22、表 4･5）

調査区第 1 区の南側で検出された掘立柱建物である。検出高は約 100.1 mで周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。SB1・SB3 と重なりあう位置にあるが、柱穴の切り合い関係より SB1 廃絶後に SB2 が構築され、SB2 廃絶後に SB3 が構築されている。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 2 間（約 5.00 m）× 桁行 3 間（約 6.00 m）以上で、建物面積は約 30.00㎡以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N － 34° － W の方位をとる。柱間は梁行で約 2.40 ～ 2.60 m、桁行で約 1.86 ～ 2.22 mを測る。柱穴は、SP146・SP147・SP148・SP149・SP150・SP151・SP167・SP170 で構成され､掘り方の平面形は隅丸方形で 1 辺は約 0.57 ～ 0.88 m､深さは約 0.14 ～ 0.54 mを測る。柱痕は、平面円形で直径約 0.40 ～ 0.46 mを測る。建物の角部分の柱穴である SP148 は他柱穴より深く、底部には直径 3 ～ 5㎝の礫が比較的多く確認された。

遺物は、SP147 から須恵器（41）が、SP150 から土師器（38）と須恵器（39）が、SP151 から須恵器（40）が、SP170 から土師器（43）がそれぞれ出土している。SP151 からは小片のため図化していないが土師器も出土した。

38 は土師器の坏である。口径は 15.0㎝､器高は 3.7㎝を測る。体部は､やや内湾気味に開く。器表の内外面に赤褐色の顔料を塗布している。39 は須恵器の坏蓋である。口縁部は内側に低いかえりを持つものと思われるがかえりは欠損している。40 は須恵器の坏蓋、41 は須恵

器の皿である。口径は 21.0㎝、残存器高は 1.8㎝を測る。42 は土師器の甑と推測される。

SB2 の時期は、出土遺物より 7 世紀後半～ 8 世紀前半と考えられる。

SB3（図 21・22、表 4･5）

調査区第 1 区の南側で検出された掘立柱建物である。検出高は約 100.1 mで周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。SB2 と重なりあう位置にあるが、柱穴の切り合い関係より SB2 廃絶後に SB3 が構築されている。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 2 間（約 4.40 m）× 桁行 3 間（約 4.30 m）以上、建物面積は約 18.92㎡以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N － 32° － W の方位をとる。柱間は梁行で約 1.75 ～ 2.65 m、桁行で約 1.86 ～ 2.40 mを測る。柱穴は、SP140・SP141・SP142・SP143・SP144・SP145 で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形で 1 辺は約 0.56 ～ 0.95 m、深さは約 0.25 ～ 0.62 mを測る。柱痕は、平面円形で直径は約 0.28 ～ 0.38 mを測る。建物の角部分の柱穴である SP141 と SP143 は他柱穴より深く、底部には直径 3 ～ 5㎝の礫が比較的多く確認された。

遺物は、SP142 から小片のため図化していないが土師器が、SP143 から丸瓦（43）がそれぞれ出土した。

時期を特定できる遺物の出土がないため、遺物からの時期を比定し得ないが、SB1・SB2 と建物の主軸方位が同じため、概ね近い時期と推定される。

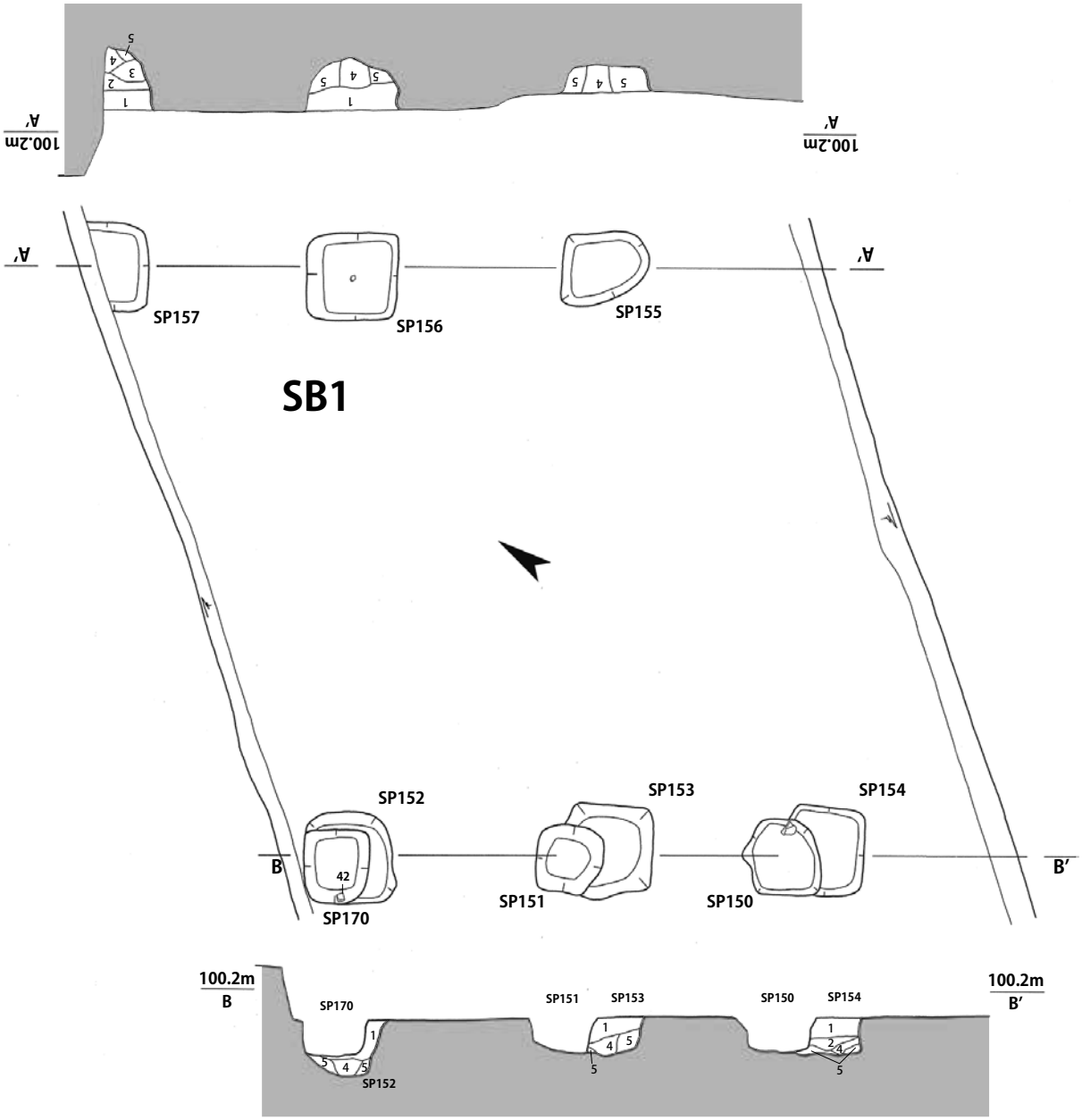
SB4（図 23、表 4･5）

調査区第 1 区の南西側で検出された掘立柱建物である。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 1 間（約 2.00 m）以上 × 桁行 2 間（約 3.00 m）以上、建物面積約 6.00㎡以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N － 16° － W の方位をとる。柱間は梁行約 2.00 m、桁行約 1.40 ～ 1.60 mを測る。柱穴は、SP244・SP245・SP246・SP247 で構成され、掘り方の平面形は円形・楕円形・隅丸方形が混在しており、1 辺（直径）は約 0.48 ～ 0.67 m、深さは約 0.16 ～ 0.36 mを測る。柱痕は、SP247 でのみ確認されており、平面円形で直径は約 0.30 mを測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ない。また、SB1･SB2･SB3 と主軸方位が異なるため、これら 3 棟の建物と異なる時期の可能性が考えられる。

SB5（図 23、表 4･5）

調査区第 1 区の南西側で検出された掘立柱建物である。SB6 と重なりあう形で検出されたが、柱穴の切り合い関係はないため、建物の前後関係は不明である。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 2 間（約 2.80 m）以上 × 桁行 1 間（約 1.30 m）以上、建物面積約 3.64㎡以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N － 24° － W の方位をとる。柱間は梁行で約 1.40 m、桁行で約 1.30 mを測る。柱穴は、SP277・SP284・SP290・SP299 で構成され、掘り方の平面形は円形・隅丸方形・不整形が混在しており、1 辺（直径）は約 0.32 ～ 0.48 m、深さ



1. 暗褐色粘質土　地山ブロック～2㎝大を15%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～3㎝大を25%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
3. 褐灰色粘質土　地山ブロック～1㎝大を10%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
4. 黒褐色粘質土　地山ブロック～1㎝大を7%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
5. にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～5㎝大を40%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む

0　(1/60)　4m

図 19　掘立柱建物（SB1）平面図・断面図

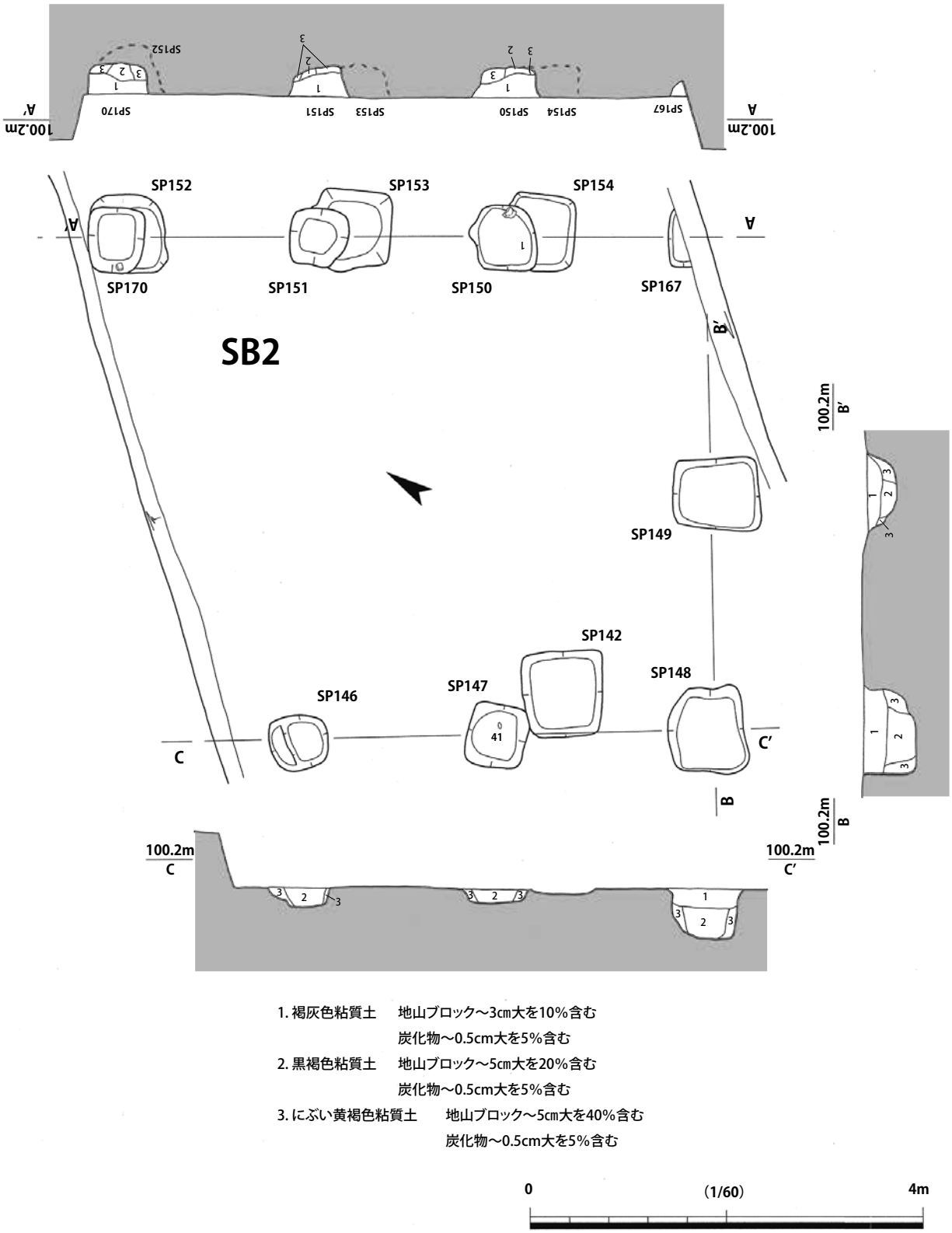


図 20　掘立柱建物（SB2）平面図・断面図

は約 0.09 ～ 0.19 mを測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ない。また、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が異なるため、これら 3 棟の建物と異なる時期の可能性が考えられる。

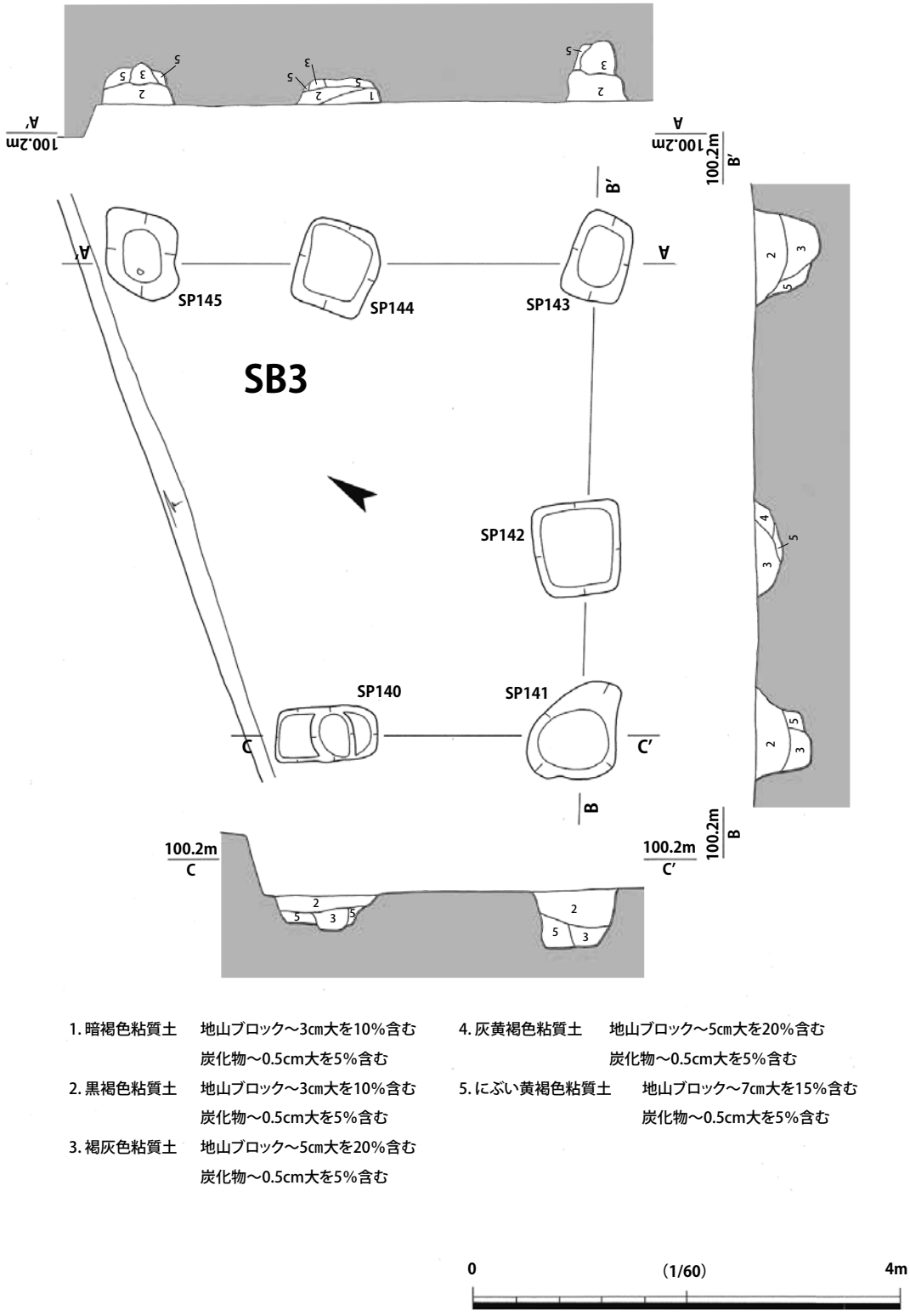


図 21　掘立柱建物（SB3）平面図・断面図

SB6（図 23、表 4･5）

調査区第 1 区の南西側で検出された掘立柱建物である。SB5 と重なりあう形で検出されたが、柱穴の切り合い関係はないため、建物の前後関係は不明である。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できてい

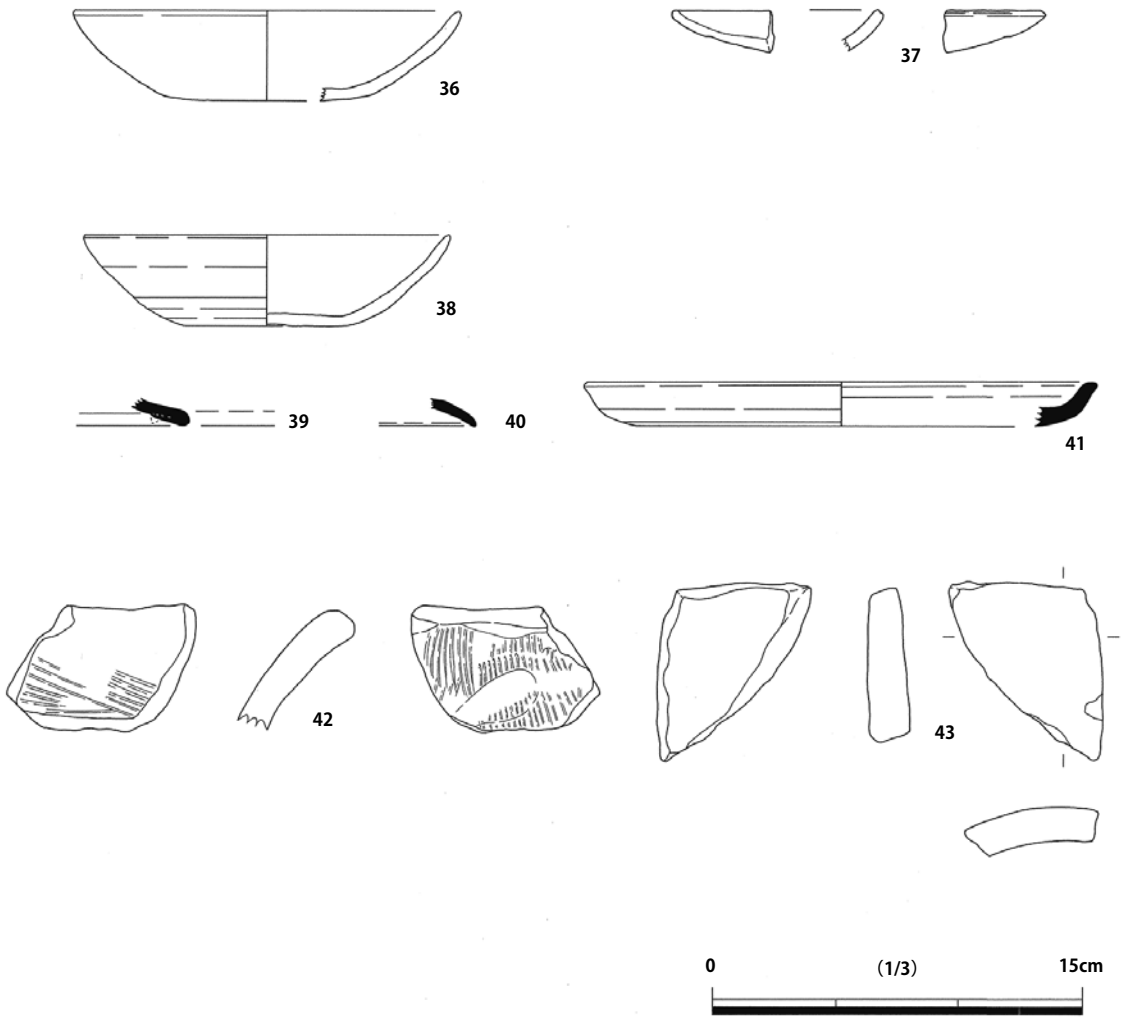


図 22　SB1・SB2・SB3 柱穴出土遺物実測図

る範囲では梁行 2 間（約 3.90 m）以上 × 桁行 1 間（約 1.80 m）以上、建物面積約 7.02㎡以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N − 30° − W の方位をとる。柱間は梁行で約 1.85 ～ 2.05 m、桁行で約 1.80 mを測る。柱穴は、SP279・SP280・SP281・SP282 で構成され、掘り方の平面形は円形・隅丸方形が混在しており、1 辺（直径）は約 0.55 ～ 0.75 m、深さは約 0.11 ～ 0.20 mを測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が同じため、これら 3 棟の建物と同時期または極めて近い時期と推定される。

SB7（図 24、表 4･5）

調査区第 1 区の西側で検出された掘立柱建物である。自然流路 NR362 上面で検出した。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 3 間（約 5.00 m）以上 × 桁行 1 間（約 1.90 m）以上、建物面積約 9.50㎡以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N − 32° − W の方位をとる。柱間は梁行で約 1.59 ～ 1.80 m、桁行で約 1.90 mを測る。柱穴は、SP357・SP358・

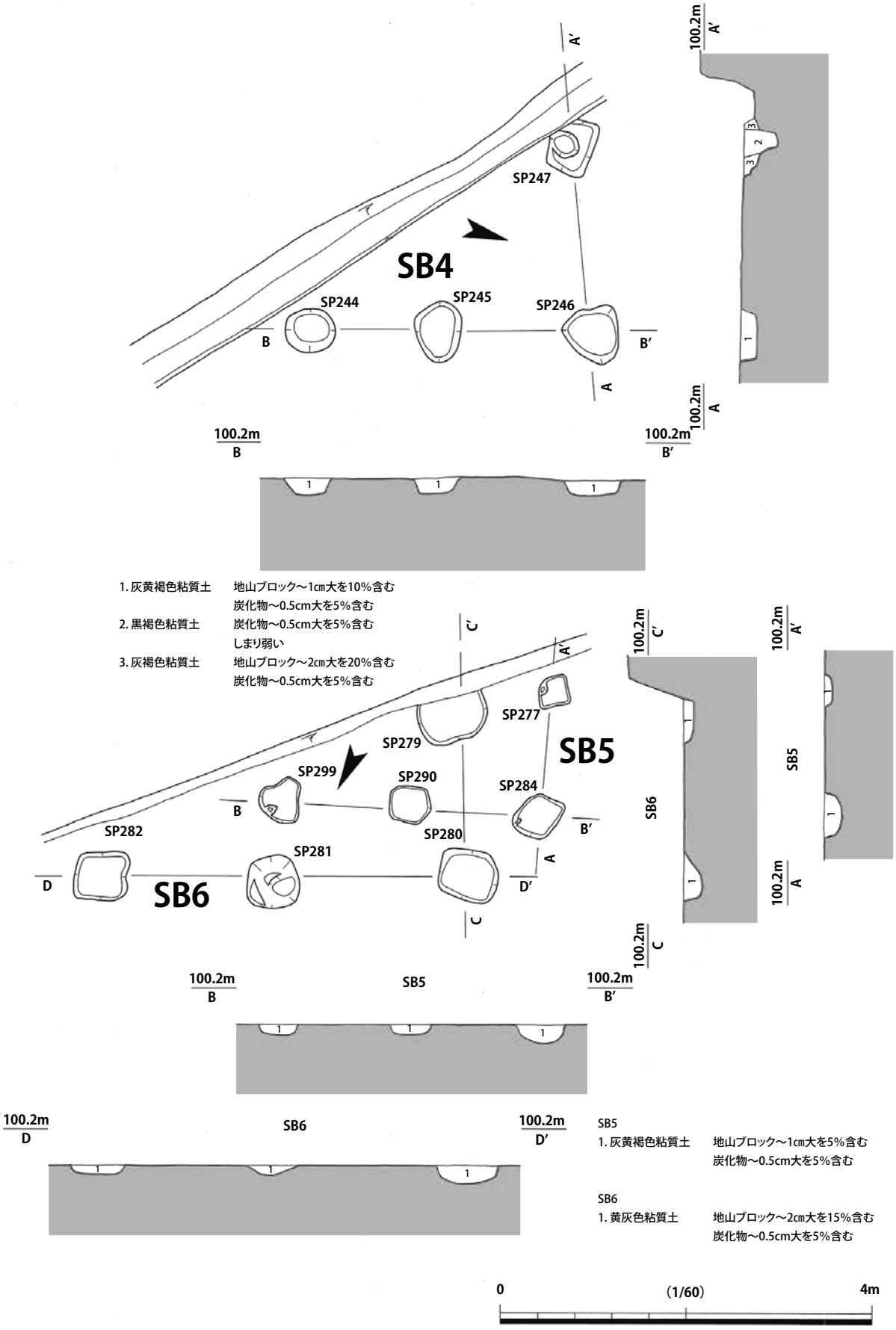
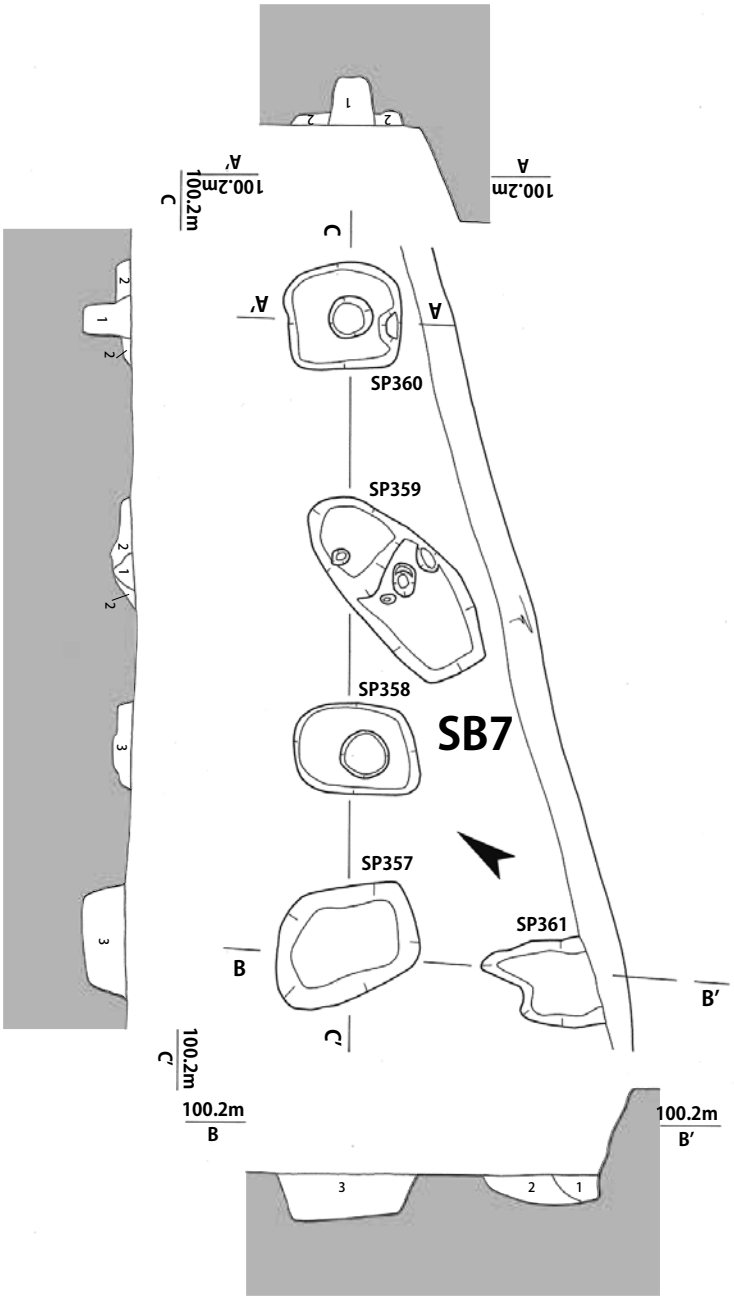


図 23　掘立柱建物（SB4・SB5・SB6）平面図・断面図



1. 黒褐色砂礫混じり粘質土　炭化物～0.5cm大を5%含む
しまり弱い
2. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～5cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
3. 灰褐色砂礫混じり粘質土　地山ブロック～1cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

0　(1/60)　4m

図 24　掘立柱建物（SB7）平面図・断面図

SP359・SP360・SP361 で構成され、掘り方の平面形は円形・隅丸方形が混在しており、1 辺（直径）は約 0.72 ～ 1.11 m、深さは約 0.17 ～ 0.39 mを測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が同じため、これら 3 棟の建物と同時期または極めて近い時期と推定される。

表４　掘立柱建物一覧

建物	梁行×桁行（間）	梁行長（m）	桁行長（m）	床面積（㎡）	主軸方位	挿図	写真図版
SB1	2×3（以上）	5.20	6.20（以上）	32.24（以上）	N－33°－W	19	5・6
SB2	2×3（以上）	5.00	6.00（以上）	30.00（以上）	N－34°－W	20	5・6
SB3	2×2（以上）	4.40	4.30	18.92	N－32°－W	21	5・6
SB4	1（以上）×2（以上）	2.00（以上）	3.00（以上）	6.00（以上）	N－16°－W	23	10
SB5	2（以上）×1（以上）	2.80（以上）	1.30（以上）	3.64（以上）	N－30°－W	23	10
SB6	2（以上）×1（以上）	3.90（以上）	1.80（以上）	7.02（以上）	N－24°－W	23	10
SB7	3（以上）×1（以上）	5。00（以上）	1.90（以上）	9.50（以上）	N－32°－W	24	10

表５　掘立柱建物・柵柱穴一覧

建物	遺構	平面形	規模（m）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
			長さ（長幅）	幅（短幅）	深さ				
SB1	SP152	隅丸方	0.78	0.78	0.50	土師器、須恵器	SP170に切られている。	19	7
	SP153	隅丸方	0.83	0.80	0.36		SP151に切られている。	19	7
	SP154	隅丸方	0.79	0.67	0.34	土師器（36・37）	SP150に切られている。	19	7
	SP155	隅丸方	0.77	0.62	0.25			19	7
	SP156	隅丸方	0.81	0.78	0.46			19	7
	SP157	隅丸方	(0.46)	0.78	0.55			19	7
SB2	SP146	隅丸方	0.60	0.58	0.22			20	7
	SP147	隅丸方	0.63	0.60	0.14	須恵器(41)	SP142に切られている。	20	8
	SP148	隅丸方	0.83	0.77	0.54		底部に3～5cm大の小礫が目立つ。	20	7
	SP149	隅丸方	0.88	0.73	0.32			20	8
	SP150	隅丸方	0.68	0.65	0.32	土師器(38)、須恵器（39）	SP154を切っている。	20	8
	SP151	隅丸方	0.58	0.58	0.33	土師器、須恵器(40)	SP153を切っている。	20	9
	SP167	隅丸方	(0.55)	(0.20)	(0.16)			20	
	SP170	隅丸方	0.65	0.57	0.32	土師器(42)	SP152を切っている。	20	8
SB3	SP140	隅丸長方	0.95	0.57	0.32			21	9
	SP141	隅丸方	0.88	0.80	0.53		底部に3～5cm大の小礫が目立つ。	21	9
	SP142	隅丸方	0.88	0.83	0.25	土師器	SP147を切っている。	21	9
	SP143	隅丸長方	0.82	0.56	0.62	瓦（43）	底部に3～5cm大の小礫が目立つ。	21	9
	SP144	隅丸方	0.82	0.75	0.25			21	9
	SP145	隅丸方	0.75	0.65	0.31			21	9
SB4	SP244	円	0.54	0.48	0.18			23	
	SP245	楕円	0.67	0.52	0.16			23	
	SP246	円	0.63	0.61	0.18			23	
	SP247	隅丸方	0.61	0.48	0.36			23	
SB5	SP277	隅丸方	0.33	0.32	0.09			23	
	SP284	隅丸方	0.47	0.43	0.19			23	
	SP290	円	0.45	0.39	0.12			23	
	SP299	不整	0.48	0.44	0.12		SP300を切っている。	23	
SB6	SP279	円	0.75	(0.54)	0.11			23	
	SP280	隅丸方	0.65	0.56	0.20			23	
	SP281	円	0.57	0.57	0.11			23	
	SP282	隅丸方	0.55	(0.51)	0.11		SK310に切られている。	23	
SB7	SP357	隅丸長方	1.11	0.94	0.38			24	
	SP358	隅丸長方	0.98	0.73	0.17			24	
	SP359	楕円	1.75	0.79	0.19			24	
	SP360	隅丸方	0.89	0.84	0.39			24	
	SP361	楕円	(0.93)	0.72	0.24			24	
SA1	SP316	円	0.55	0.44	0.17			25	
	SP317	円	0.51	0.50	0.15			25	
	SP318	円	0.55	0.48	0.11			25	
	SP319	円	0.46	0.41	0.16			25	
	SP320	円	0.52	0.43	0.21			25	
SA2	SP376	楕円	0.71	0.57	0.29			25	
	SP382	隅丸方	0.61	0.60	0.17		SP383を切っている。	25	
	SP397	円	0.52	0.46	0.15			25	
	SP405	隅丸方	0.65	0.57	0.13		SP406を切っている。	25	
	SP408	円	(0.60)	(0.24)	(0.12)		SP407に切られている。	25	
	SP420	隅丸方	0.93	0.73	0.19			25	

（　）内は残存長、又は復元数値

(6) 柵（SA1・SA2）

SA1（図 25、表 5）

調査区第 1 区の西側で検出された掘立柱建物である。軸方向はおよそ N － 27° － W の方位を示す。柱間は約 1.8 ～ 2.0 m を測る。柱穴は、SP316・SP317・SP318・SP319・SP320 で構成され、掘り方の平面形は円形で直径は約 0.41 ～ 0.55 m、深さは約 0.11 ～ 0.21 m を測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ない。また、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が異なるため、これら 3 棟の建物と異なる時期の可能性が考えられる。

SA2（図 25、表 5）

調査区第 1 区の北西側で検出された掘立柱建物である。軸方向はおよそ N － 31° － W の方位を示し、L 字状に屈曲する。柱間は約 1.40 ～ 2.00 m を測る。柱穴は、SP376・SP382・SP397・SP405・SP408・SP420 で構成され、掘り方の平面形は円形・楕円形・隅丸方形が混在しており、1 辺（直径）は約 0.47 ～ 0.93 m、深さは約 0.13 ～ 0.29 m を測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が同じため、これら 3 棟の建物と同時期または極めて近い時期と推定される。

(7) 溝（SD26・SD107・SD198・SD259・SD267・SD546・SD570・SD615）

SD26（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出されたU字状に屈曲する溝である。幅約 0.47m、長さ約 3.90 m、深さ約 0.14 m で断面はU字状を呈する。埋土は灰黄褐色土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD106（図 16）

調査区第 1 区の南側で検出された溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 1.83 m、幅は 0.35 m、深さは 0.25 m で断面はU字状を呈する。埋土は黄灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD198（図 27）

調査区第 1 区の南西側で検出された溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 3.18 m、幅は約 1.34 m、深さは約 0.14 m で断面舟底状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD259（図 27）

調査区第 1 区の南西側で検出された溝である。長さは約 3.30 m、幅は約 0.62 m、深さは約 0.39 m で断面はU字状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

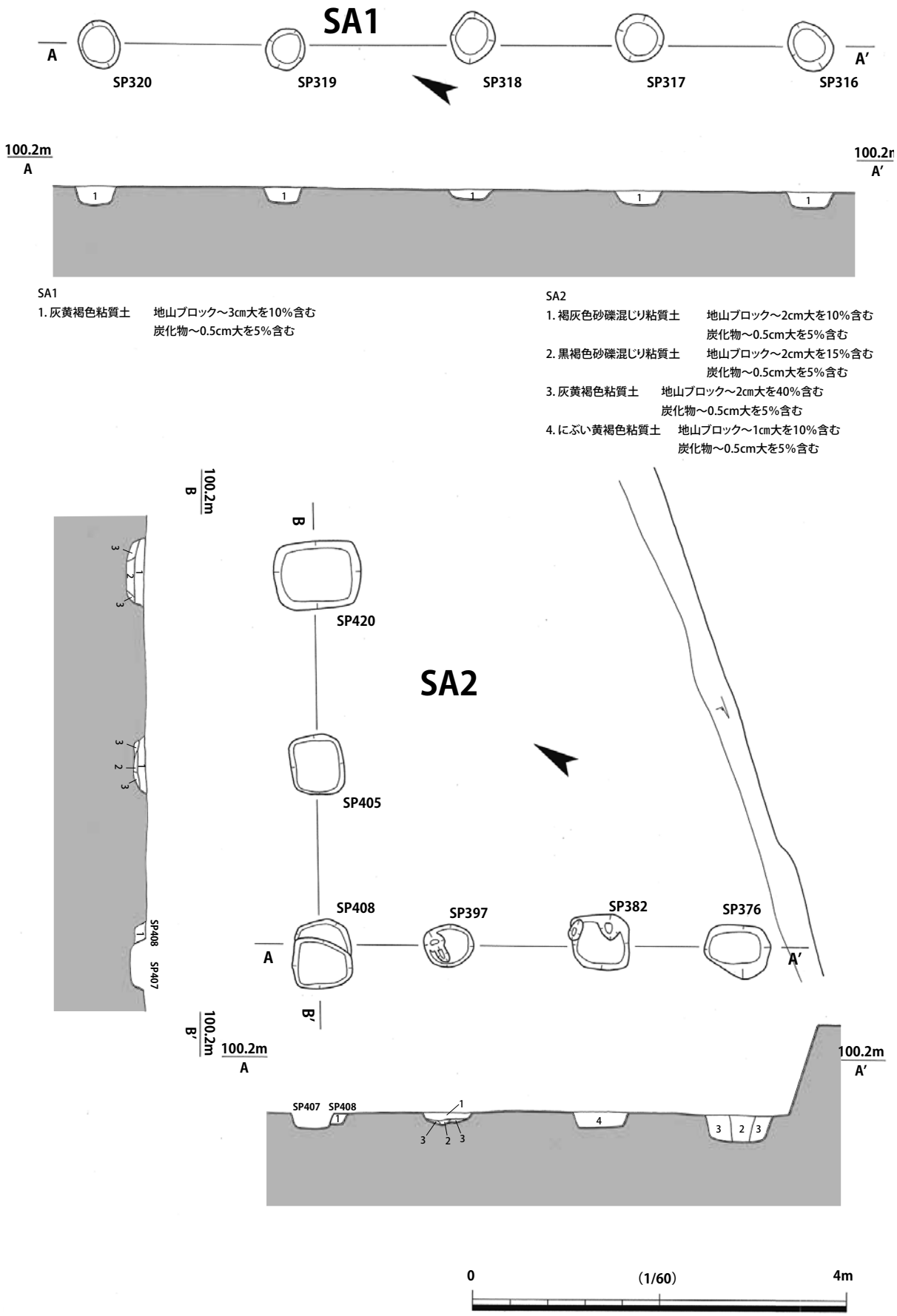


図 25　柵（SA1・SA2）平面図・断面図

SD267（図 28）

調査区第 1 区の南西側で検出された溝である。長さは約 3.70 m、幅は約 1.10m、深さは約 0.38 mで断面はV字状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD546（図 31）

調査区第 1 区の北側で検出された溝である。長さは約 3.40m、幅は約 0.79 m、深さは約 0.28 mで断面は舟底状を呈する。埋土はにぶい黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD570（図 31・34・35）

調査区第 2 区の北東側で検出された N － 79° － W 方向の直線の溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 16.48 m、幅は 1.29 m、深さは約 0.14 mで断面は舟底状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。SD615 と一連の溝の可能性がある。

遺物は、土師器（49）と焼成粘土塊（51 ～ 53）が出土した。

49 は、土師器の高坏である。51 は縦 4.7㎝、横 3.7㎝、厚さ 3.0、52 は縦 4.3㎝、横 3.5㎝、厚さ 1.2㎝、53 は縦 2.6㎝、横 2.3㎝、厚さ 1.3㎝をそれぞれ測る。いずれも緻密な胎土であるが、52 と 53 には表面に赤黒色の溶着物が付着する。

SD615（図 32）

調査区第 3 区の中央付近で検出された N － 76° － W 方向の直線の溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 7.44 m、幅は約 1.16 m、深さは約 0.14 mで断面は舟底状を呈する。埋土は灰褐色粘質土の 1 層である。SD570 と一連の溝の可能性がある。

遺物は、小片のため図化していないが土師器が出土した。

(8)　土 坑 (SK10・SX35・SX37・SX39・SK49・SK61・SK70・SK158・SK161・SX173・SK174・SK178・SK179・SK221・SX235・SK265・SX293・SK310・SK327・SK332・SK337・SK338・SK339・SX336・SK350・SK380・SK417・SK421・SX422・SK423・SK424・SK431・SK436・SK439・SK460・SX467・SK470・SK494・SK537・SK545・SK584・SK585・SK610・SK611・SK627・SX633・SX635・SK646・SX650)

SK10（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面楕円形と思われる土坑である。検出部の最大幅は約 0.82 m、深さは約 0.33 mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SX35（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。調査区外に伸びていくた

め全容は不明である。検出部の長辺は約 1.55 m、短辺は約 0.72 m、深さは約 0.38 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。SX37 を切っている。

遺物は、出土していない。

SX37（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。検出部の長辺は約 3.08 m、短辺は約 0.66 m、深さは約 0.24 mを測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。SX35 に切られている。

遺物は、出土していない。

SX39（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 5.20 m、短辺は約 1.20 m、深さは約 0.14 mを測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。SX35 に切られている。

遺物は、出土していない。

SK49（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された土坑で、調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 3.60 m、深さは約 0.30 mを測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK61（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面楕円形の土坑である。長辺は約 1.98 m、短辺は約 0.78 m、深さは約 0.29 mを測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK70（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 1.95 m、短辺は約 1.42 m、深さは約 0.35 mを測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK158（図 26）

調査区第 1 区の南側で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺は約 0.80 m、短辺は約 0.61 m、深さは約 0.38 mを測る。埋土は褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK161（図 26・34）

調査区第 1 区の南側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 1.21 m、短辺は約 1.10 m、深さは約 0.69 mを測る。袋状に下方が開く断面形を呈しており、埋土は 1 層が灰褐色砂礫混じり粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土で地山ブロックが多めに混じる、3 層が灰黄褐色粘質土、4 層が黒褐色砂礫混じり粘質土、5 層が黄灰色粘質土、6 層がにぶい黄褐色粘質土の 6 層である。

遺物は、須恵器の坏蓋（46）が、また小片のため図化していないが土師器が出土した。

SX173（図 27）

調査区第 1 区の南側で検出された不定形土坑で、調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大の長さは約 4.06 m、幅は約 1.49 m、深さは約 0.26 mを測る。埋土は 1 層は暗褐色粘質土、2 層は黒褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK174（図 27）

調査区第 1 区の南側で検出された平面隅丸方形の土坑である。SX173 に隣接する。長辺は約 0.84 m、短辺は約 0.79 m、深さは約 0.18 mを測る。埋土は黒褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK178（図 27）

調査区第 1 区の南側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 0.93 m、短辺は約 0.77 m、深さは約 0.37 mを測る。埋土は 1 層が黒褐色粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土の 2 層である。SP177 に切られる。

遺物は、土師器の坏（47）が出土した。

SK179（図 27）

調査区第の南側で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺は約 0.54 m、短辺は約 0.45 m、深さは約 0.23 mを測る。埋土は 1 層が黒褐色粘質土、2 層が灰褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK221（図 27）

調査区第 1 区の南西側で検出された平面楕円形の土坑である。長辺は約 2.32 m、短辺は約 0.98 m、深さは約 0.15 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK265（図 28）

調査区第 1 区の南西側で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺は約 1.38 m、短辺は約 0.92 m、深さは約 0.23 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SX293（図 28）

調査区第 1 区の南西側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 4.05 m、短辺は約 1.29 m、深さは約 0.24 mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の 1 層である。SP292 に切られている。

遺物は、出土していない。

SK310（図 28）

調査区第 1 区の南西側で検出された平面楕円形の土坑である。長辺は約 3.05 m、短辺は約 1.35 m、深さは約 0.84 mを測る。埋土は 1 層が黒褐色粘質土、2 層が褐灰色砂礫混じ

り粘質土、3 層が暗褐色粘質土、4 層が灰褐色粘質土、5 層が褐灰色粘質土、6 層が灰黄褐色粘質土、7 層がにぶい黄褐色粘質土の 7 層である。SP282 を切っている。

遺物は、出土していない。

SK327（図 29）

調査区第 1 区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 0.94 m、短辺は約 0.92 m、深さは約 0.48 mを測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。同規模の SK332・SK337・SK338・SK339 と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK332（図 29）

調査区第 1 区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 1.26 m、短辺は約 1.05 m、深さは約 0.44 mを測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。同規模の SK327・SK337・SK338・SK339 と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK337（図 29）

調査区第 1 区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 1.26 m、短辺は約 1.20 m、深さは約 0.21 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。同規模の SK327・SK332・SK338・SK339 と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK338（図 29）

調査区第 1 区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 0.95 m、短辺は約 0.93 m、深さは約 0.34 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。同規模の SK327・SK332・SK337・SK339 と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK339（図 29）

調査区第 1 区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 1.37 m、短辺は約 0.97 m、深さは約 0.17 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。同規模の SK327・SK332・SK337・SK338 と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK350（図 28）

調査区第 1 区の西側で検出された土坑である。長辺は約 2.30 m、短辺は約 0.69 m、深さは約 0.40 mを測る。埋土は灰黄褐色砂礫土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK380（図 29）

調査区第 1 区の北西側で検出されたの土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 2.34 m、深さは約 0.29 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土

の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK417（図 29）

調査区第 1 区の北西側で検出されたの土坑である。長辺は約 2.48 m、短辺は約 1.45 m、深さは約 0.30 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。SP418 を切っている。

遺物は、出土していない。

SK421（図 29）

調査区第 1 区の北西側で検出された平面楕円形の土坑である。長辺は約 1.71 m、短辺は約 0.72 m、深さは約 0.20 mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SX422（図 29）

調査区第 1 区の北西側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 1.37 m、短辺は約 0.28 m、深さは約 0.30 mを測る。埋土は褐灰色砂礫詰り粘質土の 1 層である。SP423 に切られる。

遺物は、出土していない。

SK423（図 29）

調査区第 1 区の北西側で検出された土坑である。長辺は約 3.38 m、短辺は約 1.18 m、深さは約 0.60 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色砂礫混じり粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土、3 層が黒褐色砂礫混じり粘質土、4 層が灰黄褐色粘質土の 4 層である。SK424 を切っている。

遺物は、出土していない。

SK424（図 29）

調査区第 1 区の北西側で検出された土坑である。残存部の最大幅は約 1.30 m、深さは約 0.18 mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の 1 層である。SK423 に切られている。

遺物は、出土していない。

SK431（図 30）

調査区第 1 区の北西側で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約 1.82 m、短辺は約 1.76 m、深さは約 0.38 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土、3 層がにぶい黄褐色粘質土、4 層が褐色粘質土の 4 層である。

遺物は、出土していない。

SK436（図 30）

調査区第 1 区の北西側で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 1.74 m、深さは約 0.34 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK439（図 30）

調査区第 1 区の北側で検出された平面形が楕円形の土坑である。長辺は約 2.01 m、短辺

は約 1.38 m、深さは約 0.47 mを測る。埋土は 1 層が黒褐色砂礫混じり粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土、3 層がにぶい黄褐色砂礫混じり粘質土、4 層が黒褐色砂礫混じり粘質土、5 層が褐色粘質土、6 層が灰褐色粘質土、7 層が暗褐色粘質土の 7 層である。

遺物は、出土していない。

SK460（図 30）

調査区第 1 区の北西側で検出された土坑である。長辺は約 2.55 m、短辺は約 0.79 m、深さは約 0.24 mを測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SX467（図 30）

調査区第 1 区の北西側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 3.55 m、短辺は約 0.37 m、深さは約 0.52 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土、3 層が灰黄褐色粘質土、4 層がにぶい褐色粘質土の 4 層である。

遺物は、出土していない。

SK470（図 30）

調査区第 1 区の北西側で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約 0.78 m、短辺は約 0.62 m、深さは約 0.26 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK494（図 30）

調査区第 1 区の北西で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約 1.06 m、短辺は約 0.85 m、深さは約 0.17 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK537（図 30）

調査区第 1 区の北側で検出された平面形が円形の土坑である。長辺は約 0.86 m、短辺は約 0.70 m、深さは約 0.42 mを測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土、3 層が褐色粘質土の 3 層である。

遺物は、出土していない。

SK545（図 31）

調査区第 1 区の北側で検出された土坑である。長辺は約 1.28 m、短辺は約 0.96 m、深さは約 0.29 mを測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK584（図 31）

調査区第 2 区の北東側で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 1.76 m、深さは約 0.21 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、

2 層が灰黄褐色粘質土の 2 層である。SK585 に隣接する。

遺物は、出土していない。

SK585（図 31）

調査区第 2 区の北東側で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 1.17 m、深さは約 0.35 mを測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土の 2 層である。SK584 に隣接する。

遺物は、出土していない。

SK610（図 31）

調査区第 3 区の西側で検出された平面形が円形の土坑である。SK611 に切られている。残存部の長辺は約 1.10 m、短辺は約 0.85 m、深さは約 0.11 mを測る。埋土は灰褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK611（図 31）

調査区第 3 区の西側で検出された平面形が円形の土坑である。長辺は約 0.96 m、短辺は約 0.92 m、深さは約 0.74 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。SK610 を切っている。

遺物は、小片のため図化していないが、須恵器が出土した。

SK612（図 34）

調査区第 3 区の西側で検出された平面形が円形の土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 1.94 m、深さは約 0.52 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、石器（50）が出土した。

50 は砥石である。長さ 11.5㎝、幅 6.7㎝、厚さ 3.8㎝を測る。石材は砂岩である。

SK627（図 32）

調査区第 3 区の中央付近で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約 1.08 m、短辺は約 0.70 m、深さは約 0.15 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SX633（図 32）

調査区第 3 区の北側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 3.05 m、短辺は約 1.84 m、深さは約 0.22 mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SX635（図 32）

調査区第 3 区の北側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 2.58 m、短辺は約 1.93 m、深さは約 0.21 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

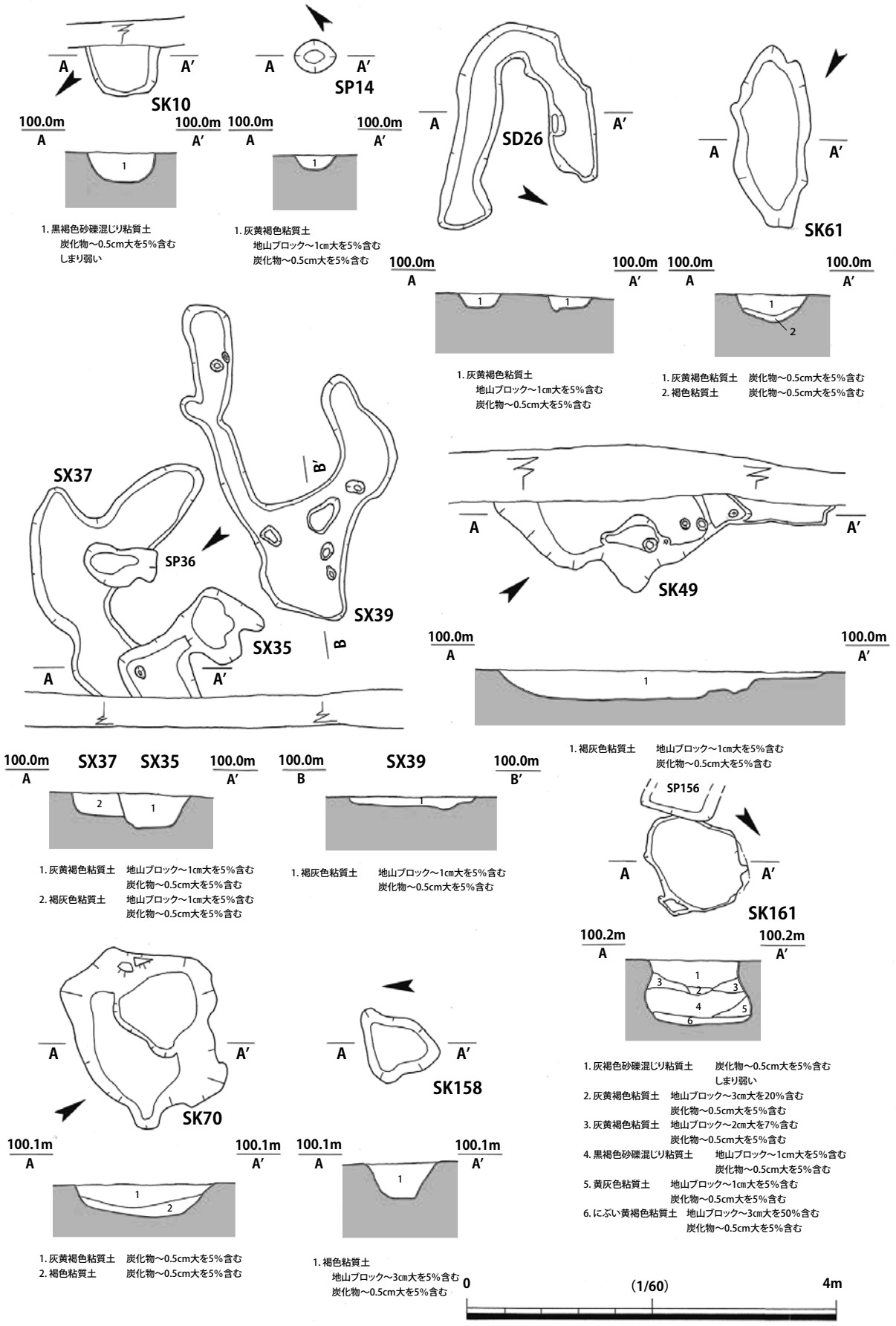


図 26　各遺構　平面図・断面図（1）

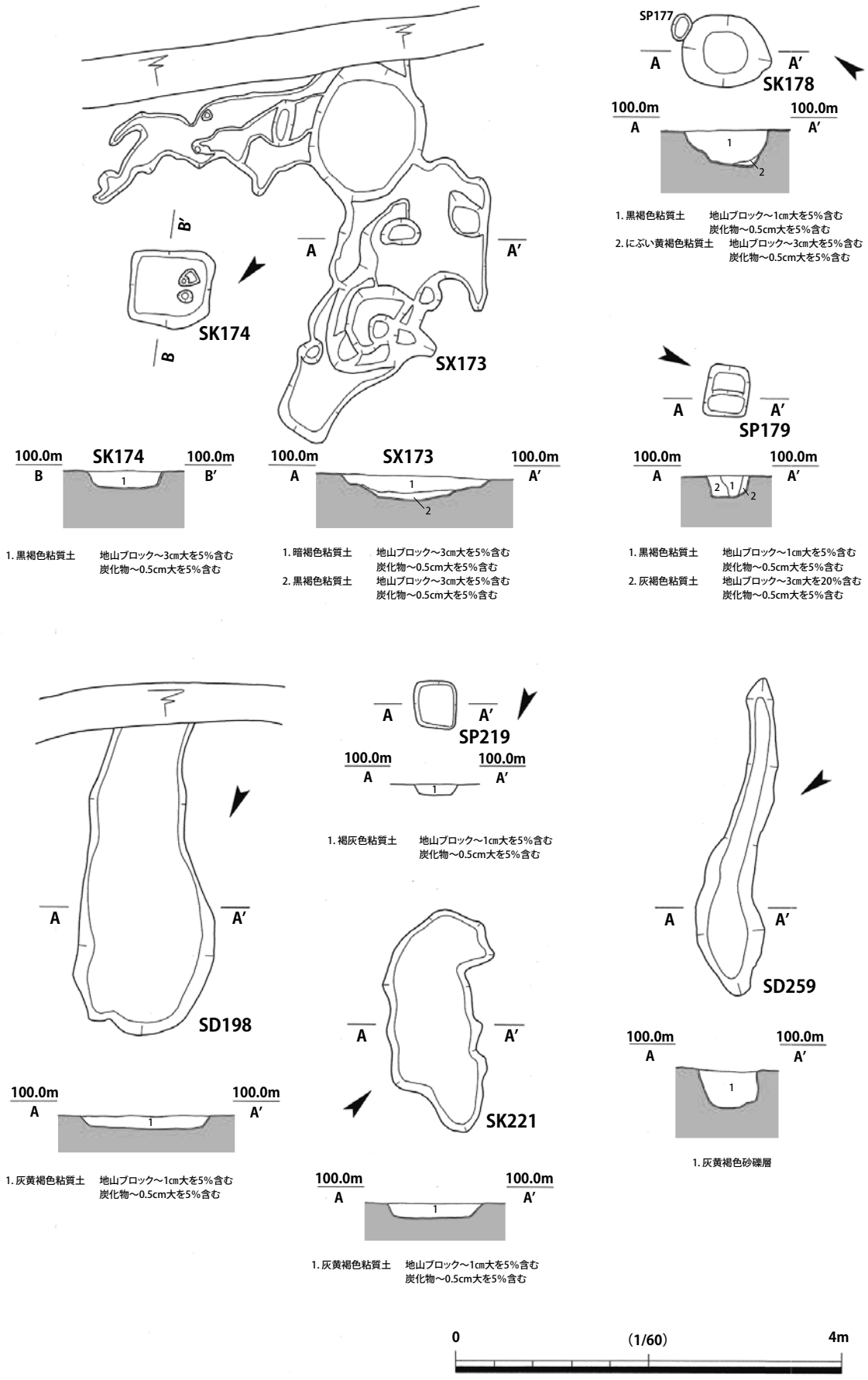


図 27　各遺構　平面図・断面図（2）

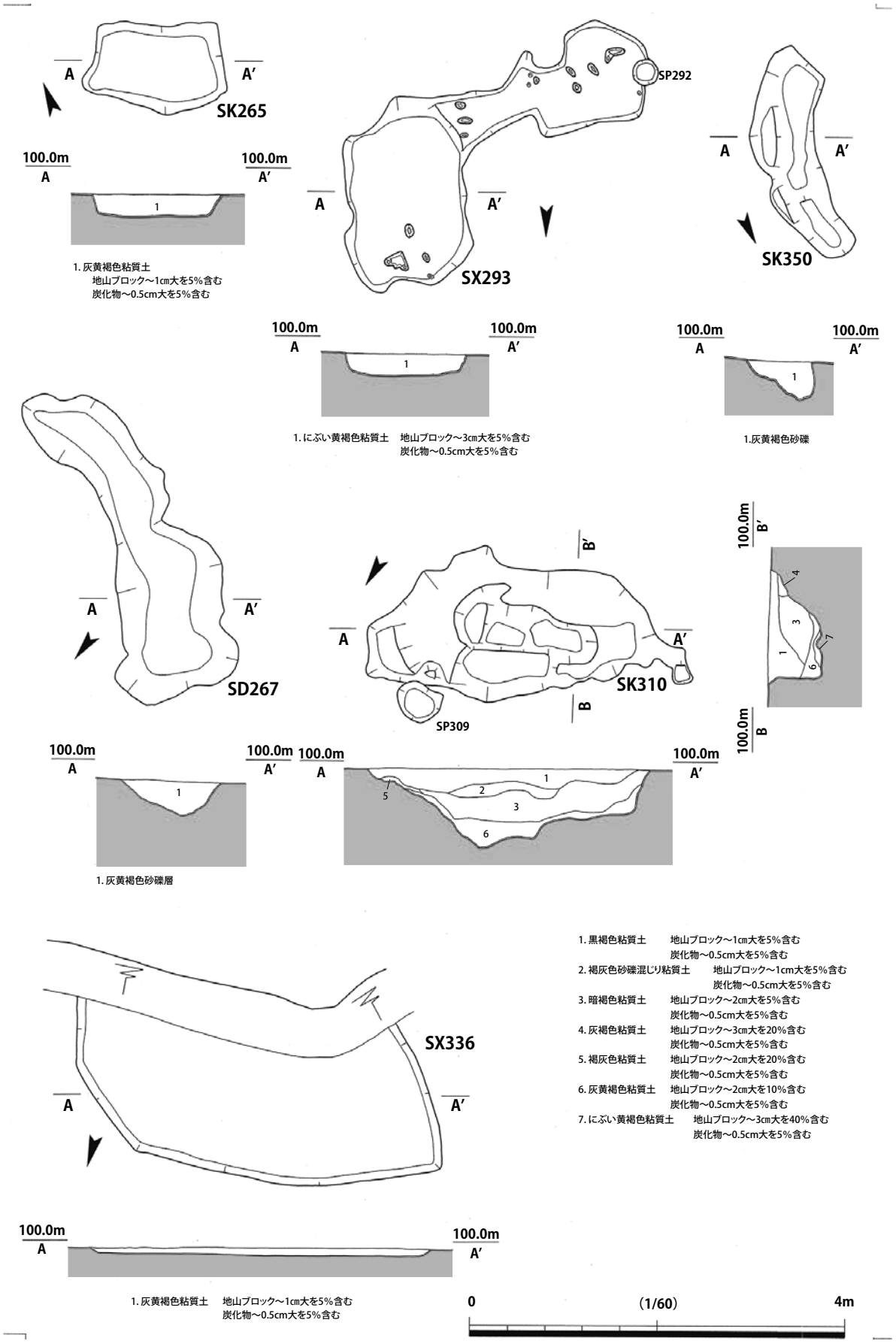


図 28　各遺構　平面図・断面図（3）

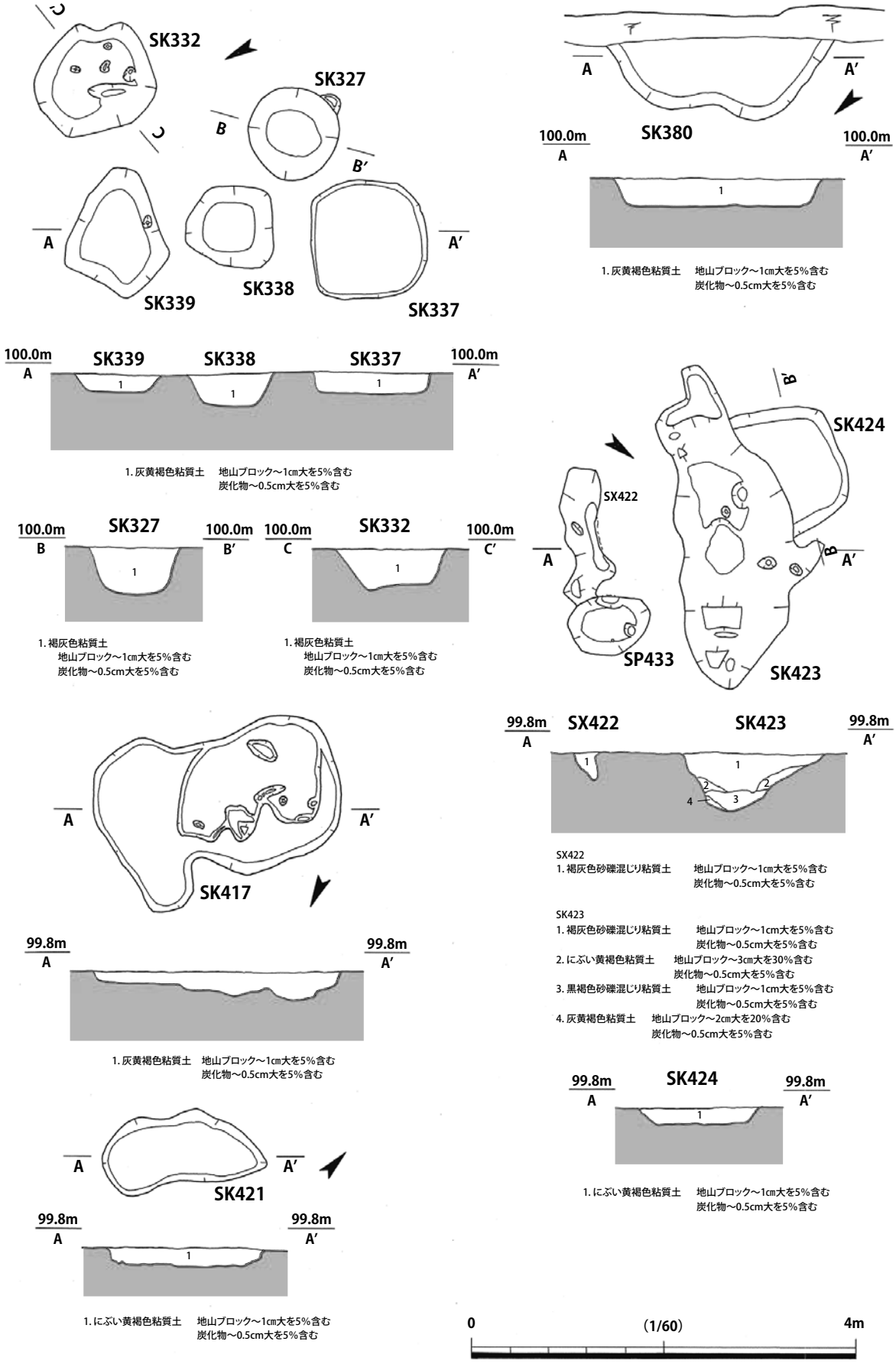


図 29　各遺構　平面図・断面図（4）

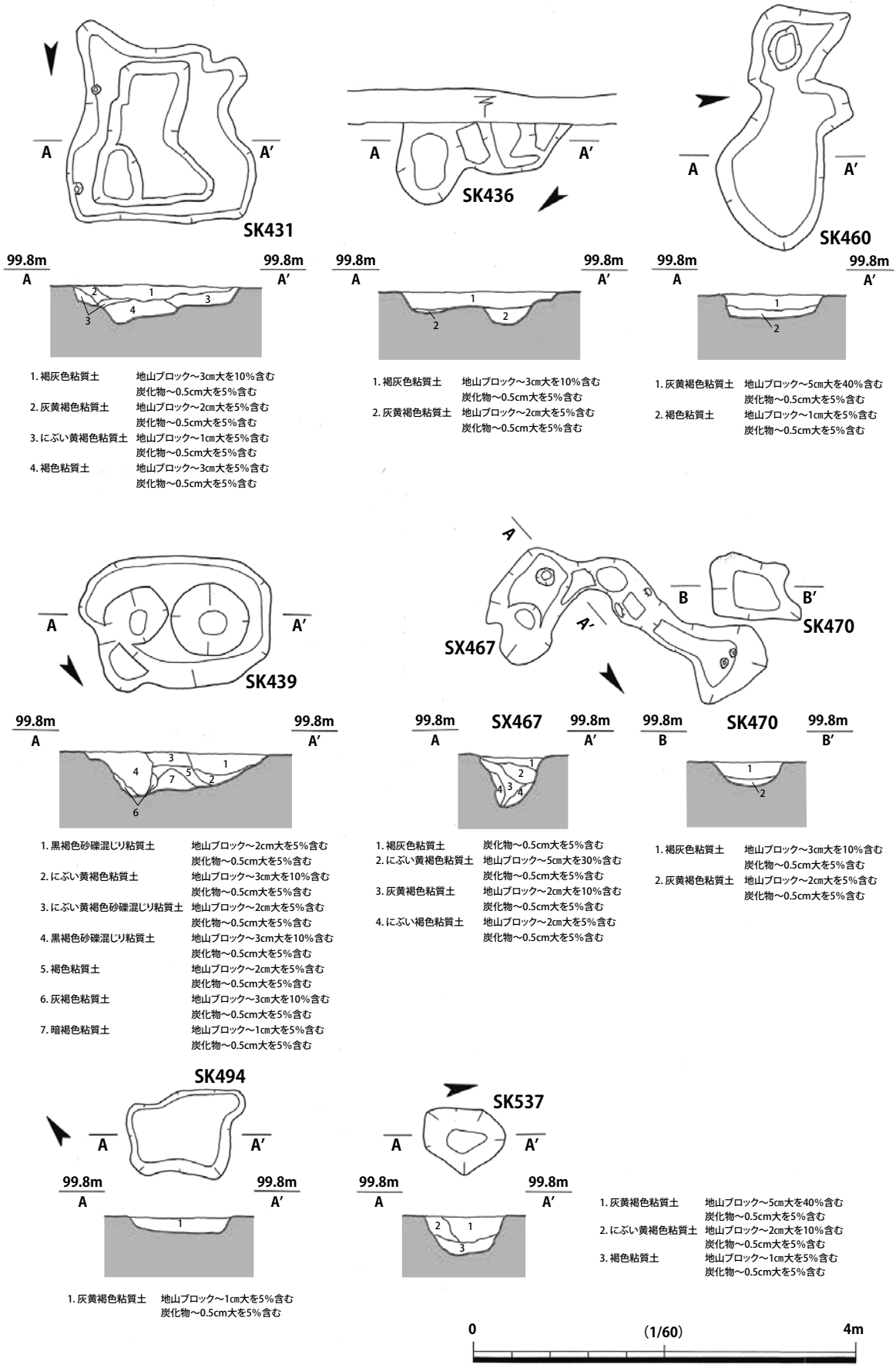
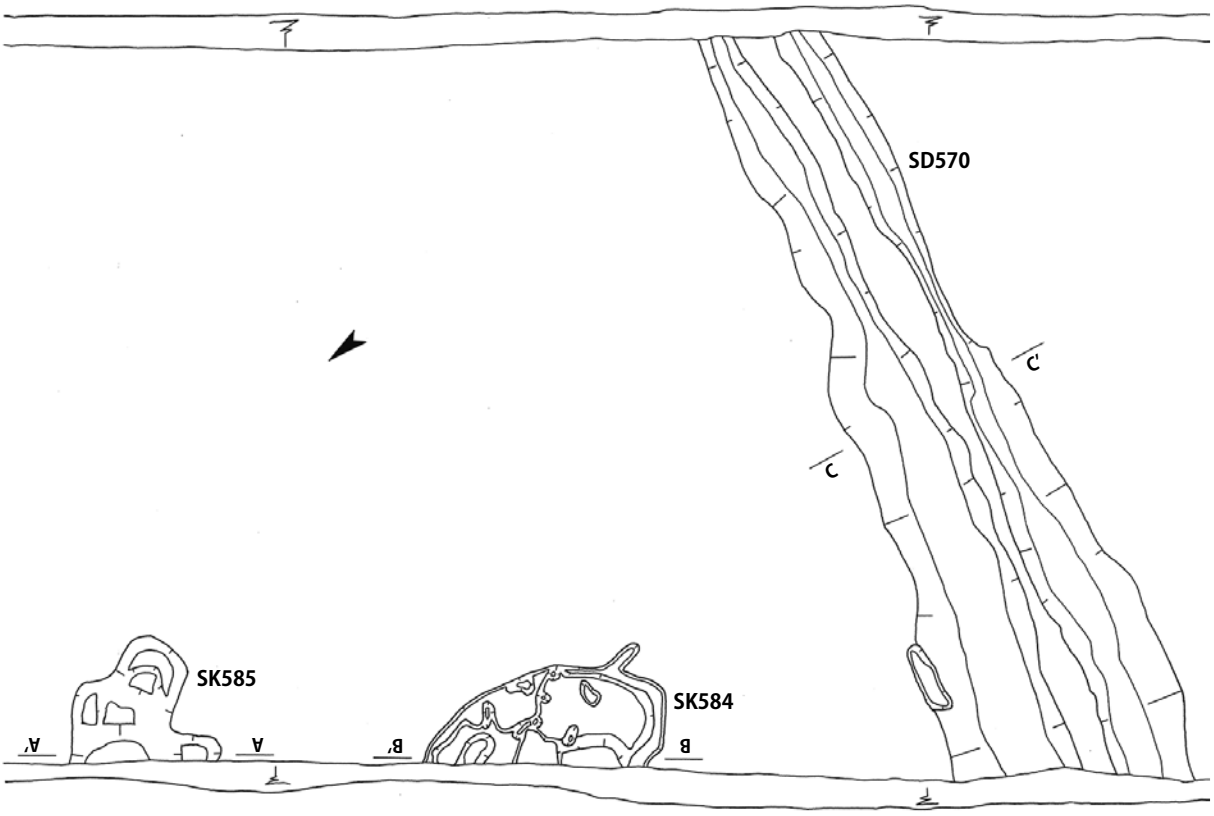
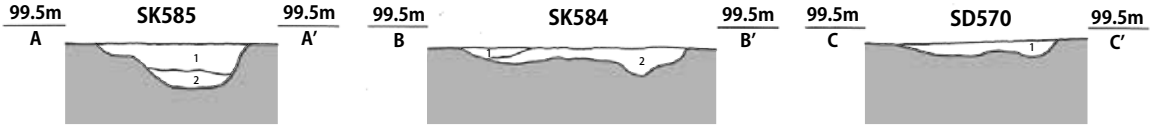


図 30　各遺構　平面図・断面図（5）

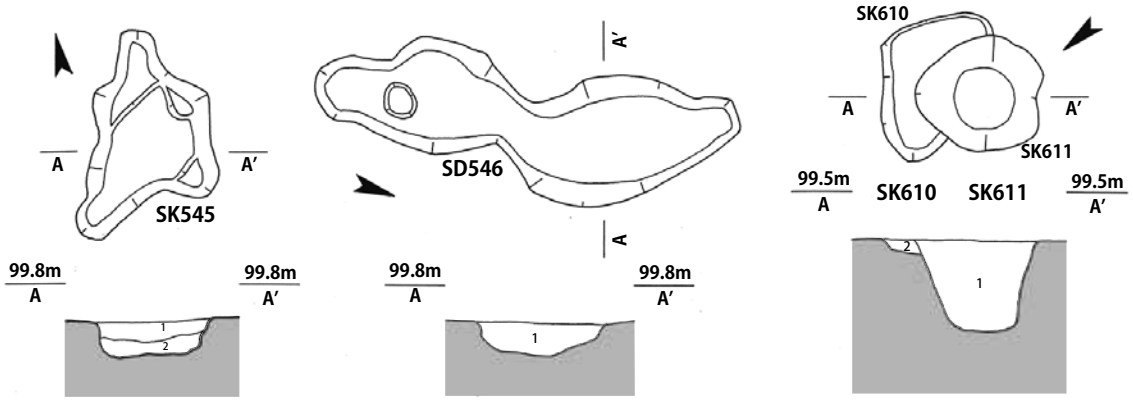




1. 褐灰色粘質土　地山ブロック～3cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

1. 褐灰色粘質土　地山ブロック～3cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

1. 褐灰色粘質土　地山ブロック～3cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む



1. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～5cm大を40%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

1. にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

1. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～1cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 灰褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

0　(1/60)　4m

図 31　各遺構　平面図・断面図（6）

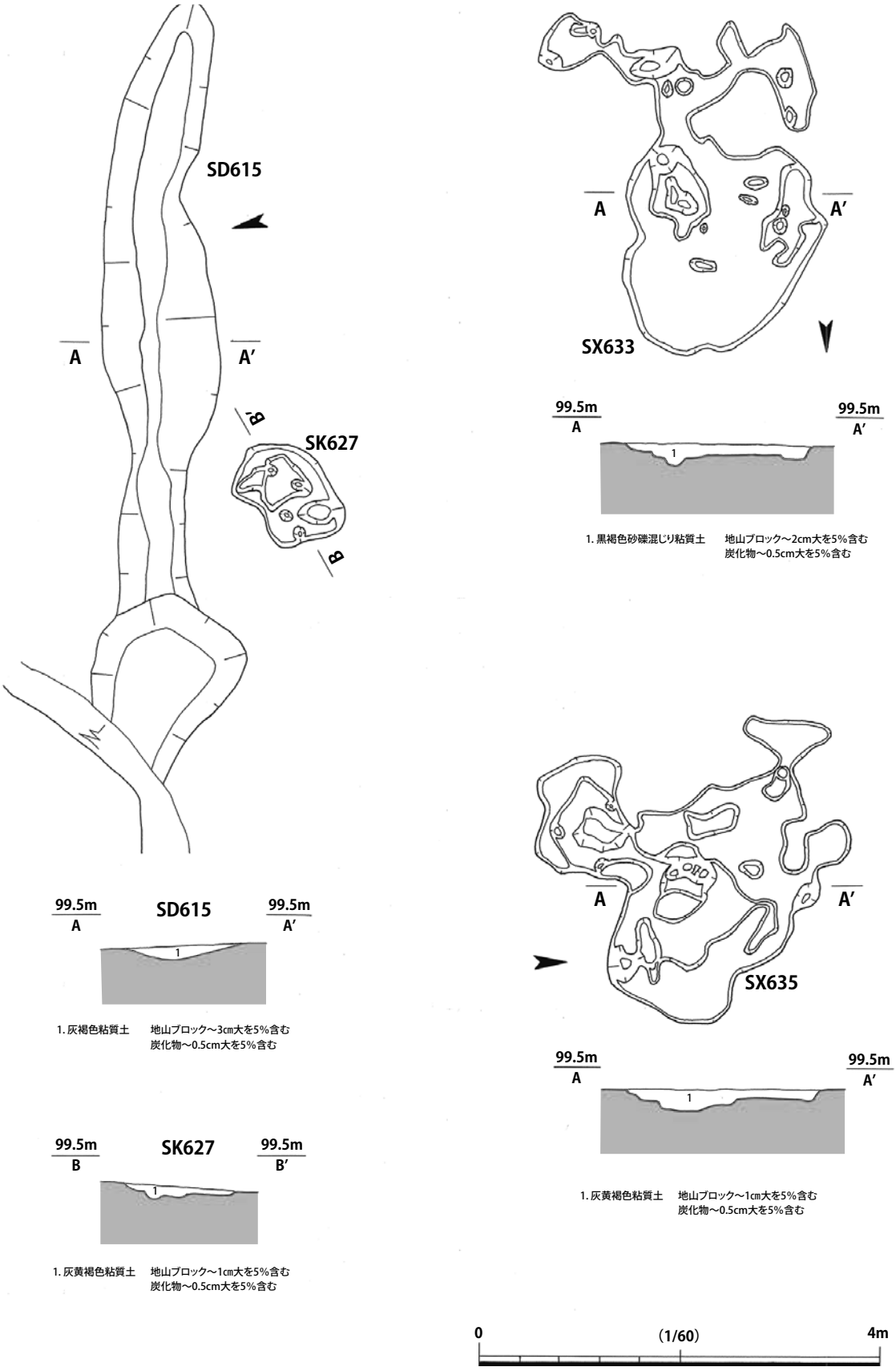


図 32　各遺構　平面図・断面図（7）

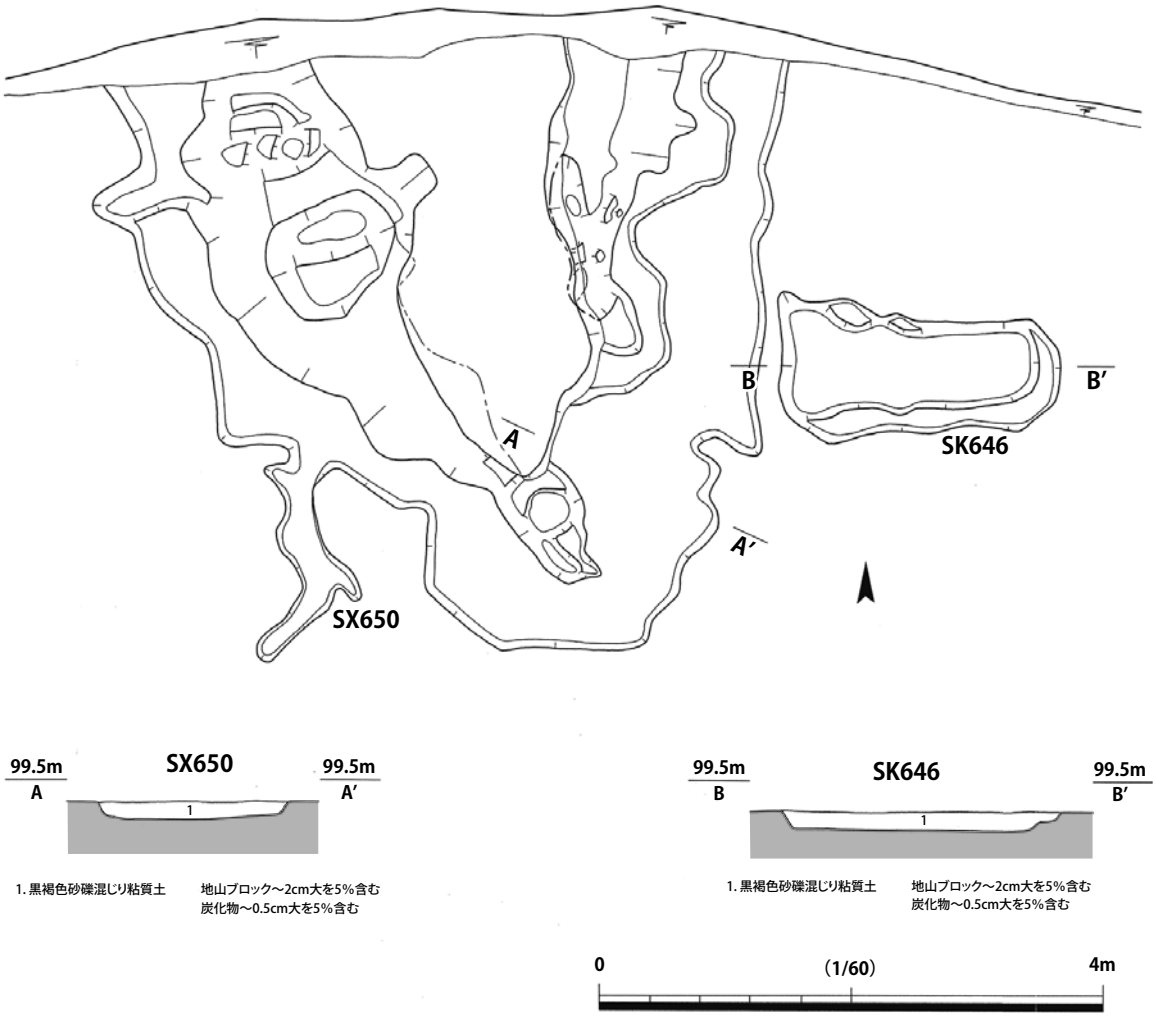


図 33　各遺構　平面図・断面図

SK646（図 33）

調査区第 3 区の北東側で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約 2.22 m、短辺は約 0.88 m、深さは約 0.14 mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SX650（図 33）

調査区第 3 区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 9.26 m、短辺は約 1.48 m、深さは約 0.13 mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

(9) 小穴（SP111・SP219）

SP111（図 26・34）

調査区第 1 区の南西側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約 0.40 m、短辺約 0.37 m、深さ 0.40 mを測る。埋土は褐灰色粘質土を呈する。

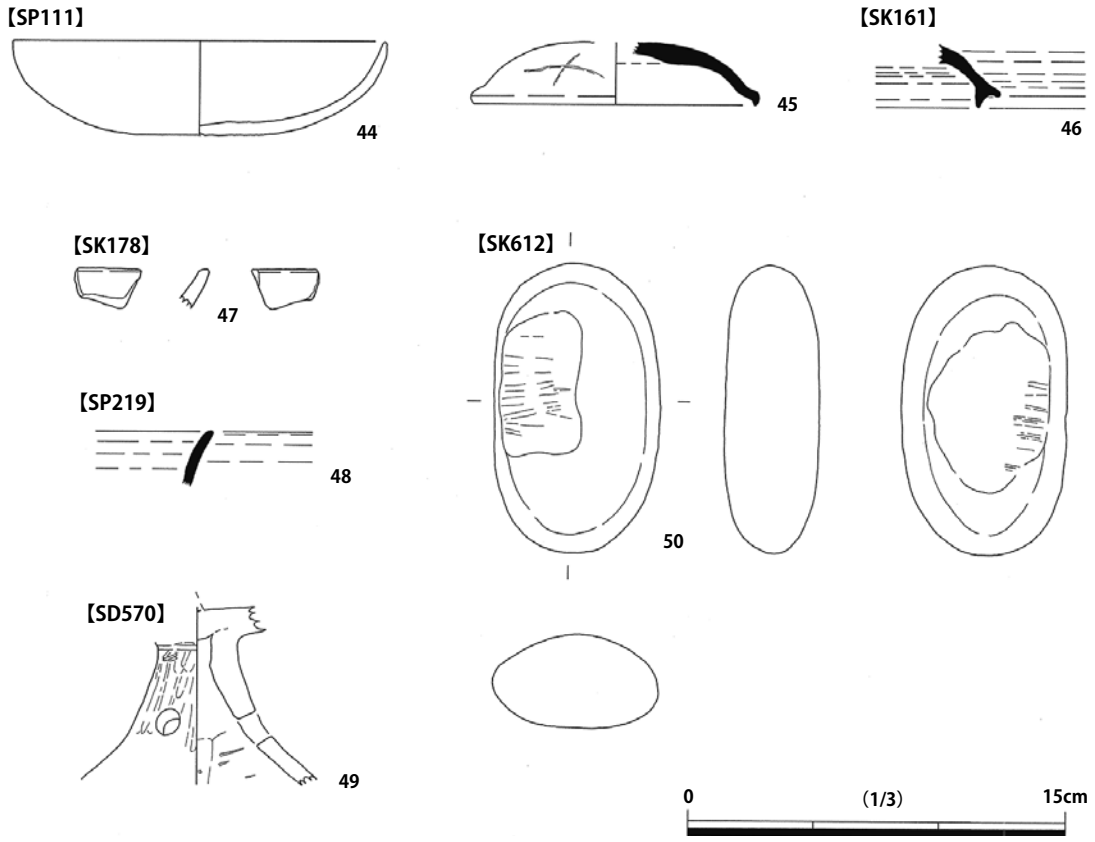


図 34　各遺構（SP111・SK161・SK178・SP219・SD570・SK612）出土遺物実測図

遺物は、土師器（44）と須恵器（45）が出土した。

44 は土師器の坏で、口径 15.0㎝、器高 3.7㎝を測る。口縁部は内湾する。45 は須恵器の坏蓋で、口径 11.4㎝、残存器高 2.5㎝を測る。山形の天井部で端部は短く屈曲する。

これらの遺物の年代観から、小穴 SP111 の時期は 8 世紀後半と考えられる。

SP219（図 27・34）

調査区南西端で検出された平面形が隅丸方形の小穴である。長辺約 0.50 m、短辺約 0.44 m、深さ 0.12 mを測る。埋土は褐灰色粘質土を呈する。

遺物は、須恵器の坏身（48）が出土した。

（10）その他（SX336）

SX336（図 28）

調査区第 1 区の西側で検出された平面隅丸方形の遺構である。自然流路 NR362 上面で検出した。調査区端にかかっているため、概ね平面プラン半分ほどの検出となったが検出部の最大幅は約 3.60 mを測る。深さは約 0.09 mを測り非常に浅い。平面プランの主軸はおよそ N − 17° − W の方位をとる。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、小片のため図化していないが、土師器が出土した。

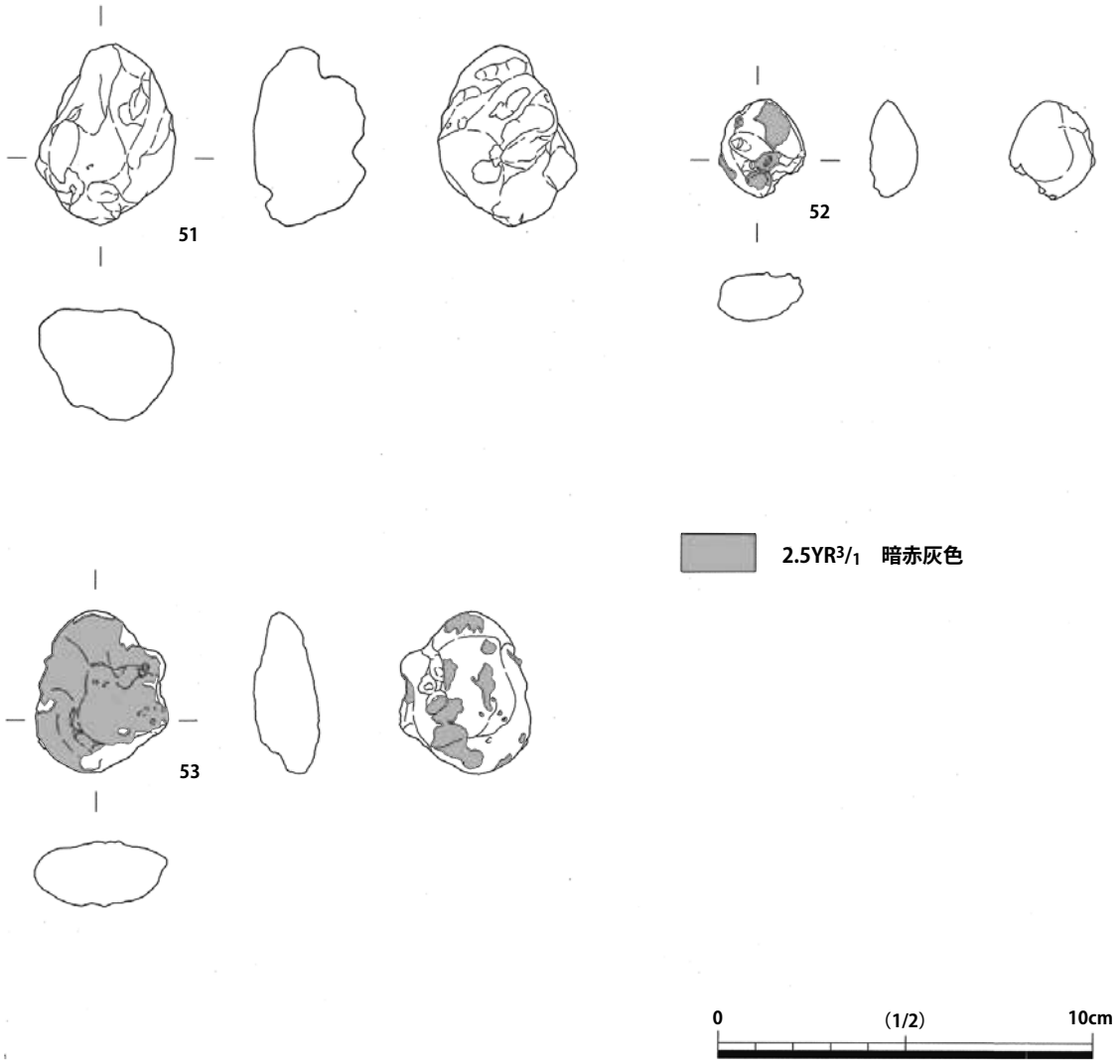


図 35　溝（SD570）出土遺物実測図

（11）小結

今回の調査では、7 世紀後半～ 8 世紀と推定される集落関連遺構を確認した。当該期の遺構は竪穴建物 2 軒（SH100・SH235）と掘立柱建物 5 棟（SB1・SB2・SB3・SB6・SB7）、柵 1 条(SA2) と複数の土坑や小穴であった。建物の主軸は N － 30°～ 34° － W の方位をとる。掘立柱建物は全て調査区端にかかっているため、建物プランや規模の全容がわかるものがないが、SB1・SB2・SB3 は柱穴が方形で直径 0.8 m前後を測り、比較的大型の建物が想定される。また、これら 3 棟は柱穴の切り合い関係より SB1 → SB2 → SB3 の順番に建て替えが行われている。これらと主軸を同じくする竪穴建物 SH235、掘立柱建物 SB6 と SB7、柵

SA2 に関してもほぼ同時期の遺構と推定される。

竪穴建物と掘立柱建物の前後関係についてだが、竪穴建物 SH100 と掘立柱建物 SB1・SB2 の出土遺物に大きな時期差が認められない点と、お互いの主軸が同一である点より、現段階では同時期、すなわち竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落と評価しておきたい。ただ、この点に関しては、検討対象の検出遺構･出土遺物ともにまだ極めて限られているため、今後の調査の進展・蓄積を待って、改めて検討を行う必要がある。

出土遺物がなく､上記の建物群とは主軸が異なる掘立柱建物２棟(SB4･SB5)､柵１条(SA1)については時期は不明と言わざるを得ない。しかし、包含層を含め、今回の調査区での出土遺物が、ほとんどが７世紀～８世紀に限られていることを勘案すると、その範囲の中で納まる可能性が高いと推察される。

参考文献

大﨑哲人　1993「土師器甕の変遷とその背景　―近江型土師器成立への諸段階―」『紀要』第６号　財団法人滋賀県文化財保護協会

葛野泰樹・吉田秀則　1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会

田辺昭三　1981『須恵器大成』 角川書店

第３章 総　括

第１節　調査の成果と課題について

今回の調査は道ノ下遺跡における第２次調査であった。第１次調査は個人住宅建設に伴うものであり、非常に限られた面積での調査であったことを勘案すると、今回の調査は当該遺跡ならびに芹川流域の古代史を解明する上で貴重な調査成果を得ることができたと言える。ここでは、改めて今回の調査成果を振り返りつつ、若干の検討を加え、まとめとしたい。

(1) 道ノ下遺跡と芹川の関わり（図 36）

まず、今回の調査で、道ノ下遺跡周辺の自然環境を形成してきた要因について、考古学的な知見を得ることができた。調査前の知見として、「地理的環境」の項でも触れたが、道ノ下遺跡は芹川の左岸に位置し、芹川が形成する扇状地の扇端部となる標高約 100 ｍの湧水帯に位置する。湧水帯ということもあり、周辺には東沼波井などの複数の用水路が走っているが、これは東部で接する大堀で芹川から取水されたものであり、東沼波の東端付近に入ったところで放射状に分岐している。この分岐部分一帯は畑が多いことを考え合わせると、この用水路沿い一帯に、かつて芹川の洪水が押し寄せたことがあったと推定された。その推定を裏付けるように、調査地一帯の地割は、東に 31° ～ 34° 程度振る犬上郡条里の地割ではなく、様々な方向を向いたものであり、かなり不規則な形状となっている。このように、遺跡の立地と周辺に網状に広がる用水路、不規則な地割の状況などを勘案すると、道ノ下遺跡周辺の自然環境を形成してきた要因として、芹川の洪水との関わりが予測される状況であった。調査の結果、それらの予測を裏付けるように、東西方向の自然流路が複数確認された。自然流路は遺構面である基盤層で確認されるものもあれば、上層の包含層においても確認されるものもあり、当該地が断続的に芹川の影響を受けている状況が明らかにされた。このような、自然環境を背景に、道ノ下遺跡の古代集落は発展したのである。

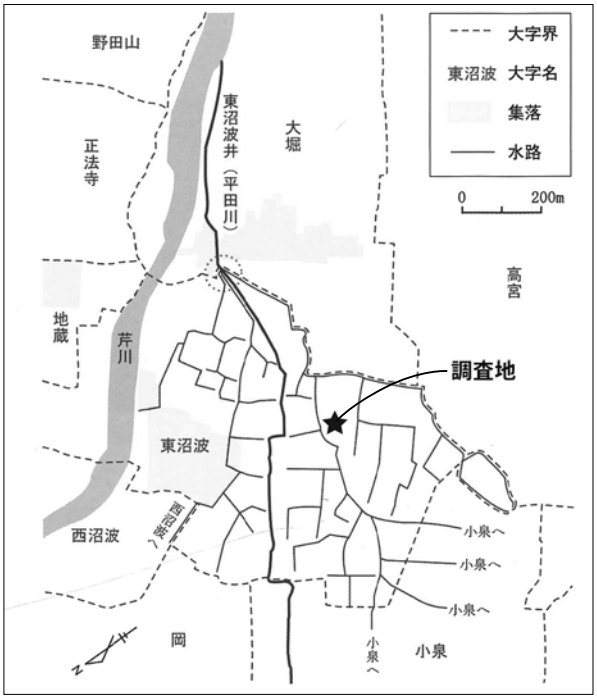


図36　東沼波井の水掛り（『新修彦根市史』第10巻景観編より）

(2) 道ノ下遺跡の古代集落の様相と今後の課題

今回の発掘調査では、調査区全域で複数の竪穴建物と掘立柱建物、土坑や小穴などが確認された。その中で主体となるのは、7 世紀後半から 8 世紀にかけての集落跡である。竪穴建物 2 軒（SH100・SH235）と掘立柱建物 5 棟（SB1・SB2・SB3・SB6・SB7)、柵 1 条（SA2）と複数の土坑や小穴などで構成されており、竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落である。建物・柵の主軸は犬上郡の統一条里と異方向の N − 30° ～ 34° − W を主体としており、この方位は、現地に残る地割の方位とも異なる。今回検出された竪穴建物・掘立柱建物は全て調査区端にかかっているため、建物プランや規模の全容がわかるものがないが、SB1・SB2・SB3 は柱穴が方形で直径 0.8 m前後と比較的大きく、柱間がほぼ規則的で、柱通りも良好な規格制をもった大型建物ということができる。また、建物の隅が検出されている SB2 と SB3 の隅柱は柱穴が深く、底部にわずかながら小礫が確認されており、何らかの基礎固めが行われていた可能性も想定される。これら 3 棟の掘立柱建物は柱穴の切り合い関係より SB1 → SB2 → SB3 の順番に建て替えが行われており、集落の存続期間が一定期間あったことを想起させる。集落の範囲だが、SB6 と SB7、SA1 より北西側には、建物遺構が広がっていないため、これらの建物・柵のラインが集落の北西側縁辺部と考えられる。これより南東側と SB1・SB2・SB3・SH100 の建物群より北西側の範囲に当該集落の関連遺構が広がっていると推測される。この範囲は、今回の宅地造成工事の宅地部分にあたり、今後調査の機会があれば更なる集落の様相を掴むことができるであろう。

最後に、ここまで整理してきた道ノ下遺跡の古代集落について、周辺の遺跡の状況を加味して若干の検討を加えたい。道ノ下遺跡の東方約 500 mには、古代幹線道路である東山道と鳥籠駅推定地の大堀山が位置する。この東山道に沿うように周辺には犬上郡における重要遺跡が数多く存在している。まず、東山道の西方に目を向けると、犬上郡における中心的な白鳳寺院である竹ヶ鼻廃寺（竹ヶ鼻廃寺遺跡）と高宮廃寺（遊行塚遺跡）の推定地が位置し、その間に挟まれるように、在地の有力氏族の居宅とも評価される丁田遺跡が位置している。竹ヶ鼻廃寺は湖東三郡でも最古クラスの瓦が出土し、創建瓦に採用された山田寺式の瓦は郡内や湖東周辺の寺々に波及した。また、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、3 次調査で大規模な掘立柱建物群が見つかっており、犬上郡の郡衙推定地となっている。高宮廃寺では藤原宮式の瓦が採用されており、藤原宮の造営に関わった有力氏族との関連が推測される。次に、東山道の東方に目を向けると八反切遺跡や藤丸遺跡が位置する。八反切遺跡では、8 世紀後半～ 9 世紀前半の掘立柱建物による集落が確認されている。藤丸遺跡では、7 世紀後半から 8 世紀前半の竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落が確認されており、犬上郡の十一郷の一つである高宮郷に関わる集落と推定されている。今回の道ノ下遺跡の調査では、7 世紀後半から 8 世紀にかけての集落跡を確認したが、集落の範囲も建物の規模・配置などもまだまだ不明な点が多い。また、墨書土器などの特殊な遺物も出土していないため、現段階では、より具体的な集落像が言及できない。しかし、今後の検討の方向性も含めて、あえて言及するならば、竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落という点、集落を構成する建物の一部が規格制の高い大

型掘立柱建物で構成されるという点より、藤丸遺跡の様相に近いと言うことができよう。藤丸遺跡は高宮郷に関わる推定地と前述したが、犬上郡の郷については『和名類聚抄』に十一郷が記されており、その中に、道ノ下遺跡が位置する沼波の地名も記されている。沼波に位置する遺跡は、下沢遺跡・東沼波遺跡・沼波館跡、そして今回の道ノ下遺跡の４遺跡であるが、当該期の古代集落が確認されたのは今回の調査地が初めてである。そういった意味では、今回の調査地周辺が、沼波郷に関わる遺跡の候補地の一つであることは間違いないであろう。ただ、今回の調査成果は極めて断片的であることも事実である。集落の規模や存続期間、竪穴建物と掘立柱建物の併存の有無、建物の内容・規模・配置など、今後更なる慎重な検討を要する課題が多いことも確かである。

参考文献

大﨑哲人　1989「滋賀県下における掘立柱建物集落の成立契機について」『紀要』第２号　財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県立安土城考古博物館　2006『扇状地の考古学』

高橋美久二　2007「律令国家と近江」『新修彦根市史　第１巻通史編古代・中世』彦根市

田中勝弘　2012「古代集落と地域開発（3）―犬上川流域とその周辺の開発経緯の諸相―」『淡海文化財論叢　第４輯』淡海文化財論叢刊行会

彦根市教育委員会　1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第４次)』彦根市埋蔵文化財調査報告書第８集

彦根市教育委員会　1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 13 集

彦根市教育委員会　1993『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 21 集

彦根市教育委員会　2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 37 集

彦根市教育委員会　2006『八反切遺跡』彦根市埋像文化財調査報告書第 38 集

彦根市教育委員会　2009a『八反切遺跡Ⅱ』彦根市埋像文化財調査報告書第 42 集

彦根市教育委員会　2009b『丁田遺跡Ⅰ』彦根市埋像文化財調査報告書第 43 集

彦根市教育委員会　2010a『竹ヶ鼻廃寺遺跡第４次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 45 集

彦根市教育委員会　2010b『竹ヶ鼻廃寺遺跡第５次・第６次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 46 集

彦根市教育委員会　2011『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋像文化財調査報告書第 48 集

彦根市教育委員会　2013『丁田遺跡Ⅲ』彦根市埋像文化財調査報告書第 53 集

彦根市教育委員会　2013『藤丸遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 53 集

彦根市教育委員会　2014『藤丸遺跡Ⅳ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 55 集

彦根市教育委員会　2014『平成 24 年度　彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 58 集

彦根市教育委員会　2018『藤丸遺跡第 5･6･7 次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 78 集

広瀬和雄　1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 22 集

表６　出土遺物一覧

掲載No.	出土地点	器種	器形	部位	残存率	法量(cm)			胎土	焼成	色調				備考
						口径(長さ)	底部径(幅)	器高(厚さ)			外面		内面		
1	包含層	土師器	坏	口縁部～底部	3/10	13.0	10.9	3.0	密	良	7.5YR	7/6橙	7.5YR	7/6橙	
2	包含層	土師器	坏	口縁部	1/12	—	—	—	密	良	2.5Y	5/2暗灰色	7.5YR	6/6橙	
3	包含層	土師器	鍋	口縁部	1/12	24.0	—	(3.6)	密	良	10YR	8/4浅黄橙	7.5YR	7/6橙	
4	包含層	土師器	甕	口縁部～体部	1/12	15.6	—	(7.5)	密	良	10YR	6/3にぶい黄橙	10YR	7/4にぶい黄橙	
5	包含層	土師器	鍋	口縁部	1/12	42.0	—	(3.9)	密	良	7.5YR	8/4浅黄橙	7.5YR	8/4浅黄橙	
6	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	7/10	12.1	—	3.7	密	良好	5Y	7/1灰白	N	7/0灰白	口縁部外面に自然釉(5Y6/2灰オリーブ)
7	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	3/10	17.4	—	3.0	密	良好	2.5Y	6/2灰黄	N	7/0灰白	
8	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	1/5	12.0	—	1.0	密	良好	5Y	7/1灰白	5Y	7/1灰白	
9	包含層	須恵器	坏身	口縁部～底部	7/10	12.2	7.0	3.7	密	不良	5Y	8/1灰白	5Y	8/1灰白	
10	包含層	須恵器	坏身	底部～体部	1/10	—	8.2	(5.0)	密	良好	N	8/灰白	N	8/灰白	
11	包含層	須恵器	坏身	底部～体部	1/10	—	6.8	(3.7)	密	良好	5N	6/1灰	N	6/灰	
12	包含層	須恵器	坏身	口縁部～底部	3/5	13.8	9.4	4.5	密	やや不良	2.5Y	8/1灰白	5Y	8/1灰白	胎土に4mm大の粒子を微量含む
13	包含層	須恵器	坏身	完形	49/50	14.7	9.4	4.4	密	良好	2.5Y	6/1黄灰	2.5Y	8/1灰白	歪みあり
14	包含層	須恵器	鉢か	口縁部	—	—	—	—	密	良好	7.5Y	7/1灰白	2.5Y	6/2灰黄	
15	包含層	須恵器	鉢か	底部～胴部	—	—	11.0	(9.4)	密	良好	5Y	6/1灰	5Y	6/2灰オリーブ	
16	包含層	瓦	平瓦	—	—	10.6	7.1	2.1	やや粗	やや不良	2.5Y	8/2灰白	2.5Y	8/2灰白	胎土に11程の粒子を微量含む。
17	包含層	瓦	平瓦	—	—	8.0	8.0	1.8	密	良	5Y	7/1灰白	5Y	7/1灰白	
18	遺構面精査時	土師器	甕	口縁部	1/12	24.0	—	(2.9)	密	良	7.5YR	7/8黄橙	7.5YR	7/8黄橙	
19	遺構面精査時	土師器	甕	口縁部～頸部	1/12	24.1	—	(6.9)	密	良	10YR	7/6明黄褐	7.5YR	7/6橙	
20	遺構面精査時	土師器	鍋	口縁部	—	—	—	—	密	良	10YR	7/4にぶい黄橙	7.5YR	7/6橙	
21	遺構面精査時	須恵器	坏身	口縁部	—	—	—	(2.8)	密	良	N	8/灰白	N	8/灰白	
22	遺構面精査時	瓦	平瓦	—	—	3.0	6.2	2.2	密	やや不良	10YR	8/4浅黄橙	10YR	8/4浅黄橙	胎土10YR6/1褐灰
23	SH100　1層	土師器	甕	口縁部	—	—	—	(2.1)	密	良	10YR	8/3浅黄橙	10YR	8/3浅黄橙	
24	SH100　1層	須恵器	壺	肩部	—	—	—	(2.6)	緻密	良好	N	7/灰白	N	7/灰白	
25	SH100　1層	須恵器	坏蓋	端部	—	—	—	(1.9)	密	良好	2.5Y	7/2灰黄	5Y	7/1灰白	
26	SH100　1層	須恵器	坏身	口縁～体部	1/10	8.2	—	(3.0)	密	良好	N	7/灰白	N	7/灰白	
27	SH100　2層	土師器	坏	口縁～体部	1/10	12.0	—	(2.5)	緻密	良	5YR	6/8橙	5YR	6/8橙	
28	SH100　2層	土師器	皿	口縁部	—	—	—	(1.8)	密	良	7.5YR	5/4にぶい褐	5YR	6/8橙	
29	SH100　2層	土師器	甕	口縁部	—	—	—	(1.7)	密	良	10YR	5/3にぶい黄褐	10YR	5/3にぶい黄褐	
30	SH100　2層	土師器	甕	口縁部	—	—	—	(2.7)	密	良	10YR	7/6明黄褐	10YR	8/6黄橙	
31	SH100　2層	土師器	甕	口縁部	—	—	—	(3.5)	密	やや不良	10YR	8/2灰白	10YR	8/2灰白	
32	SH100　2層	土師器	甕	口縁部	—	—	—	(3.0)	密	良	10YR	7/3にぶい黄橙	2.5Y	4/1黄灰	
33	SH100　2層	土師器	壺	口縁部～体部	1/12	11.8	—	(8.6)	密	良	10YR	8/4浅黄橙	10YR	8/4浅黄橙	
34	SH100　2層	土師器	甕	口縁～胴部	1/10	12.8	—	(7.2)	密	良	10YR	4/2灰黄褐	10YR	5/2灰黄褐	
35	SH100　2層	金属製品	—	—	—	6.0	7.8	0.4	—	—	5YR	4/6赤褐色	7.5YR	4/6褐色	
36	SP154　1層	土師器	坏か	口縁部～底部	1/10	15.6	8.4	3.6	密	良	2.5Y	6/2灰黄	2.5Y	7/1灰白	表面彩色(5YR5/6明赤褐)塗布
37	SP154　1層	土師器	坏	口縁部	—	—	—	(1.7)	緻密	良	5YR	7/6橙	(胎土)10YR	8/2灰白	
38	SP150　1層	土師器	坏	口縁～底部	9/20	15.0	6.4	3.7	緻密	良	7.5YR	5/8明褐	(胎土)10YR	7/2にぶい黄橙	
39	SP150　1層	須恵器	蓋	口縁部	—	—	—	(1.1)	密	不良	10YR	8/4浅黄橙	2.5Y	8/3淡黄	
40	SP151　1層	須恵器	坏蓋	口縁部	—	—	—	(1.1)	密	良	N	7/灰白	2.5Y	5/1黄灰	
41	SP147　2層	須恵器	皿	口縁部	1/12	20.8	16.6	1.8	密	良	N	7/灰白	2.5Y	5/1黄灰	
42	SP170　1層	土師器	甑か	口縁部	—	—	—	(5.2)	密	良	10YR	8/4浅黄橙	10YR	7/6明黄褐	
43	SP143　1層	瓦	丸瓦	—	—	7.3	6.3	1.6	密	不良	2.5Y	8/1灰白	2.5Y	8/1灰白	
44	SP111　1層	土師器	坏	口縁部～底部	3/10	15.0	5.0	3.7	緻密	良	7.5YR	7/8黄橙	7.5YR	7/8黄橙	
45	SP111　1層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	2/5	11.4	—	(2.5)	密	やや不良	N	7/灰白	2.5YR	8/1灰白	
46	SK161　1層	須恵器	坏蓋	口縁部	—	—	—	(2.5)	密	良	N	6/灰	N	6/灰	
47	SK178　1層	土師器	甕	口縁部	—	—	—	(1.6)	密	良	7.5YR	8/3浅黄橙	7.5YR	8/3浅黄橙	
48	SP219　1層	須恵器	坏身	口縁部	—	—	—	(2.2)	密	良好	7.5Y	5/1灰	N	7/灰白	
49	SD570　1層	古式土師器	高坏	脚部	—	—	—	(7.0)	密	良	5YR	7/6橙	5YR	7/6橙	
50	SK612　1層	石製品	砥石	—	—	11.5	6.7	3.8	—	—	7.5Y	6/1灰	7.5YR	6/1灰	重量(443.0g)、砂岩
51	SD570　1層	土製品	焼成粘土塊	—	—	—	—	—	密	—	7.5YR	6/8橙	7.5YR	6/8橙	胎土に5mm程の粒子を微量含む。
52	SD570　1層	土製品	焼成粘土塊	—	—	4.3	3.5	1.2	密	—	2.5YR	3/1暗赤灰	5YR	5/6明赤褐	
53	SD570　1層	土製品	焼成粘土塊	—	—	2.6	2.3	1.3	密	—	2.5YR	3/1暗赤灰	5YR	5/6明赤褐	

※（数値）は残存値

図版一

調査前風景〔南東より〕

調査区第１区全景〔垂直写真〕

図版一

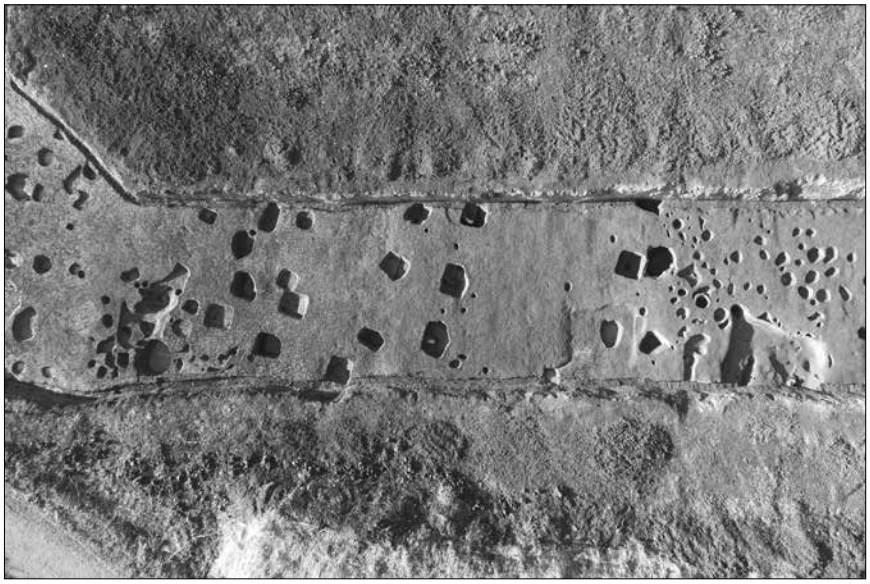
調査区全景〔南より〕

図版二

自然流路（NR74・NR79・NR80）〔北東より〕

建物群（SH100・SB1・SB2・SB3）〔南西より〕

図版三



建物群（SH100・SB1・SB2・SB3）〔垂直写真〕

建物群（SH100・SB1・SB2・SB3）〔北東より〕

竪穴建物（SH100）検出状況〔北西より〕

竪穴建物（SH100）
土層断面〔北西より〕

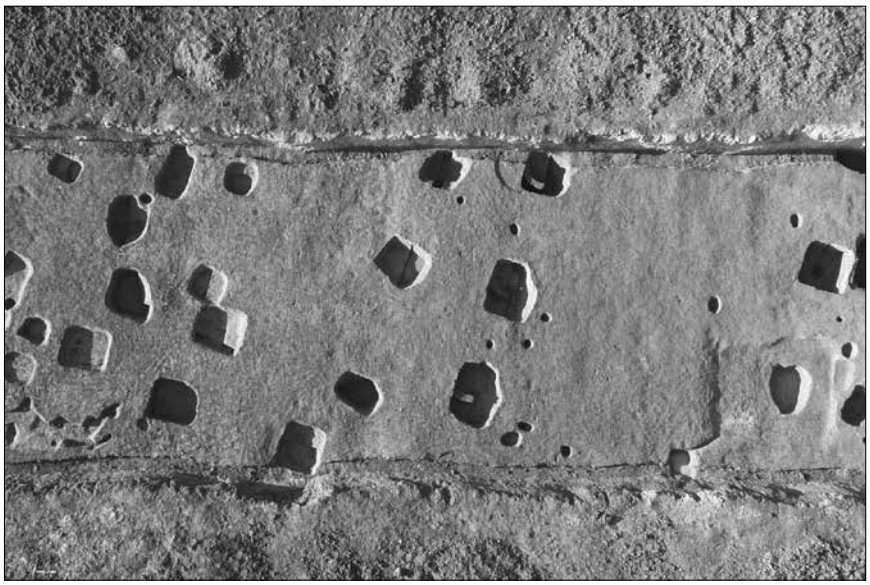
竪穴建物（SH100）
遺物出土状況〔北西より〕

竪穴建物（SH100）
金属製品（35）
出土状況〔北西より〕

図版五

竪穴建物（SH100）
全景〔北西より〕

竪穴建物（SH100）
全景〔垂直写真〕



掘立柱建物群
（SB1・SB2・SB3）
〔垂直写真〕

掘立柱建物（SB1）
全景〔南東より〕

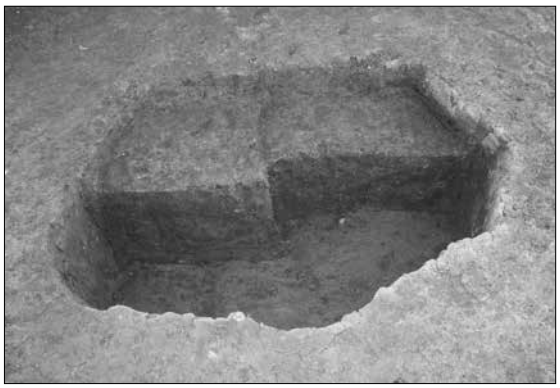
掘立柱建物（SB2）
全景〔南東より〕

掘立柱建物（SB3）
全景〔南東より〕

図版七

柱穴（SP152）土層断面〔北東より〕

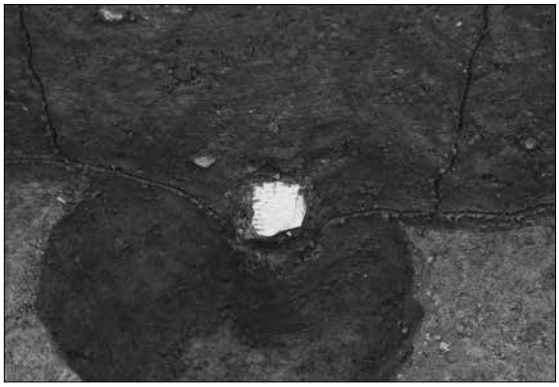
柱穴（SP153）土層断面〔北東より〕



柱穴（SP154）土層断面〔北東より〕

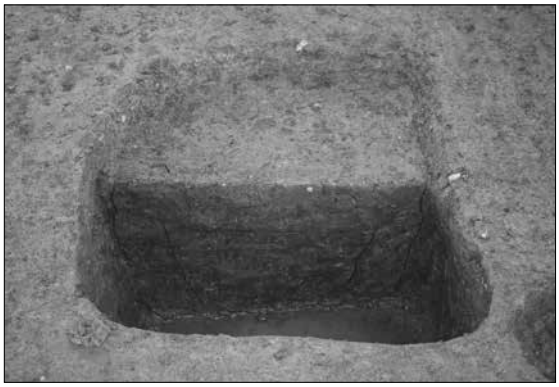
柱穴（SP157）土層断面〔北東より〕

柱穴（SP156）土層断面〔北東より〕



柱穴（SP156）遺物出土状況〔北東より〕

柱穴（SP146）土層断面〔南西より〕

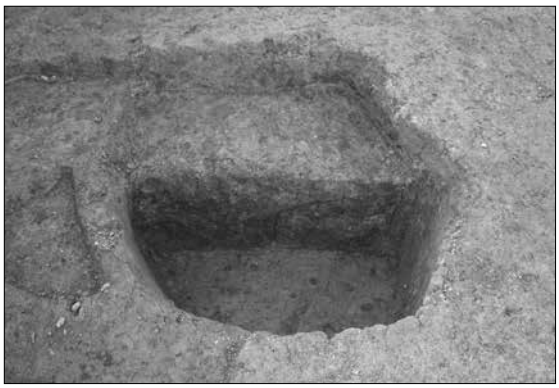


柱穴（SP148）土層断面〔南西より〕

柱穴（SP147）土層断面〔南西より〕

柱穴（SP147）遺物出土状況〔南西より〕

柱穴（SP149）土層断面〔南東より〕



柱穴（SP150）土層断面〔北東より〕

柱穴（SP150）遺物出土状況（1）〔北東より〕

柱穴（SP150）遺物出土状況（2）〔北東より〕

柱穴（SP170）土層断面〔北東より〕

柱穴（SP170）遺物出土状況〔北東より〕

図版九

柱穴（SP151）土層断面〔北東より〕

柱穴（SP140）土層断面〔南西より〕

柱穴（SP141）土層断面〔南西より〕

柱穴（SP142）土層断面〔南東より〕

柱穴（SP143）土層断面〔北東より〕

柱穴（SP144）土層断面〔北東より〕

柱穴（SP145）土層断面〔北東より〕

柱穴（SP145）遺物出土状況〔北東より〕

掘立柱建物（SB4）全景〔北東より〕

掘立柱建物（SB5・SB6）全景〔北より〕

掘立柱建物（SB7）全景〔北西より〕

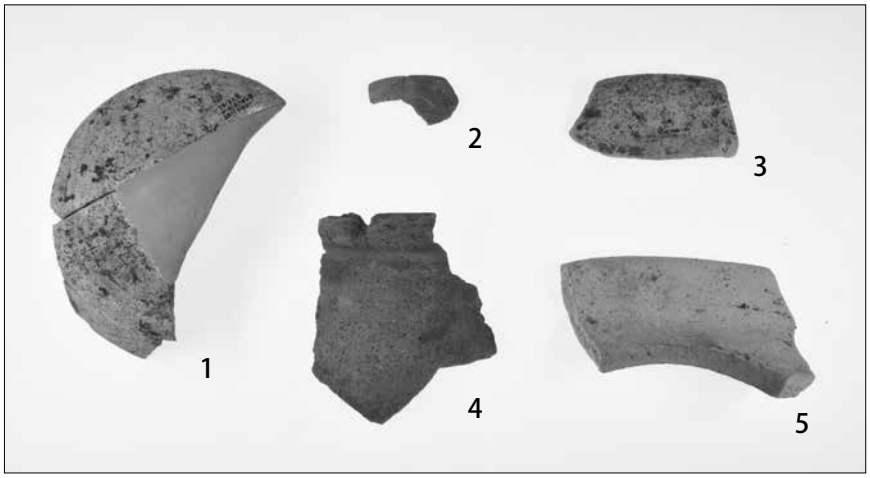
柵（SA1）全景〔南東より〕

柵（SA2）全景〔北西より〕

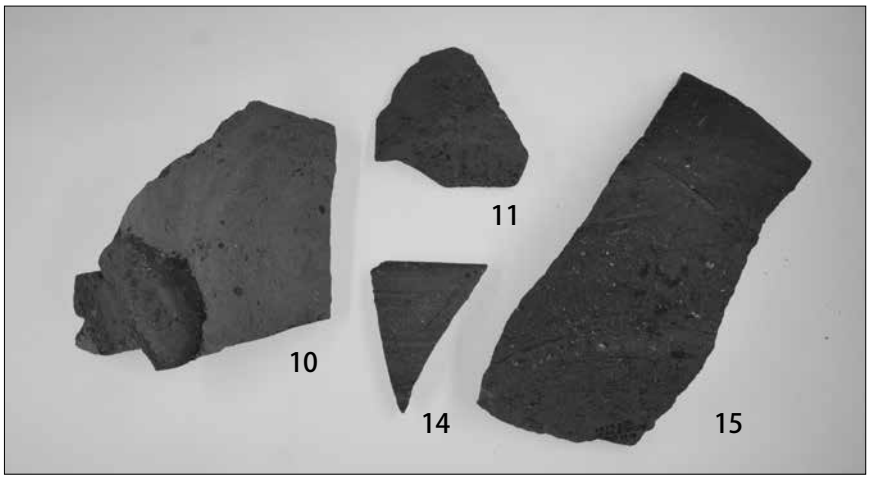
土坑（SK161）土層断面〔北東より〕

小穴（SP111）遺物出土状況〔北東より〕

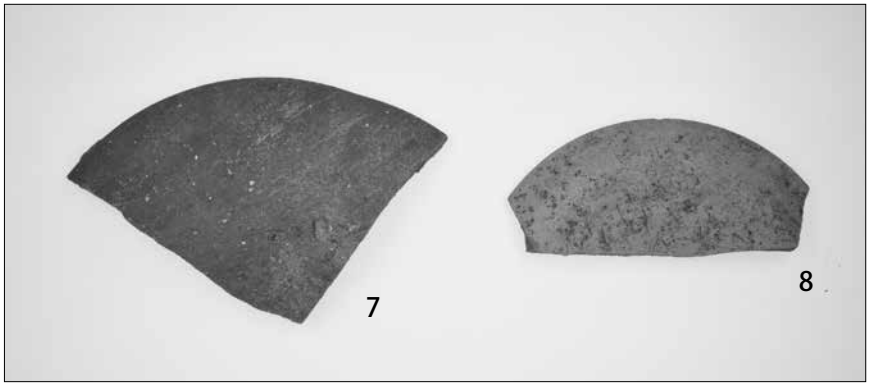
小穴（SP126）遺物出土状況〔北東より〕



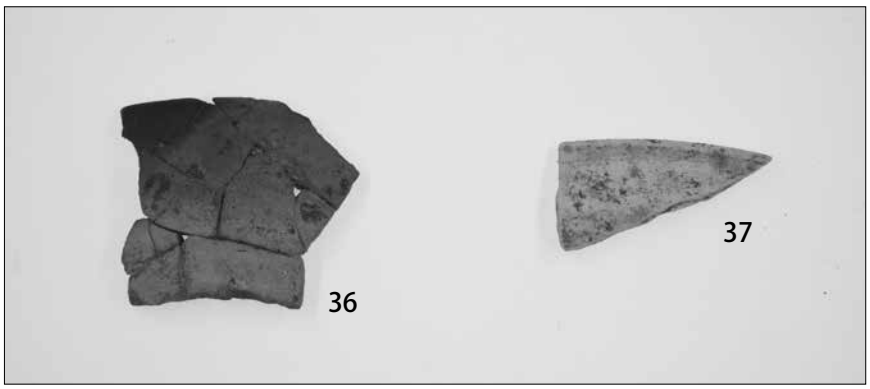
包含層出土遺物



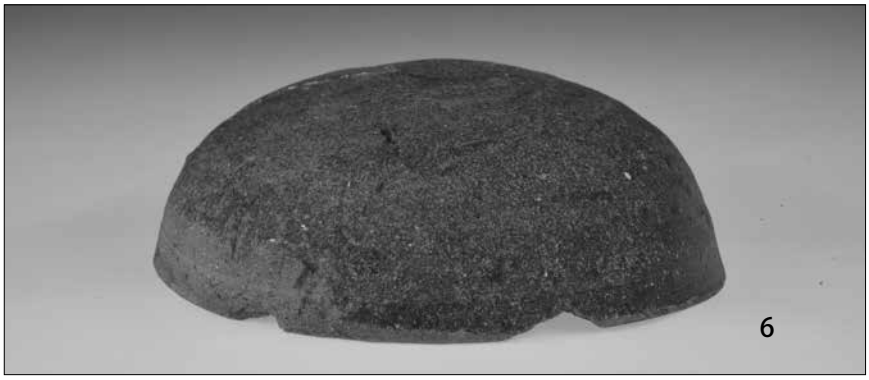
包含層出土遺物



包含層出土遺物

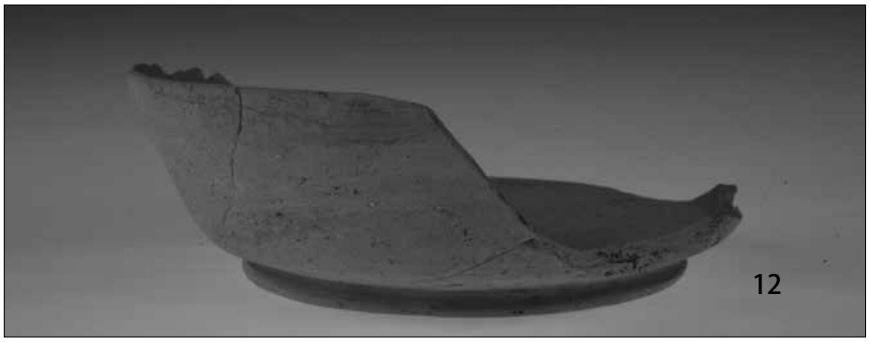


SP154 出土遺物

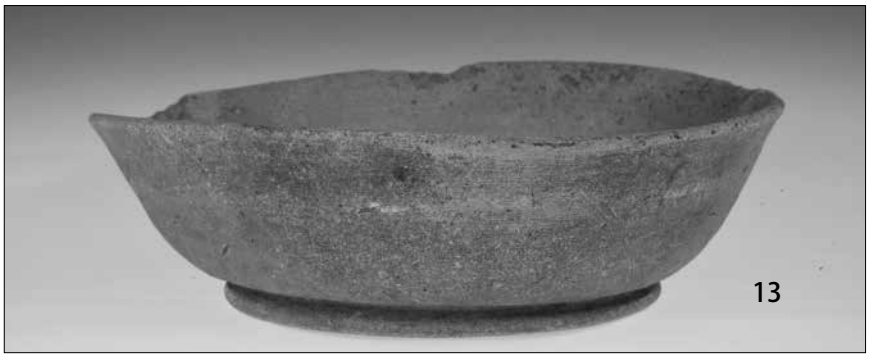


包含層出土遺物

包含層出土遺物

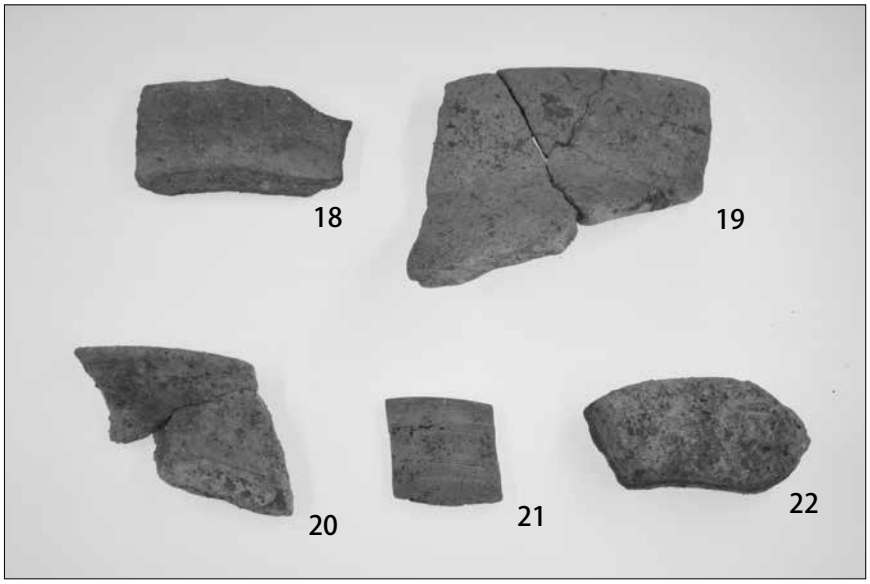


包含層出土遺物

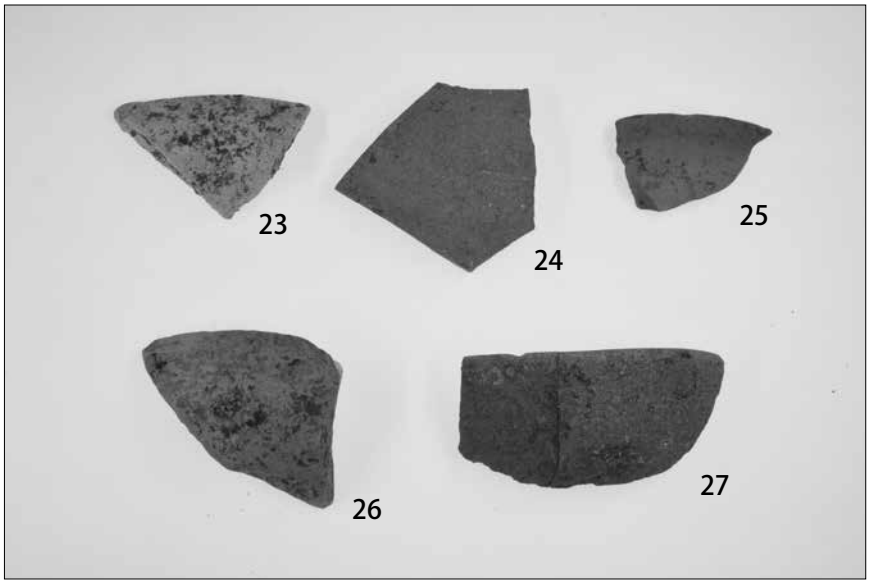


包含層出土遺物

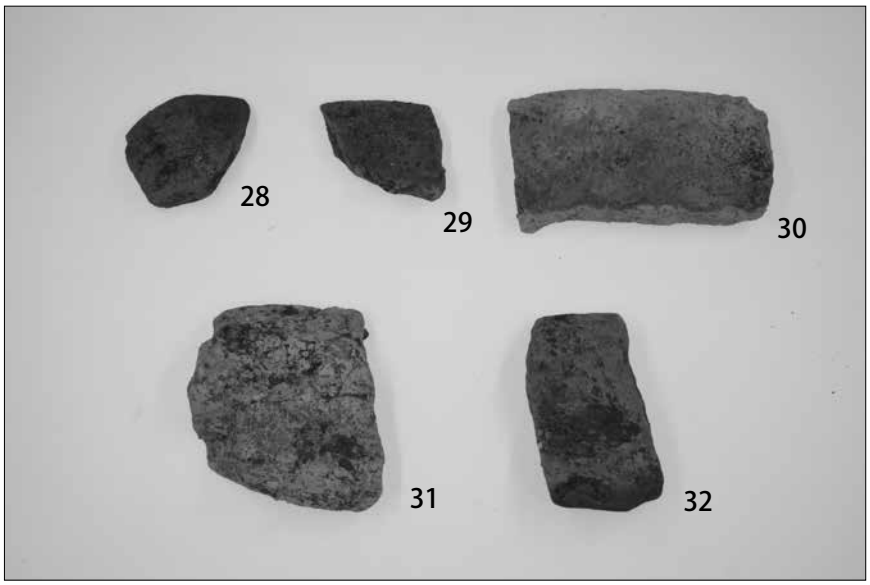
SP150 出土遺物



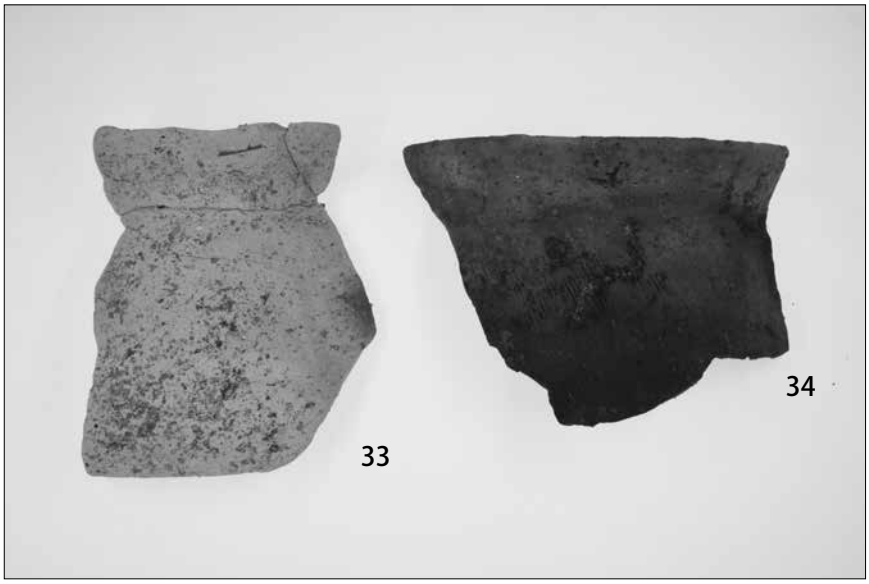
遺構面精査時出土遺物



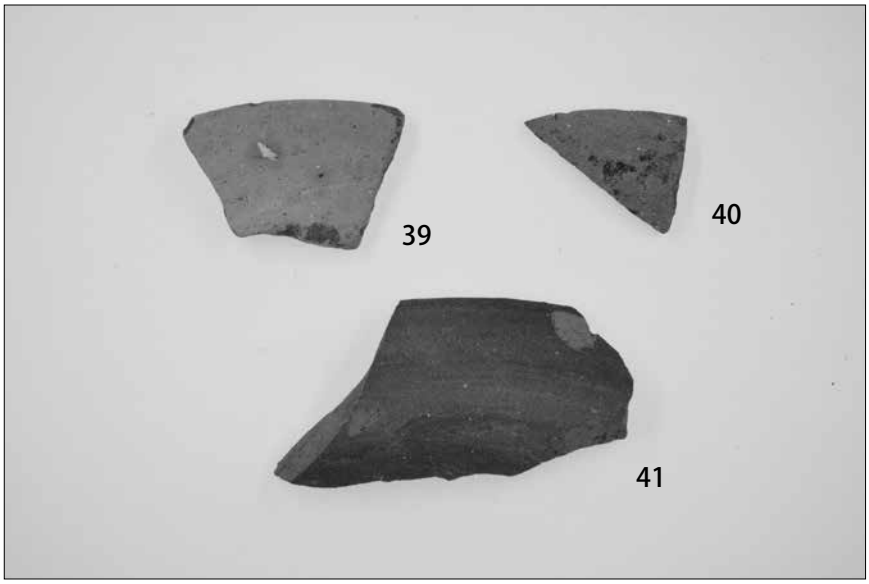
SH100 出土遺物



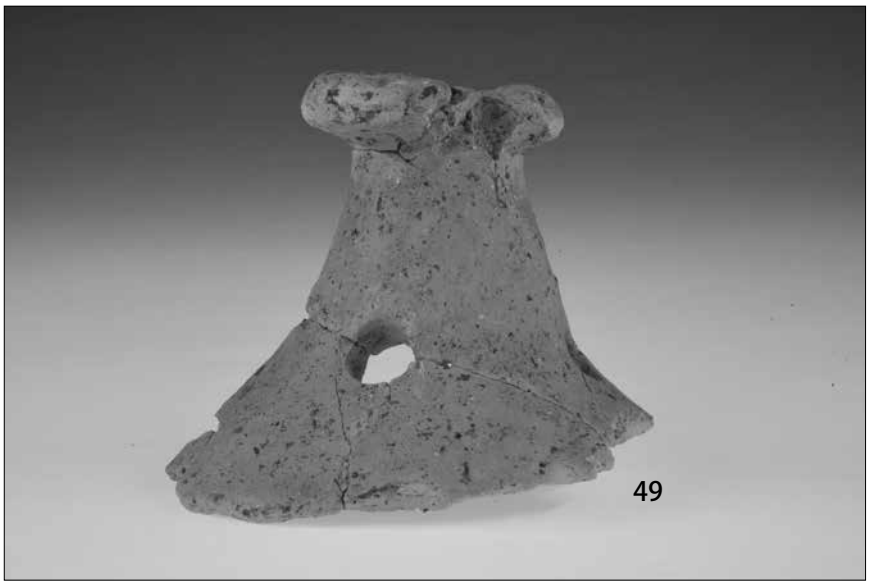
SH100 出土遺物



SH100 出土遺物

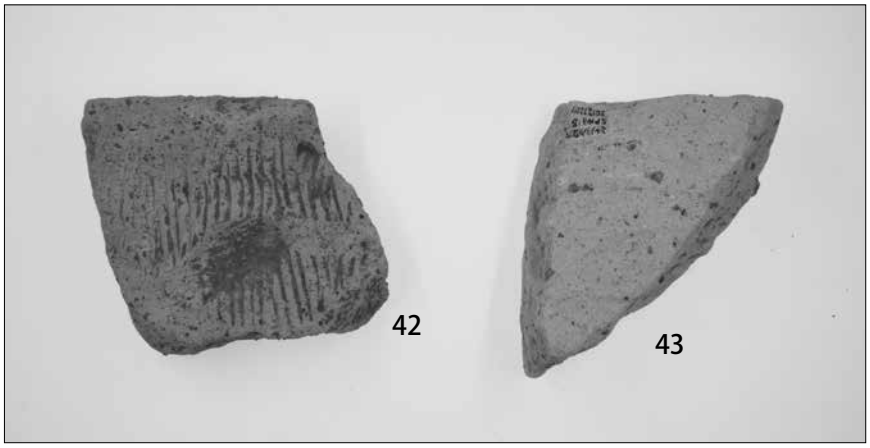


SP150：39
SP151：40
SP147：41
出土遺物

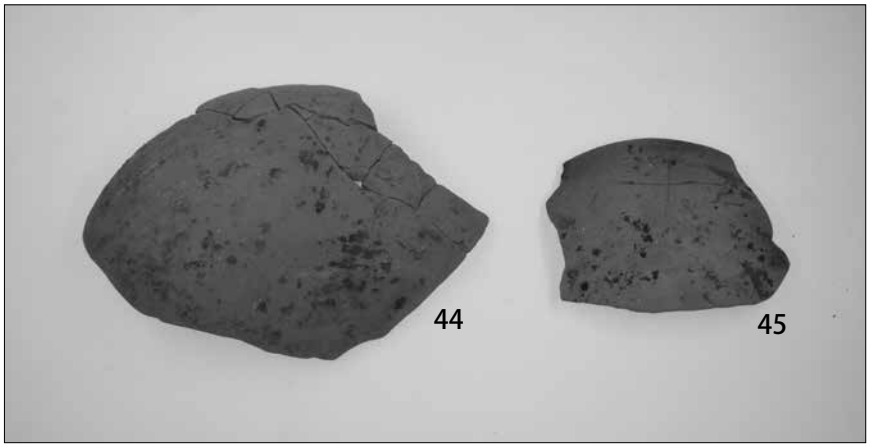


SD570 出土遺物

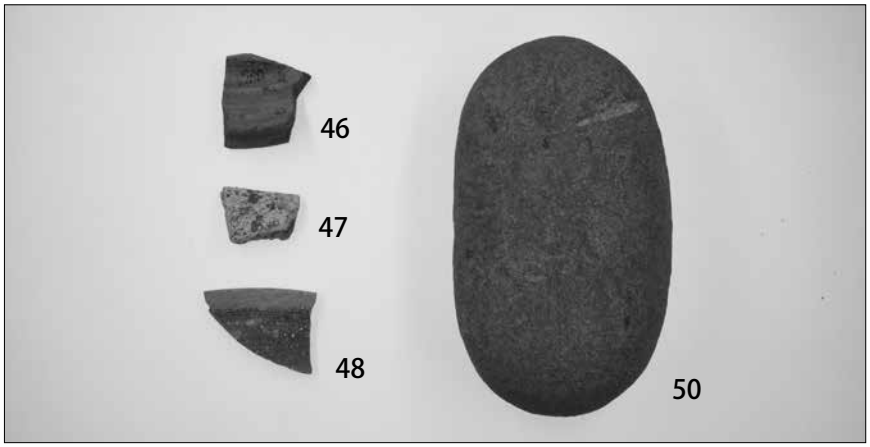
図版一五



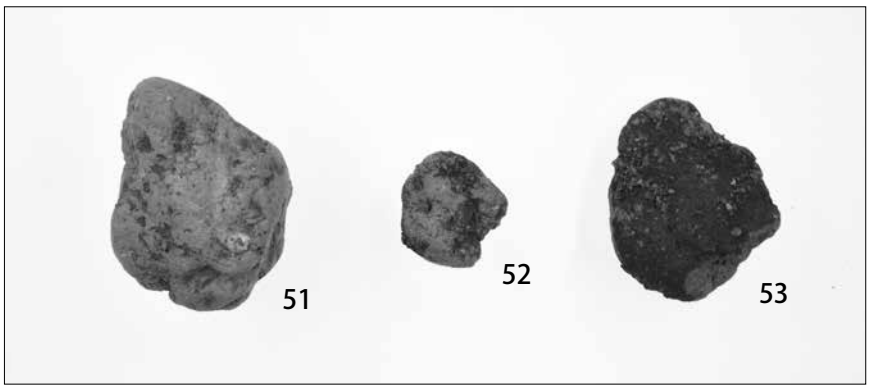
SP170:42
SP143:43
出土遺物



SP111　出土遺物



SK161:46
SK178:47
SP219:48
SK612:50
出土遺物



SD570　出土遺物

SH100 出土金属製品（35）表面

SH100 出土金属製品（35）裏面

報　告　書　抄　録

ふりがな	みちのしたいせきだい２じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	道ノ下遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	81
編著者名	林 昭男
編集機関	彦根市 市長直轄組織 文化財課
所在地	〒522-0001　彦根市尾末町１番38号　　TEL 0749-26-5833
発行年月日	20200331

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
道ノ下遺跡（みちのしたいせき）	彦根市（ひこねし） 東沼波（ひがしのなみ） 町地先（ちょう）	25202	043	35度 14分 48秒	136度 15分 30秒	2,015㎡	20170615 ～ 20180329	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道ノ下遺跡	集落	奈良時代 ～ 平安時代前期	竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・小穴	土師器・須恵器・平瓦・石製品・金属製品・焼成粘土塊	芹川左岸における奈良時代から平安時代前期の集落

彦根市埋蔵文化財調査報告第81集

道ノ下遺跡第２次発掘調査報告書

－宅地造成工事に伴う発掘調査－

令和元年（2020年）３月発行

編集・発行：彦根市
市長直轄組織文化財課
彦根市尾末町１番38号
℡ 0749-26-5833

印刷・製本：近江印刷株式会社

MITINOSITA　SITE

2020

道ノ下道遺跡第２次発掘調査報告書

―宅地造成工事に伴う発掘調査―

令和二年三月

彦根市